
スピリチュアル・ストーリー

天宮 瑞姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スピリチュアル・ストーリー

【Nコード】

N2817F

【作者名】

天宮 瑞姫

【あらすじ】

祖父の地下室で見つけた一冊の本。中身は全くの白紙だった。不思議に思った瑠衣が調べてみると、そこには祖父からのメッセージが隠されていた。その警告を無視した時、突然精霊と名乗る赤毛の少年が現れて……

プロローグ（前書き）

ご無沙汰しています。天宮瑞姫です。
亀並み更新になるかも知れませんが、どうぞ宜しく願います。

プロローグ

「うわあ、こんなに沢山……」

薄暗い地下に背の高い本棚がズラリと立っていた。その膨大な本の量に思わず言葉を失う少女が居た。

手探りでようやく電気のスイッチを押す。その光に照らされ、無数の本の帯が彼女の翡翠の目に入った。

恐る恐る通路に入り、大まかにどんな本が置かれているのかを確認する。主にはありとあらゆる伝説や伝記のようだ。

祖父が実際に存在しないような存在を信じ、探検に出掛けたりしていたそうだ。それもまだ自分が生まれていない、元気な頃にはの話だが。

つい先日、祖父は八十の齢を数えて静かに息を引き取った。その遺品が地下室に残されているとの事で、どれだけの規模なのか見えてきて欲しいと祖母に頼まれて少女はやって来たのだ。

しかしこれだけの本や本棚などを処分するにはかなりの時間と費用を要するだろう。

祖父はこれら全てを読みつくしていたのだろうか。今となっては分からない話だ。

「これじゃあ当分処分に手は付けられないね……」
数々の本を見て呟く。

ぱらぱら……と砂埃が何処からとも無く落ちてきた。

「ひいっ！」

少女は悲鳴を上げた。長いブロンズヘアが激しく揺れた。

「もう、びっくりさせないでよ……」

乱れてしまった髪を手ぐしで直し、目の前の本棚に目をやった。

そこには他の本と変わった本が一冊だけあった。背帯にタイトルが書かれていない、不思議な本を。

引きつけられるように少女はその本を手を取った。表紙にさえ夕

イトルが書かれていない。

「一体何の本なのかしら？」

ページを捲ってみる。中身すら白紙だった。

これってもしかして、今話題のシークレットペンとかで秘密に書かれたものなのかしら？ だったら何が書いてあるのか見えるはずもないし、よほど隠したいものだったのね

そう思えば中に何が書かれているのか気になってくる。

「よし！」

部屋にはまだ買ったばかりのペンライトがある。それを使えばシークレットペンの文字は読めるはずだ。

彼女は期待に胸を躍らせ、本を握り締めて地下室を後にした。

地下室を出ると、祖母が声をかけた。

「どうだったかい？ 地下は」

「本が無数に置かれているわ。まるで図書館並みよ。到底片付けられそうに無いわ」

「そうかい。あの人は地下室に籠もっては必ずそれは存在すると信じて資料を調べていたのかねえ」

懐かしむように祖母が言った。

「それで、瑠衣ちゃん、その本は取ってきたのかい？」

少女、瑠衣はこくりと頷いた。

「これ、中身が白紙なのよ。もしかしたらおじいちゃんのメッセージが隠されているかも。解読してみるよ」

「もしそうだったら是非見せておくれ」

「勿論」

瑠衣は鼻歌を歌いながら階段を上った。奥にある自室のドアを優雅に開けて、そして閉めた。

部屋はピンクで統一された家具で女の子らしく飾られていた。学習机に座って本を置き、ペン立てに立ててあったライトを取り出す。白紙の1ページ目にライトを当ててみる。予想通り、メッセージが隠されていた。

『もしわしが死んだ時には、この本を開けてはならない……』
妙なメッセージだと瑠衣は眉を顰める。

開けてはならないのなら鍵ぐらいしておいて欲しいものだ。それに現にここで開けているが、何も起こる気配は無い。

ただの脅しか。

しかしこれは脅しでは無かった。

次のページを開くと、真っ白の紙にライトを当てる事無く文字が浮かび上がり出した。それも炎の焦げによって刻まれたように。

文字が浮かび出しては来たが、自分達の普段使う言葉では無かった。無数の英語のようだ。

瑠衣は既に中学校に入学し、英語と言う教科を習ってはいたものの、成績はそこそこでスラスラとは読めない。

解読するには辞書が必要だ。

そうやって立ち上がるうとしたが、椅子に固定されたかのように動けなかった。更に顔の方向すら変えられない事に気付いた。目がひたすら英語の文を捉える。

口が、勝手に読み解き始める。

「この世界を均衡に保つために生まれし、火、水、土、風、雷の精霊達。そして、この本に封印されし炎の使い手よ……」

身体のコントロールが効かない以上、止められない。

この先に何が起こるのかと思うと恐怖心が沸き起こった。異常を知らせたくとも知らせる術はない。

警告を無視したら、どうなるの？

「今ここに時は来た。姿を現せ、炎の精霊よ！」

次の瞬間、本から眩い光が放たれた。それと同時に一つの影が飛び出す。

それが瞬く間に人の姿を形どっていく。

光が止み、そこに居たのは炎を連想させる真紅の髪をした少年だった。年齢はさほど変わらなさそうな外見だが。

目が開き、闇すらも照らし映すような黄色の瞳が露になった。

机の上に着地した少年がじつと瑠衣を見つめていた。瑠衣の方も目を丸くして彼を見ていた。

「……誰？」

ようやく口に出せた言葉がそれだった。

「誰、だと？」

鋭く睨まれ、瑠衣は肩を縮める。

「俺を目覚めさせておいて、誰だと？封印の鍵となっていた言葉を解き放っておいて誰は無いだろ」

「知らない！だって読めない言葉を口が勝手に読んで、そしたらあんたが突然現れたんだから！」

「……」

呆れたように少年はため息を着いた。

「教えてやるよ。俺の名はファイ。五大精霊の一人、炎の精霊だ」

「精、霊？」

そんな馬鹿な。御伽話の中でしかその存在を確認出来ないあの精霊だと言うのか。

「封印を解いたと言う事は、その資格があるとこの本に選ばれたと言う事だ。つまり、俺の契約者にふさわしいって事だ」

「契約者？何それ」

「……お前、理解する気ある？」

「全然無い」

そう言うのと彼は机から降りた。そして掌から突然真っ赤な炎を生み出して見せた。

おおおつと瑠衣が歓声を上げ、拍手する。

「凄い！手品の仕掛けどうなってるの？」

「手品じゃねえ！」

何処から出してきたのか、ハリセンで思いっきり叩かれる瑠衣。

「いいか？良く聞け。別に俺は手品師でも科学者でも何でも無い。

大昔から自然のチカラを司ってこの世のバランスを保っている精霊様だ！」

「そう言われましても、俄かには信じられないよ」

「……あーあ、もう来ちまった」

「へ？」

窓の外を眺めながらファイが言った。

「契約をするかしないかは自由。でも、契約をしない場合は」

突然窓ガラスが粉々に砕け散った。凄まじい勢いで何かが部屋に入ってきた。

床に刺さったのは何と齒わたり20センチはあると思われる包丁だった。さすがに身の危険を感じて血の気が失せた思いだった。

途切れた言葉を紡ぐ。

「お前、殺されるぞ」

chapter 1 契約

「こ、殺される……」

「何せ本を開けてしまった主だ。他の奴等からすれば、邪魔者を召還してしまった邪魔者としか思われぬさ」

身体の震えが止まらなかつた。

祖父は知っていたのだ。もしこの本を開けてしまえば、厄介な事に巻き込まれ、命を落としてしまう危険性があると。

それを無視して開けてしまった罰が下されているのだ。

「ほう、おつかいには最適な人形をよこしてきたか」

割れた窓から侵入する一つの影。それはよく市販されている女の子向けの人形だった。背丈こそ小さいものの、サラサラした髪や化粧はリアルだ。

その人形はもう一本包丁を持っていた。あの小さな手でどうやって掴んでいるのかと不思議に思うほど背丈より大きい。

じりじりとその人形は歩み寄ってくる。笑顔で包丁を持ってくるのが尚怖い。

と、突然人形が炎に包まれた。

「そいつに手出しする事は許さねえ」

炎に包まれたにも関わらず、人形が燃え盛る気配は無かつた。毛を逆立て、一歩一歩近づいてくる。

足が震え、身動きが取れなかつた。

人形は止まったかと思いきや、先端を瑠衣に真っ直ぐ向けた。

本当に殺される！

「馬鹿！逃げろ！」

ファイが声を張り上げる。しかし瑠衣は逃げ出せず、ぎゅっと目を閉じた。

「ちっ！」

すぐさま駆け寄ったファイが瑠衣の身体を持ち上げる。それとほ

ば同時に包丁が突き出された。もしそのまま動いていなければ確実に心臓を貫いていた。

ベッドの上に呆然とする瑠衣を降ろし、揺さぶった。

「今の俺には制限がかかっているんだ！それを解くには契約が必要だ！制限がかかっている以上チカラが使えないし、守りたくても守りきれねえ！自分の命が欲しけりやすぐに俺との契約に応じる！」

契約？訳が分からない。

それをしなければ死ぬなんて、ただの脅しにしか聞こえない。

でも、本気だ。あの人形は確実に自分を殺そうと動いている。

もしかすればあの人形は今日の前に居る精霊に操られているだけかも知れない。ただそうやって契約を唆すように。

どちらにしろ、生きるか死ぬかしか無い。そして、生きるためには、彼の言う契約を呑まなければならない。

おじいちゃん、ごめんなさい

「分かった」

静かに言った。

「その契約とか言うものに応じるわ。どのみちこうしなければ助かる術は無いんでしょ」

「ようやくその気になったか」

「それで？どうすればいい？」

「それはな」

人形の切っ先を交わし、瑠衣の元へと来る。

と、彼は瑠衣をベッドに押し倒した。それと同時に人形がこちらへ向かって走ってくる。

騙したなと瑠衣がファイを睨みつけようとした瞬間。彼の顔が近づいた。

唇に柔らかい感触。

「！？」

抵抗したくとも出来なかった。全身の力が抜ける。

唇が離され、彼はニヤリと笑みを浮かべた。

「契約した以上は全力でお前を守る！」

ファイが人形の頭を鷲掴みにした。すると髪の毛がチリチリと焦げていき、燃え始めた。

苦しみ呻くように人形が踊る。手から包丁が滑り落ちる。

話すはずのない人形から声が聞こえてきた。

「炎の精め……次こそは」

力尽きるように人形は倒れた。炎に包まれ、人形はみるみる灰となっていく。

床に突き刺さった包丁を抜き、滑り落ちたもう一つの包丁も回収したファイがそれも燃やし始める。

煙が立ち込める。だが苦しくは無かった。これもただの炎ではなく、何かしらのチカラで生み出された炎だからなのだろう。

自分の命が助かった事よりも、契約とは言え唇を奪われてしまった事の方で震えていた。

大事な大事なファイストキスをよりによって得体の知れない奴に奪われてしまったとは。

「大丈夫か？」

そんな事すら気にせず手を差し伸べるファイ。

鈍感な精霊の手をばしつと払いのけ、涙目で彼を睨んだ。

「誰が唇を奪っていいって言った」

「え？契約していいって言っただろ。異性同士の場合は口同士じゃないと駄目なんだよ」

「契約する事が唇を奪う事だとは聞いてない！今すぐ私のファイストキスを返せ！」

ベッドに置かれていたクッションを2つ投げた。見事2つとも彼の顔面にヒットした。

「おいおい、命の恩人にそんな扱いはないだろ……」

「うるさいうるさい！乙女心を知らない奴め！契約を交わしたとは言え、誰もあんたなんて認めてないからね！」

「契約した以上、どちらかの死が無い限り、契約は永遠に続くぞ」

「……永遠？」

「冗談じゃない。」

「こんな奴と一生付き合わなければならぬなんて。」

「今の今まで普通の中学生として目立ちもせず、ただただ平凡に暮らしていたと言っのに。」

「まさか、こうやって命を狙われる日々が続くとは言わないわよね？」

「いや、俺達の戦いが終わらない限りは続くぞ」

「ふざけないで！それじゃあ休みの日もおちりラックスしてられないじゃない！」

「更に瑠衣は窓を指差す。」

「こうやって色々な物も毎回破壊されたら、修理するのにどれだけのお金と時間がかかると思ってるの！親にだって怒られるし！理由も問いただされるし！」

「それは安心しろ。これでも俺は精霊だぜ？」

「そう言っつてファイがガラスに手を置いた。するとガラスの破片がみるみる集まり、一枚のガラスに戻った。そして元の窓枠へと嵌められた。」

「ここまでされると彼が偉大なる精霊であると言っ実感湧く。」

「へええ。こんな事が出来るんだ」

「当たり前だ。俺にかかればこんなものさ」

「デメリットばかりかと思えば、メリットもあつたもんだと瑠衣はほっとした。」

「ところで、さっきの人形は何だったの？自分の意思で動かない物が何故動いていたの？」

「あれは意思の無いただの物に過ぎない人形に意思を与えたのさ。そして命を与えた恩として奉公させると言っつたところの契約によって送り込んで来やがったのさ」

「それで、その契約をして狙っつてきたのは？」

「俺以外の精霊になるな」

「あ、そう言えばそれぞれ火、水、土、風、雷を司る精霊が居るみたいね。口が勝手に言った言葉にそんな事が含まれていた」

「そうさ。そして俺達は互いに戦うのさ」

「へ？」

「望みを叶えるために」

chapter 2 目的

とりあえず落ち着いて話を聞くために部屋を片付け、お茶を入れるために一度一階へと降りた。

勿論、お咎めなしではいかなかった。

「さっきの物音は何だい？」

祖母が首を傾げて聞く。少し模様替えをしていたただけだと答え、ポットに手をかける。

「お茶するならここで飲めばいいじゃないかい」

「やっぱり自分の部屋のほうがリラックス出来るしね」

あまり説得力の無い理由を並べ、何とかすり抜けてきたものの、部屋に戻ればファイが物珍しそうに部屋を物色しているし。

「あ、帰って来た」

「人の部屋をウロウロするな！」

「わわ、ポットが！」

バランスを崩し、倒れそうになっていたポットを慌てて掴み、テーブルへと叩きつけるように置いた。カップもガチャンと凄まじい勢いで置かれる。

さすがに瑠衣が怒っている事に気付き、肩をすくめるファイ。無愛想な顔をしたまま適当にチョイスしてきたフレーバーティーを注ぐ。

「こんな事が続くと思うと、悪夢から覚めないようではたまらないわ」

「悪夢って……」

「んで、色々聞きたい事があるからちゃんと答えてよ」

「うっ、おう」

カップに口を付けながらファイが頷く。口元を意識すると先程の口付けを思い出して全く嫌になる。

自身も紅茶をすすり、質問を始める。

「望みを叶える為に戦うってどういう事よ？それも、同じような精霊とつて」

「ああ、そのままの意味だ」

「何がそのままの意味よ！」

「下級精霊はこの世にウヨウヨ居る。だが、俺達五大精霊は特別で、ちゃんとした姿を持ち、確立した人格も持つ。そして下級精霊とは比べ物にならないチカラを手にしている。そのため、色々と不便な事が多い。自由も制限される。だから天帝が数千年に一度、五大精霊のうち核^{コア}を全て集めた一人だけ願いを叶えてやるうって封印を解き放つのさ。いわば、請願権争いって奴だな」

何故かファイは天井を見つめた。

「核^{コア}つて何？」

「言うなれば精霊の魂つて奴。それが奪われた精霊は存在が消滅する」

何とも言えない。似たような存在同士が自分達の命を懸けて戦うなど、どんなに望みがあるうともあまりにも酷で。

「大抵の場合、願いつて言うのは限られているんだけどな」

「そうなの？」

「……苦役からの救いつて奴だな」

ふいにファイの瞳が歪んだ。神妙な空気に瑠衣は手にしていた力ツブをソーサーに戻す。

「生まれた時から自由を奪われ、ただ世界の糧となる精霊はどうしても求めてしまうのさ。自由を」

「じゃあ、自由を願うの？他の精霊も」

「そうだ」

「……」

話を整理してみて、瑠衣は初めて彼らは好きで精霊をしている訳でもない悟った。

人間側の見解なら、不思議なチカラを扱い便利で憧れる存在だろう。しかし彼らにとっては何れも精霊としての立場が辛いのだ。

そして自由を欲する。天帝によって自由を与えられるために戦うのだ。苦役から逃れるために。

確立した人格を持つているのなら尚更孤独には耐えがたいだろう。そう思うと気の毒で仕方が無い。

「ファイも、そう望むつもりなのね」

「まあそうだな」

「でも、どうやって自由を獲得するの？精霊である以上はその責務からは逃れられないんでしょう？」

「そこでだ。俺は天帝にこう願おうと思う」

「どう？」

じつと真剣な面持ちで瑠衣を見つめ、言う。

「人間になりたい、と」

「！」

驚きで目が点になった。

「に、人間になりたいって、別にそんな人間だって楽じゃないのよ？確かに制約は軽くなるだろうけど、社会は厳しいし人付き合いも大変だし」

「そこでだ、俺は前回戦いを勝ち取った炎の精霊の後を継いでから一度も人間とは接した事が無いんだ。だから、人間がどんな生き物なのか教えてくれよ」

「う、うん」

「心配はいらないぜ。契約者になった以上は俺はお前を絶対守るから」

誇らしげな笑顔に思わず瑠衣は断るに断りきれなかった。

まあどちらにしろ、迷惑を被る事には変わらない。だったらさっさと望みを叶えて自由になってもらった方が気分がいい。

紅茶を飲み干し、おかわりを継ぐ。湯気立つ温かい紅茶が冷めたカップを温める。

絶対お前を守るから

何処かの金持ち坊ちゃんが言っつていそいな言葉だなとつい笑みを

零した。

「あ、一つ言い忘れてた」

「ん？」

「お前が狙われるのは精霊やそれに使わされた奴等だけじゃねえぞ。普通に契約者となった人間も手出ししてくるから要注意だぜ」

「……それじゃあ誰を信じて誰を疑うべきなのか分からないじゃない！普通に商店街を歩いていたらとして、すれ違うその一瞬で攻撃を受ける危険性だってあるって事でしょ！？もうのこのこ外に出ていられないじゃない！」

「そう言われてもなあ。精霊同士は気配でその存在を確認出来ても契約者の判別は出来ないからな」

「使えない奴！」

「何だって？この精霊様に使えない奴なんて言うのは何処のどいつだよ！」

「私だ！」

ぎゃあぎゃああと口論が始まる。

その後結局瑠衣がお茶のセットを持って部屋を出て行き、その口論は終了した。

あんな奴と共同生活を送らなければならぬわ、狙われるわで私の人生メチャクチャじゃない！

イライラを台所のスポンジにぶつけた。

「瑠衣？」

「はい？」

祖母が恐る恐るこちらを見ていた。よほど、怖い顔をしていたらしい。

にへらと笑顔を作る。

「あの、あの本どうだった？」

「え？」

そう言えばあれを持っていくとき、祖母にもし祖父のメッセージがあつたら伝えると言ったっけ。

「ああ、あの本ただの白紙だったよ。きつとおじいちゃん何か本を書こうと思って製本はしたものの、中身は書けなかったんだろっね」

「そう……」

祖母が悲しげな顔を見せる。

見ていられなくて、瑠衣は祖母に背を向けた。

カチャカチャと食器を洗う音だけが台所に響いていた。沈黙を隠すかのように。

「失敗したのか」

「そのようです」

黒髪を腰までおろした女が宙に手を掲げながら言う。

ちつと舌打ちをした男がソファにもたれかかった。そのまま頭をクシヤクシヤ搔く。

「急ぐ事はありませんよ。次の手を打ちましょう」

「何を呑気に！」

勢い良く立ち上がった男は次の瞬間、女の頬を殴っていた。

バンと激しい音を立てて女が床へと倒れる。

「何のためにお前を目覚めさせ、契約者になったと思っているんだ！」

「ご、ごめんなさい……」

女はただただ謝る事しか出来なかった。

chapter 3 誘導作戦

翌日。

ベッドで目を覚ました瑠衣が起き上がる。

そして、夢ではない現実を悟りはあつとまずため息。

ベッドの傍らで胡坐を掻いて間抜け顔をして寝ている赤毛の少年。家族が見れば得体の知れない男を家に連れ帰っているとは大騒ぎするだろう。しかしそんな事はない。何せ彼は人間ではなく、精霊なのだから。

「契約者以外の人間には精霊の姿は普通見えない。よほど綺麗な目をした者でもぼんやりとしかその姿は見えないようになっていると天帝が言ってたからな」

昨日彼が部屋を出た時に言っていた通り、目の前を通り過ぎても祖母も両親も気付かなかった。

それでも見えている側にすればハラハラさせられる。

間抜け顔で相変わらず寝続けるファイの側に近づいてみる。熟睡しているようだ。

こうしてやる！

悪戯心に駆られ、エルフのように尖った耳を思いつき引き張る。

「ぎゃあああああ!?!」

案の定耳を塞ぎたくなるような大声を出して炎の精霊は飛び起きた。

「ようやく目を覚ましたか、馬鹿者。そんなに熟睡しててどうやって夜私を守るのよ」

言葉は頼もしかったが、態度では不安がかなり残る。

そんな不安を知るよしもなくファイが言う。

「別に熟睡しても身体が殺気立つから分かるっつの」

「またもや大きなため息を着く瑠衣。」

「ああ、でも襲われてばかりつても癪に障るな」

「ん？」

「よし、先制攻撃を打って来た奴に今度はこっちから仕返ししようぜ」

「はい？」

「そうと決まれば善は急げだ！早速行くぞ！」

瑠衣の手首を掴んで窓から飛び出そうとしたファイを瑠衣が引き止めた。

「ちよ、ちよっと待って！」

「何で！」

「……こんな格好で行ったら恥ずかしいじゃない」

今の瑠衣は水玉のパジャマ姿。更に髪の毛も少し寝癖が入ってウエーブになっている。とても外へ出るには恥ずかしい姿だ。

「そしてまだ朝御飯も食べてないじゃない！腹が減っては戦は出来ぬ、よ！」

「そっか、んじゃ俺もー」

一階に降りてみたが、まだ家族は寝ているようだ。何せ昨日は土曜日なのに突然仕事が入ったので帰りも遅かったのだ。無理はない。祖母もそんなに早起きなタイプではない。更に祖母の部屋には一応台所が備え付けてあるので、そちらで朝御飯を済ませる場合が多い。

まさに絶好のチャンスなのだ。

「言っておくけど、明日からは学校だからこんな風にのんびり朝食用意したり出来ないから覚悟してよね」

「へいへい。それも人間の事情ってやつだな」

「あんたのせいだよ全く」

ぶつくさ言いながら台所に入り、冷蔵庫を開けて卵と食パンを取り出す。

フライパンを熱し、卵を二つ割って入れる。

その間にトースターにパンを突っ込んで焼き色を付ける。

トースターから焼けた食パンが出てきたのと目玉焼きを半熟のまま

皿に盛り付けたのはほぼ同時だった。

横に並べて盛り付けると、ぶっきらぼうに皿を前に突き出す。

「これならささっと食べられて、なおかついい朝食になるでしょ」

「……いただきます」

「うん」

目玉焼きをトーストの上に載せ、そのまま噛り付く。黄身がトロリと濃厚に流れ出す。

暫く噛んで飲み込んだ後、ファイが呟いた。

「美味しい」

途端に満面の笑顔になつて

「美味しいよこれ！」

夢中になつてかぶりつく。

まるで少し年下の弟を持った気分だ。

こんな簡単なメニューを絶賛して夢中になるなんて本当に子供っぽい。

裏表のない笑顔に思わず瑠衣にも笑顔がうつつた。パンを頬張る。

「あ、飲み物いる？」

冷蔵庫から牛乳を取り出し、コップに注ぐ。

差し出してはみたものの、ファイが手に取る様子はなかった。先程までの笑顔が吹っ飛んで険しい顔をしていた。

「え、得体の知れないものをよく……」

普通に牛乳を飲む瑠衣を見てファイが小さく言った。

それでピンときた。

「へえ、飲めないんだ？牛乳」

「の、飲めなくはない！俺を誰だと思っている！」

ぎゅつと目を瞑り、我慢して飲むファイの姿に瑠衣は笑いを堪え切れなかった。

こうしてちよつと愉快的朝食を終えて、それなりの準備を整えた。赤のチェックスカートに黒のタートルネックという姿をした瑠衣。家の中なのだが、スニーカーを履いている。髪は二つにくくった。

「よし、準備は整ったな」

「じゃあ行きましょう！」

「おう！」

そう言うなりファイは瑠衣を担ぐと開けた窓から飛び出した。

家の庭に軽々着地する。

「こうなるとは思ってたけど……」

彼は一人担いでいるとは思えないほど快調に家の屋根を次々と飛び移る。

こんな所見られたら言い訳出来ないよね

言い訳を作れない状況に頭を悩ませる瑠衣。そんなの全く考えずに突っ走るファイ。

「ところで、仕掛けるって言ってもどうやって？」

「それなりに広くて、人通りが少ない場所って無いか？」

「それなら」

瑠衣が指差す。その方向には細い路地に面した活気のない建物。

「そこ、立ち入り禁止だけど、工事が延期になっているから誰も居ないよ」

「よし、んじゃそこに決定！」

ガラスが外された窓枠から難なく侵入する。

入るなりファイが炎を生み出し、コンクリートに焦げによって何か書き始める。

それは幾何学的な模様に見えた。円の中に左右対称で模様が入っている。文字も刻まれているが、瑠衣には読めない。

手を払い、満足そうにファイは頷く。

「仕掛け完了！」

「仕掛け？」

「そう、大抵精霊本体が出てくる事が少ないから使いでよこされた奴を使って引きずり出そうと思ってな」

そのためにこれは書かれたようだ。いわゆる、魔方陣と言った様なところか。

「そんな事、可能なの？」

「何処に居るのが分かってても、その場所がどんな場所なのかまでは分からないさ」

ふいに笑みを浮かべ、

「来た」

と舌をペロリと出した。

chapter 4 土

侵入してきた使いの姿を見て瑠衣は口をポカンと開けた。

何せ、人間の頭では到底考えられない事が起こっていたからだ。

こちらへと蠢いているのは 木。

葉を生い茂らせた木が歩いてきた。

誰か夢だと言ってくれないものか……

「あ、あり得ない……」

「何でもアリって奴だよ」

平然と言つてのけるこの精霊の頭の中を覗いてみたいものだ。

木が先程ファイの書いた魔方陣を避ける様に蠢く。

「逃げようとしても無駄だぜ！」

次の瞬間、木の行く手を阻むように炎が噴き上がった。

火に燃やされてしまったのはたまらないと言わんばかりに木が退く。

そこには魔方陣の中心。

追い詰められた木は魔方陣の真ん中に立つを得なかった。

魔方陣が発動し、鎖が何処となく現れて木を拘束する。ぐるぐる

に縛られた木は動かなくなる。

いつの間にかファイの手には鎖の端が握られていた。力いっぱい

ファイがそれを引いた。

すると木の中から黒いオーラが飛び出してきた。それは糸のよう

に外へと続いていた。どうやらあれで操っているらしい。

「操りの糸さえあればこっちのもんだ！」

鎖から手を離し、代わりに姿を露にした糸を引っ張る。

外から救急車のような高い音がしたかと思えばだんだんその音、

いや、声がこちらへと向かってきた。

ようやくはつきり何を言っているのか聞こえてきた。

「……あああああ！ぶつかるううう！」

糸を撓らせ、糸の先にくっ付いてやって来た人物を壁に衝突させ

る事なく中へと連れ込んだ。

声の高さからしての予想通り、その人物は女性だった。長い黒髪が印象的な自分より少し大人っぽい少女だった。着ている幾何学的な模様が特徴の古風な服からして、精霊であると確信した。

「久しぶりだな」

ファイが話しかける。彼女はびくつと肩を震わせて潤んだ瞳で振り返った。

この子が昨日襲ってきた犯人だよな？

悪事を働いた割にはびくびくしているものだ。あまり進んで人を殺そうとしそうな顔はしていないが。

彼女がようやく口を開く。

「私は、貴方の核を、奪いにきたの！」

「へえ、お前が。あのびくびくした臆病者が俺の核を奪いに来たって？笑わせてくれるな」

威圧感は圧倒的にファイが勝っている。

「私は、負けられないの！だから、負けない！」

魔方阵が薄れ、代わりにコンクリートが突如鋭利に盛り上がる。

まるで針山のように。

少女と瑠衣の視線が重なる。

「契約者、死んで！」

「ええっ!?!」

瑠衣の立っている場所にも異変が起こる。慌ててその場を離れると自分の立っていた所に同じく針山が出来上がっていた。

ファイとは少し異なった能力。でも、人ならざる道のチカラ。

彼女は間違いなく、精霊だ。

「なめられたら困るぜ！」

ファイが距離を詰め、精霊に襲い掛かる。

炎が円形に精霊を囲む。煮えたぎる炎は逃げ場を奪う。

「うっっ……」

「どうだ！これが実力の差ってもんだ！心持ちでチカラも変わる

んだよ！」

勝ったのかと思った瞬間、瑠衣の足から力が抜けた。痙攣して、自力では立ち上がれそうもない。

「あ、調子に乗ってチカラ使いすぎたか？」

「まさか、契約者の体力を奪ってそんな魔法使ってるんじゃないでしょうね」

「全くもって、その通り……」

「そういう事はもっと早く言ってよ！」

無理やり立ち上がるうとしたが、すぐに尻餅をついた。

そんな瑠衣の肩を支える腕が突如現れた。支えによって何とか立ち上がる。

精霊はこんな所へ来れるはずもなく、ファイは精霊を睨みつけている後姿が見えている。では、この腕の持ち主は誰なのだろうか。

瑠衣は振り返った。

そこには黒髪の少年が微笑んでいた。しかしその微笑みが徐々に優しさから狂気に変わっていく。

ようやく瑠衣はこの少年がああ精霊の契約者だと気づき、逃げようとしたが、手首をしっかりと掴まれていて逃げ出せなかった。おまけにファイは精霊の方に気が入ってこちらには気付いていない。

「ふあ、ファイ……」

「おっと、声を出しちゃったか」

弾かれたようにファイが振り返る。注意がこちらへと向けられる。瑠衣は少年の腕に拘束されていた。首元に鋭利な缶切りを突きつけられていた。

「貴様……」

「この契約者、やけに弱いね。女性である事を含めても精神力や体力に欠けすぎているのでは？」

「お前には関係ないだろ！」

髪の毛が逆立つ程ファイは殺気立っていた。一方の少年は余裕を見せている。自分の精霊が捕らわれているにも関わらず。

まるで、あの精霊が囷となっていたかのように。

「いくら人間でも容赦しないぜ！」

新たに炎を生み出し、駆け出すファイ。

「いいのかい、契約者まで燃やしちゃって」

「！」

勢いがなくなる。

忌々しそうにファイが舌打ちをした。

現に自分の契約者を人質として取られてしまったのだ。契約者に手を出され、もし死んだらファイは解放されたチカラを失ってしまう。しかしこのまま黙っているほど彼も大人しくはない。

「おい、そんな炎くらい抜け出せないでどうするんだ」

「ご、ごめんなさい……」

注意を受ける精霊。彼女はびくつきながらも謝る。

「出来れば核を渡してもらえると助かるな」

「誰が渡すか！」

「じゃあ、この契約者とはサヨナラだ」

そう言っつて缶切りの刃を首元に触れさせた。ほんの一瞬触れただけで皮膚が切れ、そこから血が流れ出す。

熱い感覚に叫びたいのを必死で堪えた。

「やめろ！」

「今だ！」

次の瞬間、炎が突然として消えた。

理由はコンクリートに密封されてしまい、酸素を失ってしまったからだ。

注意を逸らしていたため、そんな動きがあつたとはファイは気付けなかった。

精霊がささつと素早く逃げ、自らの契約者の後ろに隠れる。

「この馬鹿！逃げてばかりでどうする！さつさと始末しろ！」

「で、でも……ファイは……」

「……何て使えない奴だ！」

瑠衣を拘束していた手が離れた。

契約主はつかつかと精霊に歩み寄り、勢い良く殴った。

「！！」

思わずファイと瑠衣は短い悲鳴を上げていた。

しかしはっとしてファイはすかさず瑠衣を引き寄せる。

地面に叩きつけられた精霊の目は酷く悲しげだった。

chapter 5 拘束からの解放

「どうしてそんなに恐れを抱く！契約者はあまりにも無知だし、あの精霊の頭もそれほど良くはない！そんなお前には叶うはずのない相手に何故躊躇する！」

「私は、本当は、戦いたくない、んです！いくら自分の夢を叶えたくとも、かつて仲間と呼んだ、人達を、傷つけたく、ないんです！」

「ふざけるな！俺の願いも叶えてくれるのだろう！だったらさっさと核を取って来い！」

瑠衣は不自然だと感じていた事がようやく分かった。

あのびくびくした性格で何故昨日のように冷酷無慈悲な事が出来たのかと。それは全て契約主のため。自分の望みのためではなかった。

彼女は自らの願いなどこのような形で叶えたくはない純情な精霊なのだ。

そしてそんな彼女を無理やり突き動かしているのが、あの契約主なのだ。

何て酷い扱い……。まるで下僕のようにこき扱っなんて、許せない！

恐怖など吹っ飛び、今まで震えて力の入らなかった身体が復活した。勢い良く立ち上がり、すかさず叫ぶ。

「ちよっと！嫌がっている事をやらせる権限なんて、あんたにはないんじゃないの！」

「部外者は黙っている！」

「いや！私だって同じでしょ！同じく精霊を持っている人間よ！」
説得力のある瑠衣の叫びに契約主はようやく目をこちらへと向けた。

鋭い瞳にはまだ煮えたぎる想いが秘められていたが、それでも怯

まず瑠衣は叫ぶ。

「私は自分の願いを叶えたくてこうして契約者になったんじゃない！勝手に訳分かんない事になって、こうなって……正直迷惑してるの！」

「おいこら、すっげ〜ムカつく」

ファイの主張も無視。

「だからこそ、自分の願いを叶えるためにファイは戦おうとしている！それなりの助けはするけど、ついでに自分の願いを叶えるとか、そんな事考えた事ない！私はファイが何処で何をしようとしていても止めないし、拘束もしない！契約者って言ってもただチカラを解放するだけの契約なら、こちらに命令する権限なんて無い！」
瑠衣の声が反響して建物内に響き渡る。

「だから、貴方も従う必要はないでしょ。貴方は、貴方の望みのままにすればいい」

「わ、私は……」

目を泳がせ、しばらく沈黙。が。

「私は、もう、戦わない！」

声高らかに宣言した。

その宣言に契約主は絶叫した。

手にしていた缶切りを持って全速力でこちらへと突っ込んでくる。精霊は迷う事無く、チカラを使った。コンクリートの壁を出現させ、柔らかくうねらせて契約主を弾き飛ばす。

「ああ、俺も混ざる！」

そう言っつてファイまで加わる。

「俺を裏切るとは……もし俺が死ねばお前はチカラを失う事になるぞ……」

「構いません！戦うための、チカラなんて入りません！」

動けない契約主に近づいた精霊は彼の額に手を当てた。

「我、ここに契約を解除することを請う。チカラよ、封印されたし。そして主には我からの解放を……」

契約主は意識を失い、頭を垂れた。

長かった黒髪の長さが胸程に短くなった。そのせいか、後姿が高く見える。

「ね、ねえ……その、契約主さんはどうなるの？」

「大丈夫、です。死には、しません。ただ、記憶を、失くすだけですから」

「記憶が無くなるの？契約を解除すると」

「はい。精霊の、記憶があると、精霊の存在を求める、妖しい輩が、現れるからって、天帝様が」

さすがは天帝、頭がよく回る、と瑠衣は心の中で呟いた。

「んで、核コアはもらってもいいの？」

「はい、どうぞ」

あっさりと彼女は承諾した。

「……」

ファイはばつが悪そうに頭を掻いた。

「どうも調子狂うな〜」

「へ？」

「言っておくけど、俺がそんなに残酷な事をわざわざ承諾を得てまでするとでも思ったのか？」

またまたヤーさんオーラが出てきたファイに精霊は肩をすくめ、瑠衣を盾にしがみついた。

「だ、だって、精霊界では一番の、暴れ者だから……」

「あのなあ！俺だって仲間と呼んでいた奴の核コア取るなんて嫌なんだぞ！それって命の源を奪うって事だからよ！」

怒鳴り口調のファイに精霊は涙を目に浮かべていた。

「だから俺はな……精霊そのものを手に入れるって作戦を思いついたのさ」

今度は妖しい影の商人のような笑みを浮かべ、瑠衣すら顔を引きたらせた。

が、また奇想天外な発言に瑠衣と後ろの精霊は声を揃えた。

「はい!？」

「だ〜か〜ら〜、核^{コア}を取るんじゃないくて、精霊そのものを俺のものにするんだよ。つまり、天帝には精霊のまま差し出すって事だ!それまでは俺の元でしっかり働いてもらおうぞ……」

「ひいつ、嫌ですう〜!」

「嫌だろうが何だろうがお前は核を差し出すって言ったんだ!もう拒否する権利は無い!」

「うわあああん!」

追い掛け回される精霊とそれを追うファイ。

精霊が増える。

それって……。

「え、ちよつと待って、まさかその子も住み着いちゃうとか?」

「他に何処へ行けって言うんだよ?」

頭が痛い。

彼にさえ手を焼いていると言うのに、昨日の今日でこんな事になるなんて思いも寄らなかつた。

「あ、私、居候するからには、何か、役に立ちます!」

まあこんなに素直な子ならそれほど手はかからないだろう。

「有難う、宜しくね。えつと……」

「マリアナ、です」

黒髪の土を司る精霊、マリアナは初めて笑顔を見せた。

彼女の笑顔に和み、瑠衣も笑みを浮かべた。

「よつしゃ、今日は撤退!おい、移動頼むぜ!」

「えつチカラを封印されたのにそんな事させるの?」

「それくらいの子カラなら残ってる残ってる!」

「戦った後で、チカラを殆ど、残してない仲間に、言う、台詞で

すか、それは!」

「下僕の分際で文句を言うな!」

「にゃん!」

上から踏み倒され、じたばた暴れるマリアナ。

そんな扱いじゃあ、とてもあの契約者と大差ないでしょ……
しかし悪意を持った相手じゃない分、マリアナもそれほど苦痛と
は感じていないようだ。

「やります！やりますから、上から、退いて、下さい！」

「おお、それでこそ使える奴だ」

マリアナは精神を集中させた。すると、ファイとは違い、何も描
かずとも魔方阵が浮き出た。

周りの景色がグラリと揺れた。と思いきや、突如真っ暗になる。

「ええっ！」

「えつと、確か……」

暗闇に異変が起きる。

次の瞬間、目に映ったのは今日の朝出てきた自分の家の玄関だっ
た。

「わわっもう家に着いちゃったよ」

「あ、帰ってきたの？」

母の声が聞こえて慌てて瑠衣は一人を一応先に二階へと上がらせ
た。

「朝早くからご苦労様だったわね」

「ま、まあね」

嘘がばれないかドキドキしながら話していた。

chapter 6 集い場

「お、おい。何処行くんだよ？」

いつもよりキチンとした服を着て、支度をすする瑠衣にファイが尋ねる。

蝶ネクタイの曲がり直しながらきつぱりと告げる。

「学校に行くんだよ」

そう言つて革のローファーを履き、鞆を手を取った。

「いつてきます！」

「いつてらつしゃい、瑠衣」

「ちよ、ちよつと待てよ！」

送り出す家族の声とファイの声が混ざった。

外で気軽に話しかけていれば誰しもが怪しむだろう。そう思つて玄関を出てからはファイやマリアナの問いかけには応じない事を決めた。

しかし予想以上にファイはしつこく尋ねてくる。

「学校つて何だ？こんな初めでだよ？」

「……」

「あ、何かの集会なのか？それも、重要な」

「……」

反応を見せない瑠衣にとうとう苛立ち始めるファイ。

「迂闊に外には出ない方がいいぞ。マリアナだってここぞとばかりに襲い掛かつてきたからな」

「そ、そうです。今の所、他の精霊の、気配は、ありませんが、あまりにも、無謀、です！」

「……」

とうとうぶち切れてファイが背を向けた。マリアナが宥めようと試みたものの、凄じ剣幕で怒鳴り散らされ、失敗に終わる。

つつい声を出そうとしたが、何とか喉元で止める事が出来た。

訳もいわずに無視するのは良くないよね

鞆からメモを取り出し、歩きながら字を書く。そして書き終わると二人に突きつけた。

『外では普通の人間のフリをして生活するので極力話しかけないで』

「了解、です」

ファイの方は字だけ見て、返事はしなかった。

メモを終い、瑠衣は何事も無かったかのように歩き出す。

気が付けば二人のお喋りが聞こえなくなっていた。二人はどうも気を遣って姿を消してくれたようだ。ほっと胸を撫で下ろす。

「お早う、瑠衣！」

「あ、お早う」

瑠衣に声をかけたのは大の親友である神無織音。艶やかな黒髪を持ち主で、ずば抜けた運動神経の持ち主。体格もほっそりしていて、密かに憧れていたりする。

「四日ぶりね、瑠衣。辛かったでしょ？」

「そうだね……」

精霊達とのドタバタですっかり忘れていた事を思い出せられた。

そう、祖父が死んだのは今から五日前。眠るようにして息を引き取った祖父を見て、実感は湧かなかった。

遺品整理の時も、実感は湧かなかった。ただ、自分の好きな伝承の真実を求めて遠い旅に出たような感覚でしかなかった。何故かまた会えると思えていた。

だが改めてここで言われてみると、寂しさが込み上げてくる。

「まあ休んだ分は取り返さなきゃ！織音、ノート見せてちょうだいね」

「勿論！困ったときにはお互い様だよ」

自然と笑みが零れる。

こんな風に笑ったのも久しぶりだった。

始めて見る瑠衣の笑顔を黙ってファイは上空から見つめていた。ぶつきらぼうで、怒ってばかりの瑠衣はあまりいい少女と言う印象などこれっぽっちもなかった。喧嘩ばかりしているし。

ファイの知らない瑠衣の一面が現れた感覚だった。決して見せてはくれない、大切に隠された感情を。

「もしかして、ちよつと、ときめいている？」

「誰がときめくか！どうせ愛想笑いに決まってるさ」

「それとも、嫉妬？」

「嫉妬、だと？」

その単語に何故か引つ掛かった。

「じゃ、ないんですか？今まで、こうして、笑いあえる、集える場所が、なかったから、集い場の、ある、彼女に、嫉妬、してるんですよね」

返事は無かったものの、顔にははつきりと本心が浮き出していた。大抵ファイは口こそ素直ではないものの顔は素直に気持ちを露にするのだ。

それは長年時々顔を見合わせたりする精霊同士であるからこそ分かる事。ほんの数日同居しているだけの彼女には分からないだろう。他人の特徴、性質を理解するのには時間が必要だ。ましてや、人と精霊とが分かち合うのには。

「お前は人間が羨ましいとは思わないか？」

「思う、です」

「そうだよな……」

精霊同士だからこそ、同じ苦しみを知っているからこそ理解出来る、人間の自由さを彼らは目に染みるほど思い知らされていた。

「あいつに人間について教えろとは言ったが、どうも心配だ」

「身をもつて、知るべし！」

「へ？」

いつになくマリアナが心を燃やしていた。

「知るためには自ら体験するべしなのです！」

「つてかおどおど感が消えているのは何故……」

「そんなの気にしないでさっさと準備するです！」

「な、何の」

「決まっていますです！人間の集い場へと入り込むための準備です！」

マリアナの勢いに圧倒され呆けているファイ。彼女はぐいぐいファイの襟首を掴んで引きずっていった。

いつもの朝学活。いつものクラス。いつものこの空間が懐かしいように思えるのは、数日ここへ来なかったからだろうか。

それとも、非日常に踏み出してしまった自分には縁がなくなってしまったように思えていたからなのだろうか。

担任の話を聞かず、瑠衣はぼうつとしていた。

「えっと、今日の朝突然校長から転校生がこのクラスに来ると言う伝達を受けまして……」

「転校生？こんな中途半端な時期にどんな子よ？瑠衣、どう思う？」

「へ？」

「話聞いてなかったの？転校生来るんだって！こんな時期に何でって思わない？」

「……確かに節目でもないのに変だよな」

不信心を持った。

もしかすると、精霊の契約者がやって来たのかも知れない。あまり心を許す訳にはいかない。

「それじゃあ、入って」

扉から入ってきた人影を見て、瑠衣は顔を引きつらせた。

何と、入ってきたのはファイだったからだ。しかも何処から入手したのか、しっかりこちらの制服を着用している。

と、織音が急に襟首を掴んで首を揺らした。

「な、何あの男！何だかめっちゃタイプなんですけど！」

お、織音！何で！？

「えっと、今日転校してきた……河岸附藍がわいりです」

巧妙に名前を漢字化したものだ。附と藍がファイと読めるなんて到底思えないだろう。に、しても、下の名前が女の子みたいだ。

「それじゃあ柏木さんの後ろ、空いているからそこに座って」

その言葉で瑠衣の席の後ろが空席であった事を唐突に思い出した。通路を通り、ファイがこちらへとやって来る。

瑠衣の前で一旦止まり、口を動かした。俺も学校つてものを体験したくてさ、と。

「……馬鹿者おお！」

次の瞬間にはファイの頬を全力で殴り飛ばしていた。

chapter 7 新たな刺客と契約

「どうも、すみませんでした……」
ようやく説教から解放され、ふうつと瑠衣は安堵のため息を着いた。

朝っぱらから転校生を殴り飛ばした女としてのヤジは凄いものだった。いくら反射的で、知っている相手だったとは言え、許される行動ではない。それくらい、瑠衣も十分分かつている。

全くあいつのせいでとんだ目に会ったわ！家に帰ったらとっちめてやる！

怒りは勿論ファイへと向けられていた。

時刻は昼。まだ弁当も食べていないのに、昼休み終了のチャイムが鳴った。ぐうつと低くお腹が唸った。

「最悪！」

瑠衣の気分はひどくムシャクシャしていた。

授業が終わり、下校時間。

大抵部活に入っている生徒が多いが、瑠衣はあえて部活には入っていない。その代わり、習い事をしているからだ。

「瑠衣、今日は久しぶりに行こうよ！」

「うーん……、今日は気分が優れないから明日でいい？」

「そう？まあもし気が向いたらいつものところで待っているから！」

「分かった！じゃあね！」

織音と別れ、瑠衣は歩き出す。後ろからこそそとついて来ている鬱陶しい奴を引き連れて。

上空からはマリアナが降りてくる。

「どうか、したんですか？」

「どうかしたもこうも……一体どういっつもりなのよ……！」

「人間の集いの場である学校で人間とはどんな生き物なのか実際に触れて知るべきだと、マリアナが五月蠅いから……」

殴ったのは悪い。だが。

「考えが軽率過ぎるのよ！貴方達、校長とかに何かチカラを使っただでしょ！しっかり記憶を操作して！」

「そうでもしないと入れてくれないじゃないか」

「そんな事したら駄目なの！」

これはいつもの喧嘩とは訳が違々とファイも薄々感じていた。

「いい？人には人の生活があるの！それらをいくらチカラがあるからって操作したりしちゃ駄目なの！関係ない人を巻き込んで、自分の意思さえ貫ければそれでいいなんておかしいじゃない！人はチカラを持たない純粹な生き物なの！」

長い論説を聞かされ、うつつと唸るファイ。

それでもまだ足りぬと瑠衣は更に言葉を重ねる。

「人を知ろうとするのはあんたの勝手。私には関係ない。そもそも契約だのそんなのに巻き込まれて一番迷惑しているのは私なの！他の人にまで迷惑をかけないで」

彼女が言わんとしている事が何となく分かった。

「……いい？別に過去を変えたいとかそんなのは言わない。契約者になってしまった以上は最後まで面倒を見る。だから周りを引き込もうとするのはやめて」

自分の意思を貫こうと全てを捻じ曲げてはいけない。彼女はそう言っているのだ。

ファイは唸るように返事をした。すると

「ちゃんと返事くらいしなさい！」

と髪の毛を引っ張られ、渋々ちゃんと返事をせざるを得なかった。

ちゃんと分かってくれたみたいだし、もういいよね

今まで憤りを感じていた心がすうつと穏やかに晴れていくようだった。やはり、言いたい事は率直に言う方が気持ちがいい。

さっぱりした瑠衣の表情にはもうわだかまりなど一欠けらも無か

った。

気分転換の早いやつだとファイはつい笑みを浮かべた。そこからまた痴話喧嘩が始まってしまふのだが。

会話にはほとんど参加していないマリアナだったが、彼らの様子を見ているだけで十分だった。

安心した気分浸っていたのだが、殺気を帯びた気配を感じてマリアナは咄嗟に振り返った。そこには人影があったものの、すぐに走り去ってしまった。

確かに殺気立った、同じ精霊同士の気配だった。しかし、あの影はどう見てもただの人間であるように感じた。

「どうした？マリアナ」

「何でもない、です」

「……？」

彼女はあえて言わなかった。

折角安心感を取り戻したのに、また緊迫した状況に引き戻してしまふのが嫌だったから。

しかし、この二人を思いやっつての行動が裏目に出してしまう事など、まだ知るよしもなかった。

ファイが学校に転校してきて三日が経過した。

彼は一時の人気者となり、何処の出身かや趣味などを沢山質問されていたが、今はそれもだいぶ落ち着いた。

精霊が襲ってくる事もなく、平和だと思えてきた今日この頃に事件は起こる。

それは下校時間。織音とファイと三人で帰り道を歩いている時だった。マリアナは上空から監視を続けていた。

「ん？」

突如、夕日の光が淡くなっただかと思えば、そこに一つの影が。

次の瞬間、マリアナはチカラに吹き飛ばされていた。勢いをつけて落下していく。その先には三人の姿が。

彼女が落下してきている事に最初に気付いたのはファイだった。

「危ない！」

瑠衣と織音を押し出した。

「きゃあ！」

弾き飛ばされた二人は尻餅をつく。ファイが背中に庇うようにして立つ。

背中を強打したマリアナが横たわっている姿を見て瑠衣が飛び出した。

「マリアナ！」

「え？誰それ？」

織音の問いにも答えず、見えている土の精霊を抱きかかえる。

「大丈夫！？マリアナ！」

「平気、です……」

マリアナが目を細めて睨む方向には宙に浮いた精霊の姿が。空気の渦がその精霊を取り巻いていた。

腰までであると思われる銀髪を無造作にたなびかせ、灰色の目が瑠衣を見下していた。

ファイがぼそりと精霊の名を呼ぶ。

「カシオ……」

「やあ、久しぶりだね。って言っても、人間からすればかなり長い時会っていない事になるだろうけど」

低い声で瑠衣は初めてこの精霊が男だと気付いた。あまりにも美しい美貌の持ち主だったのでつきり女だと思っていた。

「ね、ねえ。二人とも、誰と喋っているの？」

恐ろしいものを見ているかのように織音の顔は青ざめていた。

あ……

彼女が心の境界線を引いていくのが目に見えるようだった。

否定したかった。自分が非常識になってしまった事を。しかし瑠

衣はぎつと奥歯を噛み締め、何も言わなかった。

マリアナが震える身体で何とか立ち上がった。精霊と対峙するの
かと思いきや、織音の元へと歩み寄り始める。

姿を露にしたのか、織音には見えているようだった。突如現れた
存在に目を丸くしている。

「人間、貴方は、助けて、欲しい？」

「え？」

「私の契約者となるのならば、私は貴方を命を懸けて守る。この
ままでは、ここで果てるだけ」

いつの間にもやらあのおどおどした口調ではなくなっていた。

伸ばされた手に、織音は困惑しながらも応じた。手を取る。

「私を、受け入れて。貴方のためにも、そしてここに居るファイ、
瑠衣のためにも」

そう言われれば断る彼女ではない。瑠衣は確信した。この契約は
成就されると。

瑠衣の予想通り、契約の契りを織音は迷う事なく受け入れた。

chapter 8 劣り

マリアナのチカラが解放される。

呆然と織音はその場に立ち尽くす。

「織音、今から簡潔に状況を説明するからよく聞いて」

「る、瑠衣、あの子は一体……？」

「信じれないかも知れないけど、あのマリアナって子と、藍

ファイは精霊なの。そしてあそこ、宙に浮いているあの人も精霊」

「嘘、精霊なんて存在するの!？」

こくりと瑠衣が頷くと、織音が信じられないと呟いた。

俄かには信じられないのも無理はない。そもそも精霊と人間とは疎遠なのだから。

「彼らは自分の願いを叶えるために互いの魂 核コアを取り合って戦っているの」

「ねえ、契約しちゃったけど、私達、これからどうなるの？」

「彼らのチカラを解放するのが契約だから私達にはそれ以上の事はないみたい。ただ、彼らがチカラを使うたびに疲労は溜まるみたいだけ」

「……こんなの、非常識だよ!」

「でも、実際に起こっている。私達の目の前で」

目の前では制服からいつもの服へと切り替えたファイとマリアナが戦っている。

しかし精霊の風によって二人とも弾き飛ばされてしまった。

ファイは何とか着地出来たものの、二発目をくらってしまったマリアナは再び背中から地面に衝突する。

「マリアナ!」

瑠衣が叫ぶ。返事は返ってこなかった。

怒りを込めて瑠衣は精霊を睨んだ。その精霊は相変わらず下賤動物でも見ているかのように見下していた。

「契約し立てでは、チカラの配分が分からないだろうに。みすみす自分から核を差し出すと言わんばかりに無茶をして……」

「あいつがそんな性分なのは重々承知だろ!?」

ファイが言い返す。

「この期に及んでそのような心持ちでは、飛びぬけた能力すら生かされない」

かまいたちのような風の刃がマリアナへと向かって襲い掛かる。

しかし彼女がコンクリートを動かし、盾とした事によって風は切り付ける事すら叶わなかった。

服はあちこち破れ、髪も乱れたマリアナだったが目だけは澄んで精霊を見ていた。

「ふうむ、やはり精霊同士はきついものがありますね」

瞬時に精霊の姿が消えたかと思えば、瑠衣と織音の目の前に現れた。

「なっ……」

「予定ではこちらの方を狙っていたのですが……」

瑠衣から視線を外した精霊が狙いを定めたのは、織音だった。

「この人の方が状況をあまり理解できていないらしい。その方が攫いがいのある」

「やめて!」

精霊の足を瑠衣は掴んだ。

「全く鬱陶しい生き物だ!」

竜巻のような突風が吹き、瑠衣の身体が浮いた。すかさず精霊は地を蹴り、こちらへと向かってきた。

手の中で風が渦巻く。あれに触れてしまえば身体など真っ二つに斬られてしまうだろう。

「先に死ぬのは貴様だああ!」

「いやああああ!」

死を覚悟して目を閉じた。

しかし、襲い掛かってくる衝撃など何一つなかった。

まさか痛みすら感じさせぬほど一瞬にして命を落としたとも思えず、瑠衣は目を開けた。

目の前にはだいぶ見慣れた人物の背中。

しかしいつもと様子が違う。服に赤い円状の模様などあっただろうか。否 血によるシミだ。

わき腹を切り裂かれたファイは苦々しい表情で振り返る。そして発した言葉。

「大丈夫か？瑠衣……」

分かっているくせに。傷一つなく守れたことくらい。その代わりに自分の方にダメージをくらってしまったことくらい。

自分の身など案じず彼はただ守るために庇ってくれたのだ。

「ほう、いい痛手とはなったでしょう。そろそろ退散するつもりですか」

精霊が上昇する。

「待て……！」

追いかけてようとしたファイだったが、急にバランスを崩して瑠衣に覆い被さるようにして倒れた。

「ファイ？」

「……悪い、立てそうにない」

まるで自分が抱きしめているような体制になっている事に対して頬が紅潮する。

マリアナが追跡を試みようとしたが、精霊は一瞬にして姿を消した。

何事もなかったかのような静寂が訪れた。

「大丈夫、ですか？」

「ああ、平気。有難う……えっと」

「マリアナ、です」

「そう、マリアナちゃん、ね。にしても、まさか精霊が本当に存在するものだったとはね。瑠衣のお祖父さん、知ったら喜んでいただろうにね」

そこで瑠衣はあつと思いついた。

「ねえ織音、実は彼と出会うきっかけとなったのが、とある本んだけど、その本がおじいちゃんの本棚にあったの。更に最初のページには直筆で警告まで書かれてた。それってもしかして、その本にファイが宿っている事を知ってたって事だよな？」

「それは、そうなるでしょ」

そう、祖父は知っていたのだ。精霊という存在が架空ではなく実在するという事を。そして、その証拠品となる物を手元に置いてあったのだ。

「あ、あの、祖父さん……お前の……祖父さんだった、のか」

「ちよつと黙ってて！マリアナ、何とか出来ない？」

「契約者を、持った私に、その質問は、少し、無礼です」

皮肉を言いつつもファイの傷口に手を当てる。すると仄かな光が集い、傷がみるみる修復されていった。

痛みも消えたようで、彼は何事もなかったかのように立ち上がった。

「ふう、もう少し、深ければ、核コアが、体内から、出てしまう所でした」

安堵したのと同時に目元が熱くなった。

織音があらつと言わんばかりにこちらを見ていた。ファイの方は最初に契約を交わした後のようにぎよつとしていた。

知らず知らずと涙が零れていたのだ。

「あつ……」

「……主を危険な目に合わすなんて俺もまだまだ未熟だな。怖い思いをさせて悪かった」

「うっ、違う……確かに、怖かったけど！でも、身代わりになって……もしファイが死んだら、どうしようって思ったら」

鼻をすする瑠衣を見て、ファイは黙って自分の肩へと抱き寄せた。悪いのは彼ではない。自分の身すら守れぬ自分が悪いのだ。そして結果的には怪我までさせてしまった。主を守るのは確かに彼の務

めだろうが、自分にはもつと護身の力が必要なのだと自覚させられた。のうのうとしていては駄目なのだ。

何故だか織音は二人を見てクスリと薄く笑った。反射的に瑠衣は顔を上げた。

「へえ、そついう事なんだ」

「な、何が？」

「まさか現実の男子には全く関心がなかった瑠衣が精霊には関心を示すとはね」

「ちよつと、それどういう意味よ！」

「そのまんまの意味。私は応援するわよ、瑠衣の初恋！」

途端に瑠衣はファイを押し退け、織音へと向かってダッシュしていた。無論彼女はきゃいきゃい言いながらも逃げ出す。

「勝手にそんな解釈をするなあああ！」

先に行ってしまった契約主達を見て、ファイはため息を着き、マリアナはファイに細い視線を送るだけだった。

chapter 9 単純な戦法

「ね、ねえ……」

気分が悪いと言わんばかりに瑠衣は低い声で言う。

「どうしてこんなにくっつくの？」

「ん？」

瑠衣の肩に頬杖をついて覗き込むファイにそんな質問をぶつける。傍から見ればこいつは好意を抱いているとしか思えないだろう。

彼らにはあまりにも人の目を気にしなさすぎなのだ。

もしこれで二人は付き合っているのだとか、お似合いカップルとか言われてからかわれたら立ち直れない。

そんな諸問題を全く理解せずにファイは答える。

「お前は俺のだ。側に居るのは当然の事だつての」

近くにいた女子がきゃつと短い悲鳴を上げた。これは完全に誤解される。

さつと瑠衣はファイの頭を後ろへと押し退けた。弾みでファイは自分の座席へと着席する。

くるつと後ろに身体を捻るなり瑠衣は怒った。

「どうして普通の態度が取れないの！」

「普通の態度ってどんなだ？」

「普通男の子つてこの時期はよほど特別に想う人としかここまで親密にしないの！」

「俺ら親密なのか？」

「皆から見ればそう見えるんだつて！だから少しはわきまえて！」

彼らのやり取りを聞いて腹を押さえ必死で笑いを堪える織音。

彼女にも瑠衣の怒りが飛んだ。

「そこ！笑わない！」

「だって、必死でファ……藍君を離そうとしているのが可笑しくつてさ」

離れると言っても離れられない状況にある以上、無理な願いであると彼女は言いたいのだ。

空中に浮いているマリアナもくすくすと笑っていた。しかしファイに睨みつけられ肩を縮こめる。

納得いかないと細い目でファイを見つめ、正面へと向き直る。

が、周囲が興味津々とこちらを見ていた。

「もう、どうしてこうなるのよー!」

こんな日々をもう五日も過ごしている。

昼休み。彼らは学校舎の裏庭に集う。

弁当を皆で囲みながら話をするのだ。

「あれから襲撃ないね」

「とは言えど、油断は禁物、です。少し警戒を、緩めた、頃合を見計らって、来るのが彼の、考えです、から」

「いつでもかかってこい、と言える位の警戒は必要って事ね」

「まあそういう事になるな」

溜衣手作りの弁当を美味しそうに頬張るファイ。

その様子を見て織音は思う。きっと将来いいお嫁さんになるだろうと。

「あの精霊って風なんだよね?」

「ああ、風の精霊だ。あいつの思考はすば抜けていてかなりの戦術に長けている。だから注意が必要だ。まあそれ以外の精霊も注意すべき部分はいくつかあるが」

「有効な技とかないの?」

痛い所を突いたのかむうっとファイが珍しく唸った。

「土の力も炎の力も風に対しての影響力は少ないからな。逆に影響を受ける側に炎は入るし、状況的には不利だ」

「それじゃアマリアナの時みたいに反撃に出る事も出来ないじゃない!」

「反撃、か……。こちらから仕掛けるのもいいとは思いますが、それ

なりの戦術が必要になってくる。俺で案が浮かばないって事は、お前にも有効な提案はないだろうけど」

「見下しているのはむかつくけど、凶星だから怒れない……」
今にも頭から焦げた黒煙が出てきそうな二人だった。

そんな二人に光明が差し込むように織音が口を開いた。

「要は風の攻撃を受けなければいいって事よね？」

「まあ確かに。でも奴は攻撃だけじゃなく防御にも長けているからな……」

「あの精霊、何でも頭ごなしに組み立てて考えるタイプでしょ」

織音の読みは当たっていたらしい。マリアナがはつとして顔を上げた。

どうやら上手くいきそう戦術を考え出したらしい。織音が勝ち誇ったかのような笑みを浮かべた。

誰も聞いてはいないが、念の為にと耳打ちして内容を伝える。その奇想天外な内容に三人はえっと声を揃えた。

「そんな単純でいいのか？」

「大丈夫大丈夫、保障する。もし駄目ならいくらでもチャンスは作れるはずだから」

彼女の目は確信に満ちていた。

「……声が聞こえる」

空中で風は色々な声を集め取っていた。

ターゲット達の会話も聞こえる。どうやら作戦を練っているらしい。

何を考えようと無駄でしょうに……

人間は無力だ。手にかければ簡単に命を奪う事など出来る。その分際で精霊に立ち向かう術を探そうとは傲慢にも程がある。

今まで風に乗せられ聞き取れていた声が急にしぼんだ。声そのものは辛うじて聞こえるものの、何を言っているのかさっぱり分から

ない。

『大丈夫大丈夫
自信に満ちた声音。』

風を司る精霊、カシオは眉を顰めた。鋭い眼差しが眼下にある建物群のぽっかり空いたスペースに向けられる。学校の裏庭だ。

何処にいようとこちらは把握しきつている。既に彼らは掌に踊っているに過ぎない。

それなのに果てのない闇 即ち不安は胸に蔓延っていく。

「カシオ、降りておいで」

聞き慣れた声。そのおかげでいつもの沈着冷静さが舞い戻ってくる。

ちょうど自分の真下で見上げている契約主の姿を見た。

あの方の望みこそ叶えるべき願い。そのためならこの身が打ちひしがれようと構わない

「今降ります」

瞬時に舞い降り、そのまま跪いた。

「また、見ていたのかい？」

「はい。奴等、今度は戯れて何か謀をしているようです。牽制して参ります」

出会った頃から驚く事を知らない契約主の目は少し潤んでいるかのように思えた。それが何故なのかカシオには分からない。否、気付かぬフリをしているのだ。

踵を返す。契約主は何も言わない。

本当はこうして契約主の本心から逃げているだけなのかも知れない。

だが、これは自分の戦いなのだ。それに協力させているのは他でもなく自分だ。その恩恵として望みを叶えて差し上げたいだけ。

と、突然地面が揺れ動いた。マリアナの仕業だろう。

土に触れなければ何も影響はない。そう思い、地を蹴る。

先程まで戯れていたはずなのにこれほどの行動力とは少し侮りす

きたようだ。

コンクリートが盛り上がったかのように思えた。しかし少し隆起
しただけで引っ込む。

「……？」

異変に気が付いたが時は既に遅かった。

防御をしていないただ宙に浮いただけのカシオの背後にはファイ
の姿が。

拳に炎を纏わせ、そのままこちらへと振り上げる。

防御する暇もなくカシオは殴られた。意識が数瞬吹っ飛んだ。彼
の拳は一番威力がある事を今更ながら思い出す。

落下していく中で何とか意識を取り戻したカシオが素早く風の壁
を纏おうとした。

だが、次の瞬間には土のドームの中へと突入していた。狭い空間
にある空気は僅かだ。こうして風そのものを奪う作戦だったのかと
ようやく理解した。

身動き一つ取れなくなるほど絞り上げられる。外から見れば彼を
象った土のモニメントが完成していた。

「いつちよあがり！」

chapter 10 本心

「あれ、河岸附君は？」

「お腹の調子が悪いってトイレに籠もってます！」

「あ、そう」

先生を何とか誤魔化し、瑠衣と織音は普通に授業を受けた。とは言え今日は午後の授業が一時間しかないラッキーな日だ。

授業が終わるなり瑠衣と織音は急いで学校を飛び出した。置き去りにしてあったファイの荷物もこっそり持ち出して。

荷物が多い分少し足取りは悪かった。

何処にファイ達が居るのか直感で分かっていた。これも契約主と精霊の切れない関係のせいなのだろうか。

入り組んだ道をジグザグに曲がりながら、七つ目の角を回るとファイ達の姿を発見する事が出来た。学校からは少し距離のある、近所でも人通りが少なくて危ない道だと評判の道の上だった。

前回襲ってきた精霊は確かにそこに居た。しかし様子は変だ。姿そのものは見えているのにまるで何かに阻まれているかのように動かない。

「あ、こいつ、土で、がんにがらめに、してあるのを、透明に、して、見えるように、してある、だけなん、です。だから、動けません、よ」

二人とも表情が硬くなっていたらしい。マリアナが説明した事によりようやく安心感を得られた感じだった。

それでもきつと睨む目が怖くて瑠衣はまともに見る事が出来なかった。

「にしても、もう一時間も経っているのに契約主が現れないってどうかしてるな。普通、そこまで放っておくか？」

「風は気ままだからな。これ位、ただの遠出としか思っていないさ。ましてや、我が主ならばな」

澄まして言う彼にはまだ余裕があるようだ。目がそう言っている。どんなに待っていても契約主は現れないと。

契約主と彼の関係はそんな軽いものなのだろうか。ましてや契約主は命を狙われる立場にあると言うのに精霊を常々側に置こうとは思わないのだろうか。

「危険を知らない無知さを感じさせる」

鋭い目つきで織音が言った。

「我が主を危険にさらした事は一度もない。だから我が主は安心を得ている。得なくてはならないのだ……」

そこで初めて瑠衣は彼が必死で危険を契約主から遠ざけていた事に気付く。一抹の不安を与えさせない。心配もかけさせない。それが彼の護ると言うスタイルなのだ。

ふうつとファイが首を振った。このままでも埒があかない。

「だったら、核は、^{コア}いたたく、です」

意を決した瞳でマリアナが一歩進み出す。

動けずにいるカシオの胸にマリアナの手が伸ばされる。水面に飛び込むように手は胸の中へと侵入する。

マリアナの手に力が込められた。何かを掴んだようだ。

「うつつ……」

カシオが嗚咽を漏らした。どうやら核を^{コア}掴み取ったらしい。

「出来れば、私同様、配下と、なって、くれれば、こんな事、しなくても、良かった、のに……」

「ここまでしてまだそのような戯言を言うか……。情けは必要ない。早く取り出すがいい」

言葉通り、マリアナが勢い良く引き抜こうとした時だった。

カツツとファイの後ろで石を蹴る音がした。反射的に振り向く。

そこには真っ青な顔色で震える少年が居た。背は小さなもの、大人びた顔からしてそれほど瑠衣達と年齢は違わないようだ。しかし男にしては今にも折れそうな程細い身体がその弱さを露にしていた。

最初は一般人にこんなシーンを見られてしまったと焦ったファイだったものの、カシオの表情に焦りが浮かんでいるのを見てすぐに察した。

彼こそがカシオの契約主であると。

「貴方は逃げなければならぬ！」

「……でも」

「我が身はどうなろうと構わない。だから、貴方だけは」

「そういう訳にもいかないな」

好戦的なファイの瞳にひいっと声を上げた契約主は尻餅をつく。

そのまま震える身体を起き上がらせる事は出来なかった。

あつさりとファイの腕に拘束される。

「お前の大事な大事な契約者さんは俺の掌中に貰ったぞ」

「くっ……」

土で固められているはずのカシオの身体が動き始める。マリアナが慌てて手を引っ込める。

次の瞬間、凄まじい風の渦が生まれていた。あんなのに襲われていたら腕など簡単に引きちぎられてしまっただろう。

その風が鎌の形になってファイに襲い掛かる。ファイは契約主を抱えて飛び上がる。マリアナの隣に着地する。

こちらを睨みつけるカシオは手負いの獣と言ったところだ。呼吸を荒げ、興奮状態になっている。とても冷静で知性的な精霊と同一人物とは思えない。

「返せ、我が契約主を！」

彼の姿が突如変化した。尖った体毛に覆われ、巨大な灰色の狼へと変身した。

「やべっ……、あいつマジで本気出すつもりだ！」

さあつと血の気が引いた二人の表情は何だかゾンビのようだった。しかし彼らがここまで恐れる理由はすぐに身を持って知る。

猪突猛進と言わんばかりにこちらへと向かってくる狼　カシオ。身構えるファイとマリアナ。しかし逃げ腰のように見えるのは気の

せいだろうか。

あと数メートルと言う所で彼の姿は瞬時に消えた。

「!？」

いつの間にか彼の姿は後ろにあった。しかし一体どうやって。

一瞬の間があつて。赤い血しぶきが舞った。

倒れこんでいくその姿を瑠衣と織音は呆然と見ていた。

「ファイ……マリアナ！」

動こうとした時、頬に鋭い痛みを感じた。擦ってみると、血が滲んでいた。突進してくる事を予想して端へ避難していてもこの有様だ。まともにあたれば大怪我又はそれ以上の大変な事になるだろう。駆け寄った瑠衣の手をファイは支えにして何とか立ち上がって見せた。しかしマリアナの方は足もまともにも動かないようだ。生まれたての馬のように必死でもがく程度だった。

人質としてこちらに居る契約主も視界に幾つも見える赤の液体に頭を抱えた。

「もういい……」

ぴくつとカシオの耳が反応した。小さな細かい声で契約主が命じた。

「もういいから、やめてくれ……」

狼の姿が揺らぎ、人の形へと戻ったカシオが何故と呟いた。

「何故止めるのですか!? 貴方の願いを叶えるために」

「ここまでして願いを叶えて欲しいとは思えない」

彼の目には大粒の涙が浮かんでいた。はっとしてカシオも言葉を失う。

「お前は契約主の意図すら理解出来ていないのか」

厳しい目がカシオの心を見透かすように睨んでいた。血のついた口を手でごしごし拭いながらファイはなおも言葉を続ける。

「契約主と精霊の関係は主従だ。従属する精霊は契約主の意図を最も尊重して行動すべきだろう。意見が折り違えば必ず相談の上でする、それが天帝から与えられた規則の一つにあるんじゃないか」

のか？」

「貴方は、賢い。でも、自分の、考えを、人に、当て嵌め、正当化する、所がある。それでは、契約主を、苦しめる、だけ」

カシオはただただ泣く契約主の姿を見る事しか出来なかった。

chapter 11 閉ざされた洋館の主

「ほへえ……」

思わず二人は情けない声を出した。

それもその筈、彼女らの前にあるのはまさに御伽話に出てくるかのような立派な洋館だったのだから。雪のように白い壁に生える赤い屋根。手入れされていると思われる庭。来客者を迎える門の大きさをからしてかなりの豪邸らしい。

空はもうすぐ茜から漆黒へと変わろうとしている。本当ならこんな所へ来る予定では無かったのだが。

「話が長くなりそうなので、今日は泊まって下さい。ご両親には……」

「ああ、伝える伝える」

携帯電話で瑠衣は織音の、織音は瑠衣の家に泊まると両親に伝えた。少し疑問を持たれたかも知れないが、今話を聞く機会がなければその先には和解がないように思えたからだ。未だにカシオは警戒心を解いておらず、ピリピリしている。

一方の主の方は少しずつ笑みを見せるほど打ち解けている。しかしその目に少し怯えが見えているのは気のせいだろうか。

中に入ると、広々したりビングに招待された。床暖房で足先がぽかぽかする。

ふかふかのソファに腰掛けると、この家に雇われているメイドが温かいハーブティーを淹れてくれた。

さりげなく主はメイド達を下がらせた。どうやらこの主は金持ちのお坊ちゃんだったらしい。確かに反応からして弱々しく、生温い環境で育てられたような感じだった。容姿も明るい茶のストレート髪に同じ色の瞳とそこそこ良い。

「僕の名前は大道寺悠つて言います」

急にがたがたとティーセットが震えた。何事かと思いきや、彼の

身体ががくがくと震えていた。

「僕は……僕は、ずっと、ここに居るんです」

「ずっと？」

おかしい。

「学校とかは？行ってないの？」

「行ってないのではなくて、行けないんです」

「どうやら学校へ行きたいと言う意思があるのに行けない理由があるようだ。」

そんな理由なんて、一つぐらいしか思い浮かばない。

「いじめ」

一般的に多いのはこれだ。慈愛の一言も持たない奴等がする、下賤な行動。それによって傷ついた心を癒せもしなくせにその行動は世の中に広がっていく一方だ。現に瑠衣達の学校でも例外ではない。恐らく影の部分では幾つもあるのだろう。そう意味では珍しくもない事だが。

しかし予想は外れた。

「貴方の言ういじめと実際僕が受けているいじめは少し違います」カシオがとても青ざめた悠の代わりに続きを話す。

「この方は実の父親からの抑制を受けている。学校に大量の金をつぎ込んでまでこの方を学校へ行かせない。外へ出させたくないのさ」

「そんな……それじゃあ」

「ああ、この方は孤独なのさ」

つまり、外部との接触を一切遮断されていると言ったところか。交流が無ければ当然友と言う関係も築けないだろう。父親がそうしている以上、逆らえもしないだろう。

この少年は完全に独りなのだ。

ふと瑠衣は彼に自分の姿を重ねていた事に気付いた。そう、彼の悲しみを湛えた目はあの頃の自分と同じだ。普通とは違う髪の色でいじめを受け、傷ついて学校に行けなくなった時の自分とよく似て

いる。

あの時は織音に励まされ、何とか復帰する事が出来た。再びいじめようとした奴等を二人でぶっ飛ばしたものだ。無論、先生の説教はあったものの。それでも相手のびっくりした顔を見た時は気分がスカツとしたものだ。しかし相手が親となれば手を出す事は不可能だ。いや、親でなくとも手を出してはいけないのだが。手を拱いている事しか出来ないのなら、苦痛だろう。

「僕には話し相手すら居なかった。ただ淡々と日々を過ごしていくだけ。そんな生活なんて飽き飽きだった。でも自分ではどうする事も出来ない。そんな時、現れたのがカシオだった。カシオはたった一人の僕の話し相手となったんだ。でも影で何をしているのか知ろうとしなかった。見ないフリをしていようとしたんだ。彼が同じ精霊を、その契約主を襲っていると信じたくなかった。でも、逃げでは何も変わらないって分かった」

立ち上がったと思えば、悠は瑠衣の前で跪いた。そのまま右手の甲にそつと唇を寄せた。

突然の出来事に瑠衣は顔を真っ赤にした。隣で見ていた織音でさえ紅潮している。

「貴方を一目見て思いました。意思の強い瞳をしていらっしやる。その気高き姿に僕は惹かれてしまったようです」

「……それって一種の一目惚れ？」

「そう世間では言うのでしょうか」

人からこのようなカタチで想いを伝えられるのはこれが初めてだ。どう言葉を発したらいいのか分からず、黙って俯く。鏡を見ればきつと凄く赤くなっているだろう。

ゴゴゴと後ろから熱気が感じ取れた。

慌てて振り向くと、ファイがぎろりと悠を睨んでいた。一方の彼は知らぬフリをしているようだ。

余計に澄ました顔が気に入らなかったのかファイが瑠衣に纏わりつく。いつも学校でやっているように後ろから抱きつく。

「こいつは俺のだ。渡さねえぞ」

「ちよつと、何勝手な事を言ってるのよ！」

「彼女が嫌がっているではありませんか。怪我人は大人しく寝ているものです」

「五月蠅い！こいつには指一本触れさせねえぞ！」

ふーふーと呼吸を荒げて叫ぶファイ。一方の悠はにこにこ微笑んでいるだけ。

もはや首を？まえられている瑠衣には逃げ場など何処にも無かった。

何とか織音とマリアナが仲裁に入って、落ち着いたものの無言のバトルは未だに繰り広げられていた。

そこへガチャツと玄関の開く音がした。悠がびくりと肩を震わせたのと、カシオが眉を顰めたのを見て、厄介な人が帰ってきたのだと理解した。マリアナは他の人間には見えないものの、念の為に織音の後ろに隠れる。

リビングのドアが開かれた。

その人物が何者であるのか、皆すぐに察しがついた。悠の肩の震わせようと怪訝そうな表情を浮かべるカシオを見れば一目瞭然だ。

いかにも不機嫌と顔に書いたかのように眉を顰めた男がこちらへと歩み寄ってくる。鋭い目がきつと悠を睨む。

「一体どういう事だ。私はこのような客を呼んだ覚えは無い。お前にもそのような客人など一人も居ないはず……。隠れて外と通じていたのだな」

「と、父さん、僕は……」

「お前のような出来損ないを外に出す訳にはいかんと私は言ったのだ。この恥さらしめが」

すぐに敵意はこちらへも向けられた。

「無断で他人の家に入り込んで、不法侵入で訴えるぞ。嫌ならばすぐに去れ」

迫力のある言葉。誰しも逆らう事は出来ないだろう。

このままここに居ては余計に事態が深刻化しそうだ。荷物を持ってメイドに促されるまま部屋を出る。

悠の事が気にかかりつつも足を止める事は出来なかった。

と、自分達が玄関とは別の方向へと誘導されている事に気が付く。

「追い出すカタチで行ってもらうのは詮ない事ですので、我々メイドの使う部屋でお休みになって下さい。あまりいい環境ではありませんが……」

「いいんですか？見つかれば貴方だって」

「構いません。最近の旦那様には賛同出来ませんゆえ」

ファイが複雑な表情をしている事にこの時瑠衣は気付かなかった。

chapter 12 居場所

「なあ」

狭いメイドの使用室のベッドの上でファイが口を開いた。

「どうしてあの父はあそこまでカシオの契約主　　悠を閉じ込めておくんだ？」

「詳しい事情はよく分からない。でも、あの人自分の子供だと言う割には言っている事がきついよね……」

知らず知らず正反対の性格だと思われる自分の祖父を思い出していた。生易しいとまでは言わないが、いつもにこにこして子供に対して面倒見のいい祖父だった。あんなに温かい人などなかなか今の世の中存在しない。

「俺には理解できない。人間は愛し合える存在じゃなかったのか！？そう、信じてたのに……」

「一例だけを見て全てを否定するのはただの浅学非才よ」
動揺を隠しきれないファイに織音が呟く。

そう、彼は思っていたのだ。全ての人が愛し愛されるために存在するのだと。大まかな根拠はそれで真実を突いている。だが、その例外もあるという事だ。全ての人が同じように人を愛するとは限らない。愛する事が怖くて愛せない人も居れば、愛そのものが嫌いな人も居る。

今の世の中親からの虐待も少なくはない。子供に愛情が持てずにとだただ痛めつける事しか出来ない悲劇の大人も多いのだ。

被害者である子供も可哀想だが、親の方にも精神的に追い詰められている事が多い。一方的に悠の父を怒るわけにもいかない。ましてやあかの他人ならば。

自分達にはどうする事も出来ない問題だ。

「ここで考えていても何も変わらないんだし……様子を見るしかないでしょう」

そう言うなり織音は仰向けにベッドに倒れた。

ふうつと軽く息を吐いて暗い思考を外へと追いやった。そして織音同様瑠衣もベッドに寝そべった。

「あ、そう言えば返事はどうするの」

「え！？あ！」

彼からの一目惚れ告白を受け、咄嗟に返事できなかった事を今更思い出す。

「で、付き合っの付き合わないの、どっち？」

「うん、分からない。初めて会っていきなり言われてもまだまだ判別できる要素が少なすぎるからそう答えは早く出ないよ」

「そっか。それじゃおやすみ」

「うん」

目を瞑ってしばらくすると織音の寝息が聞こえ始めた。彼女は寝つきはいい方で、寝る前の挨拶をすると数秒後には寝てしまっらしい。

うつすら目を開けたまま瑠衣は今日出会ったこの洋館の主の姿を思い浮かべ、唇が触れた手の甲を見つめた。

やがて頭に霞がかかり、ゆっくりと瑠衣の意識は闇の中へと落ちていくのだった。

とうとう瑠衣の寝息まで聞こえてきた所でマリアナがファイに向き直った。

「人間の、非なる、部分が、見えてきました、ね」

「俺は……もっと人間を軽く見ていたらしいな。その方が楽だとか、そんな生易しい覚悟で人間になろうだなんて馬鹿だよな……」。

瑠衣も織音も人間の暗い部分をよく知っている上で世の中を渡り歩いているんだよな。こういう芯の強い人間ばかりじゃないんだって思うと、俺、幸運な精霊かも知れない」

「確かに、こうして、出会えたのは、必然、なのでしょうね。全ては、天帝様の、予定通り、って事、でしょうし」

「もう一つ、理屈では解決出来なさそうな問題も出来たしな」

「？」

ファイがそつと瑠衣の頬を撫でた。彼女の寝顔はまるで幼き天使のようだ。

カシオがしようとしていた事が今なら分かる。

「俺達にはどうしようもないさ。本当に向き合えるのは本人だけさ」

「……変わりました、ね」

自分の性格をよく知っているマリアナの言葉は当然だ。そういう問題には関係なくとも突っ込んでいくタイプであると自分も自覚している。

確かにじれつたいが、瑠衣達でさえお手上げなのだ。あとは運命と時に任せるしかない。あがいても無駄だ。

しかしあの男 尋常でない心の在り方にファイは疑問を持っていた。そう、何かが狂気に走らせているような……。

気のせいだろう

特に気に留めず、ファイもゆっくり目を閉じた。

夜中。ひたひたと何かの足音がしてファイが目を開けた。

その足音はこちらへとゆっくり、確実に向かって来ていた。反射的に起き上がり、身構える。念の為、姿が見られないようにカモフラージュをかける。

ぎいっと扉が開いた。

入ってきたのは、悠の父だ。暗がりでは顔は見えづらいものの、身長と体格からしてすぐにピンときた。

「まさかメイドが手を貸したとは。全くどいつもこいつも人柄のいいもんだ」

と、右手が持ち上げられる。その手には草刈用の鎌がしっかり握られていた。

「予定を狂わせた忌まわしき天の使徒達め。今すぐ地獄へ落とす

てくれる！」

勢い良く鎌が振り下ろされようとした。その刹那。

突如鎌がグニヤリと変形した。そのままみるみる液状に溶けていく。

「なっ……！？」

「ふうん、そういう事だったのか」

カモフラージュを外し、姿を露にする。

どうしてそこまで悠を追い詰めようとしたのか、そして溜衣達すらも排除しようとしたのか。これで全ての察しがついた。

「お前、本物の父親じゃないな？形のみ映されたまがい物」

「精霊の姿が一人見えないと思えば人間に化けていたのか。しかしここで姿を現した事、後悔する事になるぞ」

「それはどうでしょう」

いつの間にか父親の背後にはカシオの姿があった。

「契約主と契約する前後で父親の様子が急変したと彼が自分に相談していましたよ。同時期に入れ替わった証拠でもある」

「ぬう……」

「たかが精霊の使いが、俺達に勝てるんでも思っなよ！」

そう言っつて父親の身体を炎で包み込んだ。ところが。

炎の威力が急激に弱まり、次第に消えていった。彼の身体が水色がかつた透明になっていた。

「見くびるな！」

瞬間を逃さずカシオが風の刃で身体をこつぱみじんに切り裂いた。

「潮時のようなら退散しよう　でも、本物の父親が何処に居るのかよく考えて行動する事だ」

身体が液状になり、干上がっていった。残ったのは着ていたタキシードだけだった。

「一応勘付いてたんじゃねえか、カシオ」

「目立った行動もなしではこちらも動けないだろう」

全ては承知の上だったと思うとまたいい手駒にされたようで腹が

立つ。

だが同時に安堵もした。

「良かった……。あれが本当の父親じゃなくて」

「確かに。これで我が契約主の居場所はちゃんとあるという事が
しらしめられる」

やはり誰にでも居場所はあるのだ。そう確信が持てた。

何も知らず眠っている瑠衣の顔を見てファイはそっと安堵の笑み
を浮かべた。

chapter 13 恐れるべき存在

何だか身体が重たい。

慣れないベッドで寝てしまったせいだろうか。

そつと目を開けてみると自分と大して変わらぬ大きさの物体が乗っかっていた。

「……今すぐそこから退きやがれ！このセクハラ精霊！」

膝を反射的に手前へと引き、乗っかっている頭にキックを入れる。

「うぎゃっ！」

悲鳴を上げ、ベッドから転がり落ちる不届き者。しかし彼も黙って痛みを堪えるほど行動力が無い訳ではない。

「いきなり何すんだよ！」

「人の上で寝ているエッチが悪い！」

「しゃあないだろ！俺が寝ていた場所が取られたんだからよ！」

「取られた……？」

置いてあるベッドの数は丁度4つだったはず。誰一人漏れなく寝れるはずだ。

自分の横にあるベッドを見ると、そこにはカシオが寝そべっていた。なるほど、これでは場所が足りなくなる。

「……ってかいつの間にかいつが来ているのよ！」

「……だからって私の上で寝ないでよね！」

「別に乗っかるうとした訳じゃなくて、寝て気が付いたらこんな状態だったんだよ！」

「どれだけ寝相が悪いのよ！」

「仕方無いだろ！夜中に奴が」

「？奴って？」

しまったと思ってももう遅い。責めて悠の所へ行ってから話そうと思っていたのだが。

更に不運な事にマリアナも織音も騒々しい二人の言い争いで起こ

してしまつた。何事かと目で問うている。

全く何処までも予定を狂わせてくれるものだ。

「実は夜中に悠の父親がこの部屋にやって来たんだ」

「えっ！？どうして私達がここに泊めてもらっている事を知つたの？」

「あの男、偽者だつたのさ。それも別の精霊が送り込んだ使いだつた」

「何だつて！」

瑠衣はすぐに察しがついた。彼がここに来た理由はただ一つ。自分を抹殺しようとしたのだ。

つまり悠が毛嫌いされていたのは、そうする事で精神的に追い込むためだつたに過ぎない。悠には回りくどい方法を取つたものだ。

「俺は何となく違和感を覚えていたからな」

カシオもいつの間にか起き上がっていた。

元々疑り深いカシオの目をすり抜けるのはなかなか難しい。それで直接的には動けなかつたと言う所か。

しかしカシオの目を盗んで仕掛けようとする行動力があるのは、彼女しか居ないだろう。自分が、最も恐れなければならないチカラを持つ水の精霊。

いつかは対峙する時が来るとは思っていた。だが水の前では彼のチカラは完全に打ち消されてしまう。つまり対抗するチカラは持ち合わせていないと言える。マリアナも影響力が少ない分期待は出来ない。カシオで何とか凌げる程度だ。

そしてあの性格。カシオはきつちり綿密なシナリオを見積もるが、彼女にはそんな物が一切無い。瞬時の判断で戦いを進めていくのだ。そのため、動きが読みづらい。

「ファイ……？」

「ん？ああ、何でもない。それよりさっさと起こしてきたらどうだ？」

「ああ、そうしたい所なのだが」

「これではお前でも出来ないだろう」

「うっ……」

悠は未だに眠っている。

その隣にはでかい犬が寝そべっていた。犬種はゴールデンレトリバーだ。

あまり怖いと言う感情を抱かないファイでさえたじろぐ。その犬はしっかりと目を開けていて、こちらを見ているのだ。

精霊の姿がどうやら見えているらしい。更に興味を持っているのが鼻がうずうずしている。今にも飛び掛つて来そうだ。

「さすがのファイ君もあの大型犬には叶わないってね」

余裕綽々で織音が言った。

しかし隣に居る瑠衣も顔が青ざめていた。

「犬は犬でも……大きいと怖いよう、織音え」

うつつと嗚咽を漏らしながら織音の影に隠れた。マリアナはいつの間にもやら部屋を離脱したらしい。

瑠衣は犬そのものは大丈夫なのだ。だが、この大きさでは飛び掛られたらまず絶対倒されるだろう。そう思うと確かに怖いのは当たり前なのかも知れない。

とうとう我慢ならなくなったのか犬の目がキラキラと光る。

嫌な予感ほど、当たると言うものだ。

「わふっ！」

「えっ、ちよっ、待ってええええ！」

二人まとめて押し倒されたファイとカシオ。

更に犬は頬をスリスリと寄せてくる。それだけではない。唾液たつぷりの舌でベロベロと顔をやたら舐めまくる、

「ほうら、こっちおいで〜！」

「……わん！」

織音が何とか犬を誘き出した時には二人の顔は犬の唾液だらけになっっていた。

思わずぶつと吹いてしまった瑠衣は瞬時に睨まれるハメとなった。
「お前も味わえ〜！」

「いや〜そんな顔のままこっちへ近寄らないで〜！」
追いかけてつこが始まり、ドタバタと騒音が立つ。

う〜んと小さく唸り声がして、次の瞬間布団が一気に捲られた。
ベッドにもたれていたカシオの頭に見事布団がかかる。

「全く……騒々しいよ？」

「あ……ごめんなさい」

「まあこんな賑やかなのもいいかも知れないけど。おいで、リリー」

名を呼ばれた愛犬、リリーは主人の下へと即座に駆け寄った。悠は微笑んでリリーの頭を撫でてやる。

リリーの喜び具合から彼がどれだけ愛情を注いで育てているのが窺えた。その時、瑠衣の胸がキュンと少し締め付けられた。

彼を真っ直ぐに見つめる瑠衣の姿を見てファイは無意識に目を逸らす。そしてベッドの方に目をやって、ああと声を上げた。

「おい、カシオ！」

カシオは顔を布団で完全に覆われていた。

慌てて悠とファイがカシオを引きずり出す。

「ああ、大丈夫かい！？返事をしてくれ！カシオ！」

酸欠状態でへろへろになっているカシオを見て織音と瑠衣はあははと顔を見合わせて笑うのだった。

大道寺の館で朝食が始まる頃。

人気の少ないとある狭い路地裏で男と女が話していた。

「あかし、貴方と付き合う気はないのだけれど」

「そこを何とか！君のような子に出会えたのはこれが初めてなんだ」

必死で口説こうとする男。

表情一つ変えなかつた彼女がようやく笑みを浮かべる。それがO
Kサインだと取つた男は想いのままに抱きしめる。

彼の頭にはこれからの薔薇色の人生が描かれていた。

だが、急にその思考は停止する。びくつと身体を硬直させる。

「あたしの目当てはね、貴方の魂ソウルだけなのよ」

男の胸に入れ込ませた手を引き抜く。すぶつと鈍い音と共に青白い光を放つ塊が飛び出す。

もう既に男には意識が無かつた。そのまま力無く倒れこむ。呼吸も鼓動も停止していた。当然だ。神から授かりし人間の核を奪われてしまったのだから。

手にした魂ソウルを女は口へと入れる。彼女の身体が淡い青色に光り輝き出す。長い耳がウエービーの金髪から露になる。

水の精霊は妖しく笑みを浮かべて立ち去る。抜け殻となつた男の身体が放置されたまま。

chapter 14 人質

「父さんが偽者だった!？」

コーヒーの入ったカップを乱暴に置き、悠が叫んだ。

カシオがすまし顔でそうでしたと話す。

「でもこれで、実の父親がああやって悠を追い詰めていた訳じゃ無いって分かっただろ。つまり、あれだよ」

「解放されたって事だよ。外に出てもいいって事!縛られなくてもういいんだよ!」

瑠衣が嬉しそうに言う。本人より喜んでる瑠衣を見てファイはけつと呆れるのだった。

「じゃあ本物の父さんは何処に居る……?」

「恐らく、あの使いを送ってきた精霊の元に居るのだと思われます。人質、とでも言えるでしょう」

呑気に喜んでいられる状況でもないのだ。本物の父親が捕らわれているのならば次はその命を賭けて取引をしようとするだろう。

更にこちらにそれほど対抗し得る戦力がない。それでは押しかけていってもやられてしまうのがオチだ。

一番相性がいいのは雷の精霊だが、生憎まだ接触はしていないため、力を貸してもらおう事は難しい。

「どうするべきか……」

「何もなしで殺す事はしないだろう。このまま一旦様子を見る事を薦める」

「それは私も賛成。下手に動くより、あちらから動いてもらう方がやりやすいでしょうし」

カシオの提案に織音も賛同した。知能派の二人がこう言うのだ。従った方が得策だ。

「ところで……マリアナは?」

先程からマリアナの姿が見えない。一体何処へ行ってしまったの

だろうか。

「さあ……」

「リリーが怖いからって出て行ったきりだよ」

と、突然何処からとも無くマリアナが黒髪を振り乱して現れた。

その模様はまるで都市伝説の貞子のようなだったので瑠衣は思わず短い悲鳴を上げた。

ただならぬマリアナの様子に織音がどうしたのかと尋ねる。

「こ、これを」

手にしていたのは今日発行の新聞だった。この地域ではよく購読されている地域新聞だった。

一面に大きく取り上げられている記事に添えられた写真を見て全員が息を呑んだ。

それは男の死体を写したものだ。白目を剥き、気絶しているかのように死んでいる姿。

記事にはその男が外傷もなく、そして薬物を使用した痕跡もなくどうして死んでいるのかと書かれていた。確かに不思議な死に様だ。まるで死神に魂を奪われたようだ。

ファイとカシオが顔を見合わせて呟く。

ソウル・ハンティング
「魂狩り……」

「何それ？」

「魂を狩るのさ。その魂を取り込めば、少しずつ確実に精霊の力は高まっていく」

「それじゃあこれって精霊の仕業なの!？」

今まで人が死ぬような戦いこそなかった。だがそれはあくまで奇的跡的で本来ならいつ誰が巻き込まれ死んでもおかしくはない。

ソウル・ハンティング
「天帝から厳しく魂狩りについては戒められたっつーのに」

「彼女は力を求める手段を選ばないからな。人をそこまで重んじて見ていない。精霊の手にかかれればあつという間に息の根を止められる弱々しい生き物としか見ていない」

「メリツサ、ですね」

どうやらこんな荒業を成し遂げたのはメリッサの名を持つ精霊らしい。

しかしよくも簡単に人を殺せるものだ。その精神が分からない。分かるうとも思わないが。

「だつたら今度こそ危ないかも……」

今まで散々言われ、覚悟してきたつもりでも、突きつけられた恐怖に打ち勝つ術などなかった。顔を青ざめ、小さく震える。

そんな瑠衣の様子をいち早く察した悠がそつと手を握る。

「大丈夫です。彼らを信じましょう」

温かい温もりが肌を通して伝わってくる。

恐怖に凍りついた身体がほぐれていく。何とか笑みを浮かべることが出来、もう大丈夫だと悠に伝える事が出来た。

「俺は負けるつもりはねえぞ」

力強くファイは言った。

「意地でも護つてみせるから、その時はちゃんと恩を返せよ」

「……恩ってね」

一体何をして欲しいのやら。

しかし今は頼るしかない。いくら戦いで負った傷が完全に癒えてなくとも相手はお構いなしなのだから。

「マリアナだつてまだ本調子ではないらしい。」

「万全の体制で臨まなければなりませんね」

「そうね、それまで出来るだけまとまって居た方がいいかもね」

最もな提案が出され、瑠衣は賛同した。

「そう言えばあまり外出してなかったんでしょ？ちよつとお買い物にでも行かない!？」

「えっ」

「いいね、織音！行こう行こう！」

きゃっきゃとテンションが上がっている二人を止める事など誰にも出来なかった。

とりあえず一旦瑠衣と織音は家に戻って支度をして街の大きなショッピングモールで待ち合わせをする事になった。

瑠衣が慌てて待ち合わせ場所へと走る。既に瑠衣とファイ以外の皆は全員揃っている。

「だからさっさと準備しないと待たせるって言っただのよ」

「仕方無いでしょ！」

「あまり着ないようなお洒落着をタンスの奥から引っ張ってくるからだ」

「うつつ、だって……」

意識するようになった人の前で、気合を入れてお洒落をしたかったから

なんて言えば快く思っていないファイはまた激怒するに違いないので言葉を飲み込んだ。

織音がこちらに気付いて名を呼び手を振っている。瑠衣もそれに答えて手を振りながら走る。

ようやく皆と合流出来た頃には瑠衣はぜえぜえと荒い呼吸を繰り返し、しばらくそのまま動けなかった。

「ごめっ……待った、よね？」

「まあちよつとね」

「でもそこまで無理して走らなくても大丈夫でしたよ」呼吸が整った所でショッピングが始まった。

上の階から順番に店を回っていく。主には可愛い雑貨店や洋服店だ。

マリアナも興味津々で瑠衣と織音と一緒に品物を見ていた。

一方の男性グループは暇そうに店の前で待ちぼうけをくらっていた。カシオとファイが飽き飽きしていたのに対し、悠は幾分嬉しそうだった。

「瑠衣さん、さすがは年頃の女の子ですね。ああ、あのアクセサリーなんてお似合いですね」

「……」

一通りの品物を買って女性陣が店から出てきた。

瑠衣がファイに荷物を突き出す。

「ちよっとお手洗い行って来るから持つてて」

「なっ、俺はそんなのヤ……って人の話を聞けよ！」

強引に荷物を持たせ、そのまま瑠衣は走って行ってしまった。

お手洗いに入ると一人の女性がトイレの個室の前で立っていた。

並んでいるのかと思ったのだが、空室が幾つかある。

考え事でもして気付いていないのかと思い、女性に声をかけた。

「あの、入らないんですか？」

「え？ああ、大丈夫です」

ウェービーの金髪に深い蒼の瞳をしている彼女は何処かの有名なお人形をイメージさせた。

しかし愛らしく整った唇の端がつりあがって妖しげな笑みを作った。

「私がここに居るのは……」

突然大量の水が呼吸器を満たした。呼吸できない苦しさに意識が遠くなる。

「貴方を捕まえるためだから！」

危険を知らせたくともなす術がなく、そのまま瑠衣は意識を失った。

chapter 15 主従関係（前書き）

作者が主人公の瞳の色を間違えて描写していました。すみません。その都合により、このchapterで出てくる人物の外見を多少変更しましたので、その程了解をよろしくお願い申し上げます。

chapter 15 主従関係

「！」

突如発せられたチカラの気配に三人が気付いた。

今のは確かに水の波動だった。メリツサが現れたのだ。

もしかして……！

「織音！」

「行きましょう！」

女性陣がお手洗いへと入る。全ての個室が空だった。瑠衣の姿は何処にも無かった。

ただの生理的行動だからと油断した。一人で離れる事をさせてはならなかったのだ。その油断がこの結果を招いた。

彼女達からの報告を受け、ファイとカシオは舌打ちをした。

また向こうに新たな切り札を作ってしまった。しかし切り札どころかファイにとっては戦うためのチカラそのものを搔っ攫われたも同然なのだ。下手に動けば瑠衣の身の保障は出来ない。

護るって言ったのに……護りきれないじゃねえか

自嘲的な笑みをつい浮かべる。

体制的に圧倒的にこちらが不利となった。でもだからと言ってそのまま逃げ腰で待ち構えてはいられない。そんな性質たちなのだ。煮えたぎる思いのままにファイは走り出していた。

「ちよつと！ファイ君！」

「……駄目だ。頭に血が上ると耳がない」

かと言って一人では行かせられない。行けば必ず負ける。そう知っているのだから。

逃げ出した犬でも追いかけるようにぞろぞろと一向はファイの後を追った。

『……な、さい』

真つ暗の世界の中で語りかけてくる声。ハープのように透き通った美しい調の声だ。

遠くから淡い光が近づいてくる。

それが寸前に近づくまで人の姿を形取っていたとは気付かなかつた。白銀に輝くドレスを身に纏い、彼女はこちらへと語りかけてくる。

『おかえりなさい……』

帰ってきた感じではない。

それでも我が子を迎える母のように温かな眼差しをおくっている。淡い水色の編みこまれた長髪に、自分と同じ緑の瞳。雰囲気は瑠衣よりお淑やかだ。でも自分と同じものを感じさせる。

精霊の特徴である長い耳の持ち主でもあった。

ふと彼女が後ろを振り向いた。

『、なの？』

そのまま彼女が遠ざかっていく。

『……、！』

誰かの名を呼んでいるのだろうか、分からない……。

気付けば見知らぬ部屋に横たわっていた。少し平衡感覚がおかしいようだ。まるで何処か別の世界に行つて空間が歪んでしまったかのように。

あれは本当に起こつた出来事だったのだろうか。それとも今まで眠りの中で見ていた単なる夢 幻だったのだろうか。

それよりも一体ここは何処なのだろうか？薄暗くてよくは分からないが、窓一つない狭い空間だ。

立ち上がるとずっしり片足に重みがかかった。不自然に思い、足を見ると黒い物体が絡み付いていた。鎖だ。

壁もコンクリートではなく煉瓦で作られている。現代ではなかなか珍しい建物と言えるだろう。どのみちここは少し古い年代の建物であると言つ予測は着いた。

「ようやく気が付いたのかな？」

重々しく扉が開く。そこに立っていたのは自分よりか幾らか年上の少年だった。耳にピアスをし、目にはカラーコンタクトが入れているようだ。茶のメッシュを入れた金髪で、如何にもガラが悪そうな不良少年だった。

服装が嫌いなパンク調だったのでむつと瑠衣は相手を睨んだ。

嫌いなのはそれだけでない。完全に見下しているその態度も気に入らない。

しかし相手はケラケラと笑い出す。

「まあそうやって嫌ってくれるのは別に構わないんだけどサ、自分の置かれている状況分かってる？」

「これでも分かっているつもりだけど？」

「ああ、そうですか。せつかくある程度の情報を与えてあげようと思ったのにネエ？」

語尾が横文字調にしてくるのも鬱陶しい。

しかしある程度の情報は欲しいものだ。向こうから提供しようとしているのだ。一応有難く頂戴しておくか。

「教えてよ。ここが何処なのか」

「誰がタダで教えると言ったかなあ？」

ツカツカと歩み寄ってきたかと思えば突然瑠衣の顎を捕らえて仰け反らせた。

本能がこの行動がどういう意味なのか察して警鐘を鳴らす。

咄嗟に身を引いた。その勢いで仰向けに倒れる。

反射的に起き上がり、相手を見るとまた笑みを浮かべていた。

「あゝあ、気が変わっちゃったな……」

「最初からそれが狙いだったんでしょ！」

「あ、ばれちゃってたあ？んじゃもういいや〜」

ひらひらと手を振って相手は退却していった。

あんな軽い男にもう少して唇を奪われる所だった。今更悪寒が走って震える。

はしゃいでみすみす相手に攫われるなんて、馬鹿だなあ
織音と悠はきつと心配しているだろう。ファイは。
呆れているだろう。

こんな間拔けな契約主を助けに来てくれるだろうか。彼らは核さ
え取られなければ新たな契約者を見つけることも可能だろう。
必ずしも助けに来ずとも問題は無いのだ。

もしかして、このまま私……
かつてこんなに不安に駆られた時があるだろうか。ずっと助けに
来ると根拠もなく信じていたけど、今は易々と信じられない。

これが絶望と言うものなのだろう。
にしても、ここは冷える。一応上着は着てあるものの冷たい風が
吹き抜けているように体の体温を奪っていく。

手を擦り合わせ、僅かな温かさを感じながら部屋の隅っこに丸ま
った。

時計を持っていないので今どんな時間なのか分からない。
時間の感覚がないままに時は流れていく。

もうどれだけここに居るのか分からない。変化のない部屋を見て
いると時が止まっているようにしか思えないのは当然だ。

手足の先から徐々に感覚が失われ始めていた。暗くてどんな様子
になっているのか確認出来ないが、血色の悪い紫がかった色になっ
ているだろう。

これじゃあ一日も持たないかも
死にたくない。大切な人が死んでしまったからこそ、自分は生き
たい。

「……たいよ」
涙が零れた。

例え必要不可欠だと思われていなくとも。

「生きたいよ……だから助けに来てよ、ファイ！」
次の瞬間、凄まじい音が響いた。建物もグラリと揺れた。

遠くから罵声のような人の声がする。走ってくる足音も聞こえて

くる。

「！」

幻かと最初は思った。でもその声はどんどんこちらへと近づいてくる。

乱暴に扉が開いた。

紛れもなくそれはファイだった。手に宿していた炎を消し去り、ファイはそのまま瑠衣に駆け寄った。

「瑠衣！無事か!？」

「ファイ……ファイ！」

瑠衣はファイにしがみついた。今は離れたくない。

一瞬の間があつて、ファイが瑠衣を包み込むように抱きしめた。

「悪い、怖い思いをさせた」

「私が悪いの。香気に一人になるから……」

いつもならべたべた引つ付かれるのが嫌いでも、今はそう思わなかった。とにかく側に居てほしい。手の届く場所に居てほしい。その思いの方が強かった。

chapter 16 信じる心

鎖を炎で溶かし、ファイは瑠衣を抱きかかえた。自力で立てない程弱っていたのだ。

女子なら誰でも憧れるお姫様抱っこをされ、さすがに瑠衣が顔を真っ赤にした。こんなのを織音の前では晒したくないものだ。

「行くぞ」

すぐさま入り口付近で交戦している仲間達の元へと向かう。

長い階段を上っていくと眩しい光が差し込んで瑠衣は思わず目を瞑った。

しかしその光はただの電球の光だった。暗い場所に閉じ込められていたため目がおかしくなっているらしい。

にしても、年代を感じさせる建物だ。電球と言っても現代のようにカバーなどがなく、電球そのものが剥き出しの照明タイプだ。

煉瓦も一部赤茶色が黒ずんでいる箇所が無数にある。

「ねえ、ここって何処なの？」

「えっと、織音は幽霊屋敷の丘って言ってたけど？」

「ええっ！？もしかして、ここってそこにある幽霊屋敷そのもの………？」

丘そのものが幽霊屋敷の土地となっていて無断では立ち入れない区域となっている。瑠衣の家からはさほど距離はない所だ。それではあの契約主はこの幽霊屋敷の所有者なのだろうか。

広いエントランスに出る。

対峙する織音達と先程瑠衣を弄んだ少年。水の精霊が姿を現す。

織音がこちらに気付いて駆け寄った。勢い良く瑠衣に飛び込んでくる。

「瑠衣い〜！」

「ごめん、心配かけて」

「何言ってるの！瑠衣が無事ならそれでいいよ！」

「そんなままごとみたいな事して何が楽しいのかなあ？」

冷や水を浴びせられたような感覚だった。

下らない茶番を見るかのように物憂げな表情を浮かべる少年。

「ままごと？」

「そうさ、ガキのままごと」

「なっ……」

「だってそうでしょ？馬鹿みたいにむれて嬉しがってさあ。そんなの見ているとぶっ壊したくなるんだよね」

我慢ならなかったのかマリアナが進み出た。今まで見せた事のない真剣な眼差しがあった。

「何？その目。誰もあんた達に賛同してもらおうとは思ってないし。賛同されてもまとわりつかれてうざいだけだから」

「何も知らないのですね」

おどおど調ではない。よほど頭にきているらしい。

カシオとファイがひくつと顔を引きつった。

「人の本当の強さは、心の精神力なのです！力的な強さはこの人間の創り上げた社会にはなんの価値もないんです！思いやり、行動する事こそが一番の強さなんです！だからチカラだけを求めて、他者を捻じ伏せる貴方達はただ上辺だけを振りかざしているに過ぎないんですよ！上下関係なんて、本当は存在してはならないんです！人間を軽んじて命の価値を勝手に下げて弄ぶなんて人間から見ても我々精霊から見ても許しがたい事です！」

長つたらしい力説が続き、頭がグルグル回っているファイ。

さすがにここまで長文を聴かされると頭がおかしくなってしまうそうだ。当の本人が立派な事を述べているのは間違いないのだが。

黙っている様子から何か心に届くものがあつたのだろうと期待したが、あつさり裏切られた。

二人とも狂ったかのように笑い出す。軽い呼吸困難になるまで笑い、急に冷めた表情に戻って一言。

「だから？」

びくつとマリアナの肩が揺れた。

「自分の持つ考えなんて覆せないよ？そんなに力説されても簡単にはねえ」

「こういう時はやっぱり捻じ伏せあいになるんじゃない。矛盾が生じているわよ、マリアナともあるう正当主義の子が」

すなわち、言葉は受け付けない。受け付けるのはチカラのみと言うことだろう。

力づくで人の考えを捻じ伏せてはならない。マリアナがそう言った以上、手は出せない。手を出せば正当化する事に変わらない。

「その考えをもっているがばかりにのたれ死ぬがいいわ！」

水が帯状になり、こちらへと向かってくる。

「そう簡単にやられる訳にはいかないんでね！」

カシオが気流でドーム状に周囲を囲む。水はドームに触れた途端、宙へと弾き返されていく。

と、いつの間にやらメリッサの契約主の姿がなかった。攻撃に視線を集中してしまっていたため、気付かなかった。

一体何処へ？

「あれ、契約主が、居ませんね」

「へっ、大口叩いておきながら逃げ出したんだらうよ」

特に何もしていないのにも関わらず威張るファイ。

だが彼の言った事は大間違いだった。

次の瞬間、ファイの立っていた床が持ち上がり、水が噴き出した。水をかぶってしまったファイがひゃあと情けない声を出す。

しかし地面から飛び出してきたのは水だけで終わらなかつた。水流に乗って契約主までもがドーム内に潜入してきたのだ。

異変に気付いても時は既に遅し。

「死ねえ！」

手に隠していたナイフを振り回す。反射的に皆が飛び退いたものの、瑠衣は手の甲を僅かに切られていた。マリアナの長い黒髪も先端が切れ、短くなっていた。

なおもナイフを振り回すため、皆それぞれ散り散りになる。

「そう、それを待ってたのよ」

突如出現した水の柱の中にそれぞれが閉じ込められてしまった。

カシオが風の刃を使って悠と共に抜け出す。マリアナも噴き出し口を土で固めて水を制し、織音と脱出した。

ただし、こちらの溜衣とファイは。

「やべえ、俺のチカラじゃ無理だ。勝てねえ」

「ちよつと、何諦めてるのよ！このまま黙って捕まっているつもり！？」

「そうは言われても……」

「ファイ！今助けるから待ってる！」

カシオ達がこちらへと向かってくる。

が、メリツサが素早く立ちはだかった。

「そう簡単には行かせない」

「くっ……！」

手間取っている合間に契約主が溜衣達に近づいていた。

大丈夫。人がこの水の中を潜り抜けられる訳が……

ないわけがない。精霊が水の中の侵入を許さないはずがない。

もしかして、ピンチ？

「そうそう、その恐怖した顔が気持ちいいよう〜。もっともっとゾクゾクを味わわせてよ、ねえ？」

とうとう水の柱に飲み込まれるようにして入ってきた契約主。溜衣達には逃げ場が無い。

ファイを仰ぎ見るも、彼も絶望を感じているらしい。青ざめている。

ナイフが真っ直ぐにこちらを指していた。左の胸　　心臓を狙っているのだ。

ぎゅつとファイの服の裾を握った。そつと目を閉じる。

私は信じている。彼がどんなピンチからでも護ってくれると。

ぼつつと温かな光が体の内側に発生していく。

「えっ？」

濡れた服や髪がみるみる乾いていく。ほとんど奪われてしまった熱が普段以上に自分の体内に発生していくのを感じた。

そうだ。どんなに苦手な水であろうと威力さえ勝れば弾き返せる。試しに炎を生み出してみる。ごうつと唸って天井まで達する火柱が発生した。

「なっ!？」

「……いけるぜ」

全力で炎の威力を上げていく。ここまでのチカラは無かったはずなのに、一体このチカラはどこから溢れているのだろう。

水の柱は呆気なく水が蒸発した事により消えうせた。

chapter 17 想い合い

予期せぬ事態に動きが止まる契約主。

そのタイミングを使って炎が渦上に取り囲む。そしてその中心にいる契約主へ熱を送り込む。

「あつ……！く」

「！」

メリツサがすぐさま駆け寄って水を振りかけ、鎮火する。契約主は腕に火傷を既に負っていた。

ファイが二人の前に立つ。その目は今まで以上に怒りに震えていた。

しかしそれにも与する事なくメリツサが捨て台詞を吐く。

「凄まじいチカラ　それがあんたの本来の姿。だからって勝った気になったら大間違いよ！こちらには切り札がちゃんと残っているんだから！」

「お父様……！」

「そうそう、このあたしを怒らせた事、後悔するがいいわ」

霞のように二人の姿が薄くなる。

移動魔法を使っているのだと気付いたファイが炎を纏った拳を突き出した。

あと数ミリで触れると言う所で二人の姿は消え失せた。逃げられたのだ。

「くそっ……！」

今日の所は解散と言う事で、帰宅路へ着いた瑠衣。しかし顔色はそれほどよくない。疲れたのもあるだろう。でも、それだけじゃなく、何かが引っ掛かっているような

ぼつっとしていると足取りがふらついていたらしい。ファイに後ろから頭を小突かれる。

「お前、歩きながら寝てるんじゃないの？」

「失礼な！ただ、ちよつと疲れただけよ」

ふつつと息を着いて瑠衣は歩き出す。空は既に蒼闇になりつつあった。

「……今日は本当に不甲斐なかった。お前を危険な目にあわせるわ結局悠の親父の奪還は出来なかったわ」

いつもここまで深刻に落ち込む性質ではないのに、そうとう思い詰めているらしい。

「ファイばかりが気に病む必要はないと思うよ。ほら、家に着くから姿隠して」

「ああ」

ふつと頬を緩めた様子を見ると一応慰めにはなったようだ。

玄関を開けて家に入る。

と、丁度部屋に入ろうとしていた祖母と目が合った。一瞬の間を置いて血相を変えてこちらへとやって来る。

「どうしたの、その傷！？服も何だか濡れているようだし……」

「ああ、ちよつとね」

「何か危険な事でもやらかしているんじゃないでしょうね！？おじいさんみたいに」

言いかけた祖母がはつと口を押さえた。

「お祖母ちゃん？」

「……いいや、何でもないよ。それより、いいね？危険な事をしているのなら今すぐやめなさい。巻き込まれているのなら、相談くらいしなさい」

「大丈夫。心配しないで」

踵を返し、二階の自分の部屋に入る。階段を上り終わるまで祖母の視線を感じていたので怪しまれないようにゆっくり上るのに精神力を使ってしまった。ぐつたりと前のめりに伸びをする。

「何だかあの人、俺の事知っているような感じだったな」

「一瞬えっ？て思っちゃったよ」

「まあ一時期お前のじいちゃんと色々あったからなあ」

「……へっ？」

新たな新事実を口にしたファイに思わず勢い良く立ち上がり、テーブルに膝をぶつける。あまりの痛さにちよつと涙を浮かべながらファイに続きを急かす。

「いやあ、本来ならまだ目覚める時じゃなかったのにあのじいちゃん特殊な方法使って無理やり俺を呼び寄せてしまった事があったんだ。そうだな、今から5年前くらいかな」

「そんな事があつたんだ」……」

「まあ瑠衣に起こされる寸前にも無理やり起こされたけど」

「えっ、何したの!？」

「……まだ話すべきタイミングじゃないな」

ファイが何処か遠くを見ているようだった。

「あの人が言った時が来たら、ちゃんと話すさ」

「約束だよ？」

「二つ目の約束だな」

今はまだだと言うのなら、その時を待てばいい。

然るべき時が来れば分かるのなら無理やり聞き出す必要もない。そういう手段を取って関係が崩れるくらいなら尚更だ。

内容が気になるものの、問い詰めようとは瑠衣はしなかった。

やっぱりあの人の孫だな。深く問いただそうとはしない。その優しさが一緒だ……

この優しさに包まれている事を感じられる今なら言えるかも知れない。ここ最近何となく感じ始めていたこの気持ちを。言い分によれば前代未聞だと言えるこの気持ちを。

意を決して口を開く。

「あ、あのさ」

「ん？」

きょとんと瑠衣が首を傾げる。

一度だけ感じた事のある、この胸の高鳴りを意識しつつもファイ

は言葉を紡ごうとする。

「お、俺……、主としてじゃなく、お前が」
言いかけたその時だった。

瑠衣の携帯が突然鳴り始めたのだ。その音にびっくりしてファイは硬直、そのままズッコケる。

当然だが瑠衣は携帯を手に取り、いじり始める。全くこのような便利な機械に邪魔されてしまつとは、こちらにとっては不憫なものだ。

「誰？」

「あゝ、織音だった。ちゃんと家に着けたって」

「あ、そう」

特に気に留めなかった。

思わぬチカラを発揮してしまっただけに、肉体的疲労が重くのかかっていた。そのままファイは壁にもたれて意識を手放した。

すうすうと寝始めたファイの姿を確認して瑠衣が再び携帯の画面に目を向ける。

映し出されていたメールの送り主は織音ではなく 悠だった。

内容は外を色々案内してもらいたいとの事だった。

しかし案内に託けて本当の狙いは恐らく。

「……デートなんか誘われた事、一回も無いし」

もしメールの主が悠だと言つたらまた機嫌を損ねるに違いないと瑠衣はわざと嘘をついたのだ。

紳士でルックスもそこそこいい悠。折角想ってくれているのなら、その気持ちに応えてもいいのではないかと思う。

でもなあ

ファイの事を思うとその判断をする事が出来ない。いつもは喧嘩ばかりして嫌な奴だと思うが、誠心誠意で自分を護ろうとしてくれる頼れる人物だ。そんな頼もしいファイの姿も思い浮かぶので悩んでしまうのだ。

曖昧な態度を取れば傷つくのはきつと悠だ。近いうちにその答え

を見いださなければならぬのかも知れない。

とりあえずデートの件に関してはOKを出す。そうそう、マナーモードにしておかないとファイの眠りを妨げる。

メールを送ってすぐに返事が届いた。音じゃなく振動なのでこれなら睡眠の邪魔にならなくて済むし、怪しまれない。

返って来た返事は喜びの一言と、日時場所の知らせだった。明日の八時、悠の家で待ち合わせだ。

やっぱり、ファイには気付かれないように出なきゃね

きつと怒るだろうなとか思いつつ、瑠衣は部屋を出るのであった。

chapter 18 恋

「……まだかなあ」

早く来て欲しいと言わんばかりに体がうずうずしていた。

と、角から自分の待ち人が現れる。今日は何だか昨日と違ってよ
り女の子らしい格好だ。

「ごめん、待った？」

「ちよつとだけだから平気だよ。あれ、ファイ君は？」

「あ 置いてきたから気にしないで」

「そつか。じゃあ何処かおススメの場所に案内して下さい」

「了解」

自然と差し出された手に瑠衣は迷わず手を重ねた。きゅつと力が入って握られる。エスコートするのは自分なのに、これじゃあ悠がエスコートしていくみたいだ。

元気よく二人はこの町のすぐ近くにある街へと向かった。歩いて十五分程度で着けるこの街には学生にはもってこいの遊び場が多い。アミューズメントが豊富にあつて、特に女子の中ではプリクラを撮るのに週一回ほど行く場所でもある。瑠衣の場合はなかなかプリクラは撮らないのだが。

賑やかな街の様子に悠の目がキラキラ輝いていた。

織音が絶賛していたアミューズメントに入り、最新鋭のプリクラ機に入る。

「これってプリクラ？」

「そう、結構面白いし思い出になるからね。はい、くるよ」

ポーズを決めてパシヤリとシャッターがおちる。数パターンそれが続き、規定の枚数を超えてボーナスショットに入った時だった。

テンプレートに選ばれたのはカップル用のキラキラハートだった。しかも画面が指示したポーズは、ほっぺにキスだった。

二人顔を見合わせ、笑う。

「出来る訳、ないよね？」

「ないない」

とりあえず隣り合って撮ろうとポジションに向かう。

『いくよ』三、二

カウントダウンが始まる。

『……………』

シャッターがおちると思った瞬間、悠がこちらを向いた。何事かと目だけを彼に向けた。

一瞬が長い間に感じられた。そっと頬に唇が触れる。ゆっくりとその後にシャッターがおちる。

終わりの合図が出て瑠衣はその場を動けずに居た。

一方の悠はちよつと頬を赤らめつつも普通だった。画面の指示しただらくがきコーナーへと先に移動していく。

何だかズルイ

真っ赤になつた顔を隠すように俯きながら瑠衣も後を追った。

「ああ、面白い！」

他にボウリングやら卓球やらをした後、小休憩としてファストフード店で軽い昼食をとっていた。満面の笑みを浮かべる悠を見るとこちらまで楽しくなる。

でも瑠衣は薄々察していた。彼の本心が。

「特にこのプリクラがいいよね」

先程撮ったプリクラをひらひらと見せる。ほっぺにキスも露になっている。

俯く瑠衣。いやだ、もう知らないフリ出来ない。

「……………めて」

自分でも情けないと思うほどか細い声が出た。しかし悠はそれを敏感に聞き取り、笑顔をなくす。

心が張り裂けそうだ。

「無理して楽しいフリしないで……………」

父親が捕らわれ、何をされるか分からない状況にある今、不安で笑っていられるはずがないのだ。デートなんてとドキドキしていた自分が恥じられる。彼はその不安を無理やり押し込めるために今日街へ出向いたのだ。忘れてしまえば、楽になると。

でもひとしきり笑った後の表情はその不安を明らかに物語っていた。

しかし指摘されてなおも悠は隠そうとする。

「確かに父様が捕らわれているのは事実。でも、楽しんでいるのも事実だよ」

必死で隠そうとしている様が余計に悲しい。

「私じゃ駄目なんだ」

「えっ？」

「私じゃ何もかもさらけ出して居る事は出来ないんだね」

信用されていないのだと感じた。

心の弱い面で繋がった人だと思ったのに。それはただの思い上がりに過ぎなかったのだ。

違う。どんなに仲が良くても隠したい気持ちだってある……

心の隅で小さく反論が鳴り響く。しかしそれを大きく上回って信用されていない、裏切りだと思っ感情が溢れ出して来る。

言ってはいけない言葉だと分かっいても口が勢いで動く。

「隠すなんて、最低だよ」

荷物を取り、そのまま店を出た。

傷ついた彼の顔が思い浮かび、涙が零れた。

最低なのは、私じゃない

胸が苦しくって、人通りの少ない路地の端っこに辿り着くとその場にしゃがみ込んだ。

自分には素直なままでいてほしい。隠し事なんてしてほしくない。自分の気持ちに嘘をついてほしくない。これらの感情は全て傲慢な我儘でしかないのだろうか？

心の中には今まで見てきた彼の表情が溢れていた。

「私……」

ふいに、気付いてしまった。こんな感情、何処かで覚えがあるものだと。

「私、好きなんだ」

たった数日の仲であるが、確実に惹かれていた。

それなのに、傷つけてしまった。ただでさえ不安定な心を更に追い詰めるような真似をしてしまった……！

何よりも自分の事が許せず、嗚咽を漏らしながらも自分の胸を叩いた。

「つぶ、つぶ……」

と、人の気配を感じて顔を上げてみた。

視界が滲んで誰なのかは分かりづらいが、見知った赤の髪で誰なのかすぐに分かった。

そう、今朝自分の部屋において来た精霊

怒られる。そう思って瑠衣は自分の耳を塞いだ。

手首が握られ、耳から剥がされると同時にファイの怒鳴り声が直撃した。

「こんの馬鹿ヤロオ！」

「ご、ごめんなさい！お怒りはごもつともですが、お許し下さい

！」

「許さない」

壁に打ち付けられ、瑠衣は逃げ場がなくなる。

見上げるとファイが真剣な眼差しでこちらを見ていた。

「瑠衣に辛い思いをさせる何かがある以上、俺はそれから守る。

主の意向など関係ねえ。主に苦痛を与えたくないのは誰だって同じだろ。黙ってみていられる訳ねえし」

「ちよ、ちよっと……」

「ん？」

「いつも思うけど、どうして呼び捨てなの……」

「ああ、別にいいだろ？」

主と言いつつも敬う心がないなんて、矛盾している奴だ。
それでもお前と呼ばれるよりはマシだ。特別な人に名前を呼ばれ
ているように。

優しくファイが瑠衣を包み込む。

今は、この温もりに甘えさせて……

再び泣き始めた瑠衣にファイはその理由を問い詰める事が出来な
かった。ただただ側に居る事しかどうしようもなかった。

chapter 19 すれ違い(前書き)

受験に集中するため、これ以降の更新は一月ほど停止させていただきます。

なお、受験が終わり次第、更新を再開しますのでどうかそれまでご辛抱のほど宜しくお願いします。

chapter 19 すれ違い

泣きはらした顔を家族に見られ、どうしたのかと問われたが適当に流した。

シャワーで体を清潔にした後は学校の準備もそこそこにベッドに倒れこんだ。

帰ってからファイとは一言も喋っていない。

話してはならないような張り詰めた空気が漂っているため、話題を切り出せないのだ。

いつもなら思いつきり詮索するくせに

明らかにいつもと様子が違つと、調子が狂いそうだ。

今の瑠衣にはファイの背中しか見えない。どんな表情をしているのか、何を考えているのか窺い知れない。

もしかすると、これでも主を氣遣つてくれているのだろうか。

「……ありがとう」

それだけ言つて瑠衣も背を向けた。

臉が重かつたので、あつさり眠りに着く事が出来た。

背を向けていたファイが横目で瑠衣が眠つた事を確認する。

そして外で様子を窺っている精霊に入つて来いと合図を送る。

壁をすり抜けて入ってきたのはカシオだった。

「どうやら俺の予想は当たっていたようだな」

「何の」

「お前が人間に 契約主に恋心を抱いてしまった事」

頭がいいだけあつて、何でもズバズバ当ててくるのがイラつく。

「それで？俺を止めに来たのか？」

「止めようとは思わない。でも、我が主の幸せをお前が邪魔するようなら許さぬと言う事だ」

「忠告かよ。もうお前と戦つのはやめておきたいな。でも、その心配はないさ。今日の様子でもう知っちゃった。瑠衣は、悠に惚れ

てるって。だから俺はもう
何も望めない。」

「そうか。じゃあ、あの質問の答えとして受け取る」

「……」

目が覚めたら瑠衣の姿がなかった。自分を置いて織音の元へ行くわけがない。じゃあ行く先は喧嘩ばかりする相手の所。

悠の家に押しかけた時、カシオが冷静に二人は仲良くデートだと言った。

「お前、重ね見ているだろう。あの方と」

「……確かに似ている。でも、瑠衣とは別人だろ。第一、もう数百年以上は経っているし。あの人が姿を消した時からな」

あの人が指すのは一人の精霊だった。

今は火、水、風、土、雷の五人だが、以前にはもう一つの属性が存在していた。それが、樹の精霊だった。

当時の樹の精霊は女で、ファイとはよく話をしたりする仲だった。ファイ自身は特別な存在として認識していた。恐らく彼女も、

だが彼女は突如姿を消した。天帝は何か知っているのだろうか、何も言わなかった。

あれから今でもその思いが抜け切れていないのだ。また何処かできつと出会えると信じているから……。

そして瑠衣に出会い、契約を交わした。しかし彼女の人柄があの人に似ているのだ。彼女に恋心を抱いているのは、彼女をあの人に重ねているからだろうとカシオは言いたかったのだ。

何処かでそう思う心はあるだろう。でも過去は過去だ。その区切りはついている。そして瑠衣が彼女である確立はほんの少しの確率でしかない。本人でないと簡単に結論付けられる。

「……俺が駆けつけた時には既に我が主は一人で、彼女を傷つけてしまったと悔やんでいた」

「そうか」

「そういう場合は優しく慰める事を許可する。言いたい事はとり

あえずこの位だからそろそろ帰る」

「ああ、じゃあな」

再び壁をすり抜けて出て行ったカシオを見送り、ファイはふうつと息を着いた。

今はまともに瑠衣の事を見れそうにもない……。でも避けることも叶わない。

いつその事、新しい契約主でも探すかな

未練がましく瑠衣の側に居たいと思う自分が情けなかった。

「……」

「ああ、瑠衣、一体何をしたらこうなるのよ……」

「何をしたらって私何もしてないもん」

横目でチラリと見れば、女子に愛想を振りまくファイの姿が。今までくっ付いて離れなかったのに、これはどういう風の吹き回しなのだろうか。

ちやほやされて、笑みを浮かべるファイの姿は自分の知る姿とは似ても似つかない。

「おまけに悠君とは会ってないみたいだし。今日も久しぶりに家へ行くこうって言うのに乗り気じゃないしさ」

「だって……、酷い事を言っちゃったんだもん。きつと向こうだつて会いたくないでしょ」

いつになく奥手な瑠衣にイラツとした織音は急に瑠衣の襟首を掴んだ。喧嘩だと思ひ込んだ女子数名から悲鳴が上がる。ファイもはつとしてこちらを向く。

「逃げてたつて何も変わらないじゃない。さっさと行くわよ!」

「えっ!? ちょっと、えぐっ……」

織音がファイをちらりと横目で見た。どうやら織音は全てを見透かしているようだ。

纏わり着いてくる女子を何とか追っ払い、ファイは二人を追う。自分で動けない人形のようにズルズルと引きずられていく瑠衣と目が合った。目は行きたくない、助けると言わんばかりだ。

ここで引き止めて、その事がカシオに知れたら確実に殺されるな……

彼の猛攻を思うと行かせたくない思いが引っ込む。

「織音さん、何を、そこまで、意固地に、なって、るんです、か？」

「マリアナ、ちょい耳貸して」

早足のまま、マリアナに耳打ちする。

その途端、マリアナの目がキュピーンと輝きだした。そして意味ありげな笑みを浮かべ、親指を立てる。一体何の話をしていたのか何となく予想がつくのが嫌だ。

彼女らが目論むのは悠との進展だろう。

唯一の助けの綱だったファイでさえ助けようとしない。

護ってくれるんじゃないの……

行動の矛盾に瑠衣は心の奥でガツカリした。やはり、あの言葉は単なる飾りでしか過ぎなかったという事だ。

悲しかった。何かが崩れ落ちていくような感覚。

ずっと望んでいたはず。一つ何かする事に口を出して欲しくないと。それが叶ったのに、ちっとも嬉しくない。

「……」

しばらくして悠の家へと辿り着いてしまった。呆然と立ち尽くす瑠衣を余所に織音がチャイムを鳴らす。

だが、返事はない。

もう一度押してみる。

と、突然メイドが扉を吹き飛ばす勢いで飛び出してきた。

「悠様！……あら？」

どうやら覚えてもらえていたらしい。

中へと案内されると思った次の瞬間、瑠衣はメイドに肩を掴まれ

揺さぶられた。

「貴方、この前悠様とお出かけになりましたね！悠様が何処に行
ったか知りませんか！？」

「へ？」

どついう事なのか理解できず上擦り声を上げる瑠衣。

涙目でメイドが訴えた。

「悠様が、数日前からお帰りにならないのです！」
全員の顔が強張った。

chapter 20 無茶(前書き)

この度、無事受験が終わりましたので更新していきます。

時が止まったかのように全員動けないでいた。

数日前から帰っていない。メイドが言う時期から言えば、瑠衣が逃げ帰ったあの後から行方が知れていないという事だ。

突如、瑠衣がその場にへたり込んだ。

「瑠衣!?!」

私のせいだ。あんな事を言ったからショックを受けて……! いくらカシオが憑いていると言えど、一人で何処かをうるついでいれば襲われる危険性は高くなる。

ただでさえメリッサは強力だ。まともに戦って勝てる相手でもない。

ならば遭遇してしまえばそれが最期。ただならぬ危機が迫っている!

「どうしよう……彼に何かあったら私のせいだ!」
頭を抱え込む瑠衣。

そんな彼女に真っ先に手を差し伸べたのは　ファイだった。手首を掴み、力の入らない足で何とか立たせると肩をしつかり支えて言う。

「ここでどうこう言っても仕方がねえだろ。ここで嘆いているより、探した方が早い」

「……でも」

「でもとか言ってる躊躇している時間は無駄だって言ってるんだよ!」
久々の怒鳴り声にマリアナもびくつと背筋を強張らせた。

ふとファイの表情を窺うといつも強気な目つきをしていた。その目に絶望の文字など映ってはいなかった。

「さっさと探しにいこうぞ!」

「ひゃっ!」

「そういう事で、私達探しに行つて来ます!悠君が帰ってきたら

連絡を！」

「わ、分かりました。あの、警察には……」

「もう少し待ってあげて！」

人通りのない路地へ入るとファイは制服からいつもの服に早変わりすると、マリアナと共に精霊の気配を探し始めた。

織音と協力して瑠衣もあちこちを探し回る。

だが、あるのは閑散とした住宅街の様子だけで彼らの姿はこれっぽっちもなかった。

何処？何処に居るの？お願い、無事で居て……！

その場で天に祈りを捧げて目をぎゅつと閉じた。

ふいに脳裏に閃光が走った。映像が映りこむ。

悠とカシオの姿。水の球に閉じ込められ、口から息を吐いている。

このままじゃ死んじゃう！

手を伸ばしても彼らには届かない。

と、彼らの後ろには特徴的なオブジェがひっそりと佇んでいた。

瑠衣はそれに見覚えがあった。

それに気をとられていると、背中を叩かれ、瑠衣ははっと目を開

けた。振り向くと息を荒げている織音の姿。

「そっちはどうだった？」

「……居なかった。織音は」

「居たら一緒に引き連れてくるわよ……」

ぶつぶつと言いだめた織音。

先程の映像は一体何だったのだろうか。ただの自分の空想に過ぎなければいいのだが。否、普通は空想なのだ。だが、万が一それが事実であるとしたら。

手掛かりは未だに見つかっていない。ならば、不確かな情報でも可能性が否定しきれないなら行くしかない。

「織音、心当たりが一つあるんだけど……」

「えっあるの！？ならさっさと行くよ！それで、何処なの？」

一呼吸おいて瑠衣は素直に答えた。

「マリアナと出会った廃墟ビル」

あの日と同じように黙ってそれは佇んでいた。

確かにあの時、あつたはずだ。あの特徴的な偉人を形取ったオブジェが。

しかしそのオブジェの姿はなかった。

「確かにここにあったはずなんだけど……」

「ああ、そう言えば変なおっさんの形した塊があつたよな」

ファイも同意しているのでここにオブジェがあつた事には間違いない。

ふと振り返るとマリアナの目が何かを捉えている事に気付いた。

黄土の目に確証の光が宿っていた。

彼女が進み出てくるので二人はその場を退いた。

マリアナは唐突に壁を勢い良く押した。すると、すり抜けるように手が入り込んだ。

「これは、土ではなく、水の、幻覚、です」

正体を知られたトラップはあっさりと消えて、浮かび上がったのは地下へと続く階段だった。

「こんな階段、最初に来た時なかったのに……」

「俺達がここに来る前から潜んでいやがったのか？」

「オブジェで入り口を隠し、更に壁に見せる幻覚まで使って、念入りとした言いようがない代物ね」

「でも、どうしますか？敵地に、彼らが、捕まっているとは、言えませんか」

「いや、居るような気がする」

ファイが暗闇を睨みつけながら言う。

「私も、そんな感じがする」

織音とマリアナが視線を交差させ、頷く。一向は慎重に足を踏み入れた。

ファイが炎を生み出して照明代わりにする。かなり長く続いていて、うねりがある。出口が途中で完全に見えなくなる。

閉じ込められたらそれが運の尽きだろう。

と思つた瞬間、シウルシウルと何かが蠢く音が背後からした。

「あつ……」

水の手カラによつて出口が塞がれてしまったのだ。

これはもう先に進んで相手に勝つしか脱出方法はない。

「急ぐぞ。はぐれるんじゃないぞ」

リズムを一段と早くして階段を降りる。

ようやく段が終わつたのはいいが、階段がまだあると思ひ込んで足を踏み出した溜衣はよろめいた。

「ひゃっ」

そのまま前へズッコケる。

「あゝあ、溜衣大丈夫？全くドジなんだから」

「だ、大丈夫じゃないかも……」

何だか顔が濡れている感じがする。泥水だったらきつと顔も悲惨な事になっているだろう。ファイが照らそうとするので慌てて顔を隠した。ハンカチでとりあえずゴシゴシ拭いておいた。

皆溜衣の方に視線がいつていたのでまだ気づかなかつた。

事が終わり、全員が正面をみた瞬間。この世界が終わつたような気がした。

白い顔が暗闇の中で浮かび上がっていたのだ。

「ゆ、幽霊いいいい！」

マリアナと溜衣はそれぞれ織音とファイの後ろに隠れた。

しかしいつもそれほど恐怖を感じない二人も震えていた。ただの幽霊どころではそんな反応を示さないはずだ。

視力のそれほどよくない目をじつと凝らしてみる。白い顔でも整つた顔立ち。頬に赤みがあればまるで幼い少年のような……。

「う、嘘……」

それが悠だと分かつた瞬間、明かりが点いた。悠だけでなくカシ

才の姿も見えるようになる。二人とも、水に包み込まれていた。

「先にかかった獲物を助けにわざわざ助けに来てくれてありがとう。おかげであたしはもつと強くなれるわ」

メリッサと契約主が現れる。

先にかかったと言う事は、彼女達が襲って行った訳じゃない。自ら乗り込んで行ったのだ。

たった一人で。誰にも相談一つしないで。

chapter 21 仲間

「さあ、宴を始めようじゃないか！」

先制攻撃を始めるメリッサに戸惑いの色を隠せないままファイとマリアナが戦闘体制に入る。

目の前で繰り広げられる激しい戦いなど目に入っていないかった。無残な姿になった悠とカシオをただただ見つめていた。

自分一人で立ち向かっていったんだ……。本当の気持ちに付き従って！

瑠衣の言った事を鵜呑みにし、悠は行動を起こした。その結果がこれだ。

気持ちに嘘をつかないのが正しい訳ではなかった。時には嘘をついてでも護るべきものがあつたはずなのに。

こんな酷い目に合わせたのは他でも無い。

「私の……せいだ」

無数の滴が頬を滴り落ちる。

「ごめんなさい、ごめんなさい……！」

「瑠衣、落ち着いて」

泣き叫ぶ瑠衣を織音が宥める。織音も泣いていた。必死に堪えようと震えていた。

そんな二人に罵声が飛んだ。

「何勝手に諦めてるんだよ！」

一瞬の間も命取りなのに、それでもメリッサの猛攻を何とか防ぎながらファイが叫ぶ。

「まだ可能性が残ってるだろ！泣き言は、現実を目じゃなく手で実感してから言いやがれ！」

そうだ。青白い顔をしているから全てが終わっているとも限らない。僅かな命の鼓動を今も尚して苦しんでいるのなら尚更だ。

織音を押し退けるように瑠衣は立ち上がるとそのまま悠に向かっ

て駆け出す。無防備な背中が露になる。

「しめた！」

大チャンスを逃すわけがなく、メリッサが瑠衣に向かって水を凍らせた刃を投げる。

「瑠衣！」

ファイが反応して庇おうと向かうが、刃の速度の方が速い。瑠衣を貫いてしまうと思った時だった。

刃が何かに引き寄せられるように逆方向へと向きを変えた。突然の事に動揺し、まともにメリッサは自分の作り出した刃に傷つけられた。

唇の端から血が流れ、メリッサは奥歯を噛み締めてカシオを睨みつけた。

「まだそんなチカラが残っていたなんて……！」

どうやらカシオが巻き起こした風の流れによって助かったようだ。ほっとしたのもつかの間、瑠衣の前に契約主が立ちはだかる。

「君は自分と一緒にダンスでもしていようねえ〜！」

「謹んでお断りさせていただきます！」

とは言ったものの、運動神経の鈍い方に当たる瑠衣がこの契約主を交わすのは難しい。あまり手間取っているとメリッサも手出ししてくるだろう。

『目を閉じて、束縛を念じるの』

何処からともなく声が聞こえた。過去に聞いたことのある声だった。

とにかく切羽詰った状況である以上迷っている暇はなく、瑠衣は声のとおり目を閉じた。そして目の前にいる契約主の束縛を願った。こちらへと伸びてくる手の気配を感じ、カツと目を見開いた。

その途端、契約主の笑みが引きつった。ピタリと動きを止めたまま動かない。

「なっ……何だこれ……は」

訳を考えるのは後回しにして、先を急いだ。

悠の閉じ込められた水に触れると押しつぶされそうな圧力が手にかかり、その痛みに瑠衣は嗚咽を漏らした。

ここで尻込みをしては駄目だ。

意を決して手を伸ばす。あの圧力が襲ってくる　　と思いきや、手には圧力どころか水すら纏わりついていなかった。

そのまま悠の足を引つ張り出す。水が弾ける。

びしょ濡れで冷たい悠の身体を瑠衣は包み込んだ。微かだが、脈を感じ取れる。

かはつと悠が咳き込んだ。呼吸も止まっていたのだ。ずっと水で浸されていたのに突然呼吸が出来るようになったらむせ込むに決まってる。

紫に変色した唇を震わせながら悠がうつすらと目を開けた。

「……瑠衣さん？」

「良かった、良かったあ！」

そのまま瑠衣が悠に抱きつく。

「ごめんね！ごめんなさい！私が悪かったの！本当に、ごめんなさい」

「瑠衣さんは何も悪くない」

ふいに悠の顔が近づく。唇に少し冷たいけど柔らかい感触。

キスされたと気付いたのは既に悠が顔を離してやんわりとした微笑みを浮かべた時だった。

勿論、この状況は全て見られていた訳で　　。

ズゴゴゴゴと地響きが響き渡る。ファイとマリアナの様子が一変する。

その殺気の矛先はこちらではなく、メリッサだ。さすがのメリッサもただならぬ殺気に冷や汗を浮かべる。

「んのやるお！ふざけんなあああ！」

「こんなの私は認めませんよおおお！」

炎と土が混ざり合って凄まじい威力で衝突する。

「ぎゃんっ！」

落下するメリツサをスライディングで受け止めたのは意外にも契約主だった。

ちよつといい雰囲気なのを余所にファイとマリアナが目を吊り上げて悠と瑠衣に説教を始めていた。

「舐めてやがんのか！いいか！こいつは俺んだ！気安く手を出していい奴じゃねえんだよおお！」

「そうです！何いいとこ取りしてるんですか！」

彼らの尋常じゃないオーラに悠はたじろぐ。瑠衣もびっくりで開いた口が閉まらない。

しかし怖いのはそれだけじゃなかった。

突如力シオを捕らえていた水の球が破裂した。中から出てきた力シオは息つく間もなく後ろから二人分の後ろ首を掴み、きゅうきゅうと絞める。

口元は笑みを湛えているものの、目はギョロリと睨んでいた。意外とこの中での裏ボスは彼なのかも知れないとつくづく思う瑠衣だった。

「さあて、俺を放つたらかしにして、拳句の果てに約束違反した落とし前はしっかり払ってもらうからな」

「うつつ……」

先程までの勢いは一体何だったのか。

思わずふつと瑠衣は噴き出した。それを合図に織音が大笑いし始めた。悠も笑みを浮かべた。

周りの空気が少し和んだのもつかの間だった。

「……何だよ」

顔が悔しそうに歪んでいた。

「何で、そんな楽しそうなんだよ……」

ギリツと奥歯を噛み締める音。強く握り締めすぎて掌から血が流れていた。

「お前達はただ一時休戦を結んでるだけの一時的な同志なんだろ！？だったらどうせ捨てるんだろ！？それなのに何故馴れ馴れしく

出来るんだよ！」

「は？使い捨てる？何それ。人をモノみたいな言い方して」

「所詮は単なる駒にしか過ぎねえだろ？都合いいように使って、使いまくって、用済みになったらさっさと縁切つて。何感情移入してんだよオ。そんな事したら名残惜しくなるだけなのにさア？」

強気な言葉とは裏腹に目が少し潤んでいるように思えるのは気のせいだろうか。

「じゃあ、貴方がメリッサを側に置くのは何故？」

瑠衣の声が響き渡った。

「さつき、メリッサの事、スライディングしてまで護つてたよね？それって精霊に余計な感情移入してるんじゃないの？」

返す言葉が見つからず、契約主は怯む。

「何があつたのかは知らないけど、私には貴方が捨てられた子供のように見えて仕方がない」

「！」

凶星を言われ、契約主はムキになった。

「五月蠅い！黙れ！」

契約主は瑠衣の胸ぐらを掴んだ。そのまま壁に向かって放り出された。

背中を強打し、瑠衣の意識が数瞬吹っ飛んだ。頭を打ってしまったらしい。

「俺はねえ、そんな偽りのごっこにはもう飽き飽きしてるんだヨ。見ているだけでムカつくね」

後ろに居るメリッサの目が一瞬悲しみの色を見せたような気がした。

chapter 22 心の扉

「どうせ壊れる関係なら、いつその事俺がぶち壊してあげるよ」
メリッサに指示をする契約主。彼女がこちらへと歩み寄ってくる。精霊達の顔から血の気が引いた。彼女が人間に近づくとしたら一つしかない。瑠衣の魂を取り込むつもりだ。自分は強くなり、更に相手のチカラも封じてしまう一石二鳥の利益がある魂狩りソウル・ハンティングをしない訳がない。

咄嗟に動こうとしたファイだったが、彼らの居る場所には水の気がたっぷりある。あの場に突っ込むのは危険だ。

マリアナとカシオがチカラを使おうとしたが、突如として現れた水によって手と足を縛られてしまった。

その間にととう瑠衣に手が届く範囲にメリッサが到着してしまった。先程の反動で動けない瑠衣はただただその姿を見ることしか出来なかった。

メリッサがその場に屈み、こちらへと手を伸ばしてくる。その手は小刻みに震えていた。

「どうして……？」

振り絞るように瑠衣は声を出した。

「どうして望んでいない事をするの？」

「……何よ、この女。何でも知っているような口調で偉そうに」

「分かるわ。貴方が躊躇っている事が。主に付き従う事が果たして本当に正しいのか迷ってる」

「っ」

かつてない動揺を見せるメリッサに主が眉を顰めた。

チラリとファイを見てからメリッサが契約主と対峙した。

「メリッサ……お前すら裏切るのか？」

「裏切るんじゃない、正当な答えを出すべきだという事よ。もう、もう終わりにしよう？蓮斗」

「お前も所詮は感慨にふける使えない駒だったと言う事だな。信じてたのにねえ。その信用を裏切るなんてねえ」

とは言えど、精霊に見放された契約主など恐るるに足らずだ。ファイが炎で契約主を囲む。メリッサのチカラならこんなもの、一瞬にして消せる。だが彼女が炎を消そうとはしなかった。

一方の契約主は無防備になった事をようやく自覚し、炎に怯えてしやがみ込む。

このままでは見殺しにしてしまう。ファイが人殺しになってしま

う。
壁を伝って立ち上がり、フラフラとファイに歩み寄った瑠衣はそのままファイの胸に顔をうずめて言う。

「もう十分よ、止めてあげて」

「でもこいつ、何も反省してねえだろ！メリッサを良いように使って、人の繋がりを馬鹿にしやがって！」

「理由も聞かずに判断していいものじゃないでしょ！」

瑠衣に叱られてしまったのはファイも逆らう事は出来ない。炎を消し、ふてくされてぶいっつと横を向いた。

「ごほごほと咳き込む契約主に瑠衣は近づく。さすがに一人では危険だとファイもそっぽを向いている場合ではなかった。瑠衣と少し距離を置きつつも側のポジションにスタンバイする。これなら逆襲に襲われてもそれなりの対処が出来る。

だが瑠衣には分かっていた。彼らにはもう抗おうとする気力もない。

「ふんっ、結局チカラで捻じ伏せたじゃないかあ」

負け惜しみを言う契約主に瑠衣はきっぱりと言った。

「力にこだわるのは力で捻じ伏せられた経験があるからでしょ」

「……力で誰かを捻じ伏せるのはこの世界、常識のようなものじゃないかあ。金だの権力だの下を差し置く。そして奴隷のように扱おうとする。責任を逃れるために人を使い捨てる。違うのかなあ」

「！」

「違うよ」

迷いのない返答に契約主はたじろぐ。

「確かに使い捨てたり、裏切りもあったりする。けど、そればかりがこの世界の全てじゃないよ」

「ないはずの光が差し込むような調トナリ。はっと契約主が顔を上げれば瑠衣の微笑みが目に入った。無防備で無垢な光のオーラが見えるようだった。

「少なくとも私はそんな風には思わない」

差し伸べられた手を自然と取っていた。何とか自分の足で立ち上がり、少し目下の位置の彼女の顔を見る。

「悲しい事や辛い事もあるけど、それと同じくらいに楽しい事や嬉しい事もたくさんある。決め付けて失望していたら、あるはずの幸せも見逃しちゃうじゃない。まだまだ先の長い人生、そうして終わるつもりなの？」

過去に体験した事がふと蘇ってくる。

ずっと仲間だと思っていた奴等。なのにある日、皆自分から離れていってしまった。

絶望を感じ、荒れる毎日。でも……。

ほとんど相手にはしなかったが、声をかけてきた奴もいた。あいつ等に少しでも心を開いておけばここまで孤独になることはなかったのだろうか。

今からでもまだ間に合うと言うのならば。

メリッサが頷く。

「……オレの負けだよ。負けだ負け。戦う気が失せちゃったあ」

「蓮斗、あたしがね、あんたと契約したのは……あたしに似てたからだよ」

態度そのものは素直じゃなく、素っ気無いが。それでも頬の赤みから照れているのが分かる。

「何もかもを封じ込めて、押しつぶされそうになっていたのが同じだったから。よくよくその気持ちがあったから……」

「メリッサ……」

固まった頬の筋肉をゆつくり緩めて久々の笑顔を見せる。
今なら確信を持って言える。彼女に、メリッサに出会えて良かった。

二人の様子を優しい目で見守る瑠衣にファイがぼんつと肩を叩いた

「人って変われるものなんだな」

「ええ。諦めずに思いをぶつけていけばね」

人の生み出すこの奇跡こそが最大のチカラなのかも知れない。

とりあえず落ち着いて円形に並んで座る。それでもメリッサと蓮斗は少し隙間を空けていたが。

緊迫した赴きで織音が口を開く。

「いくら和解出来たからってそのまま許せるほどじゃないと思うんだけど」

彼女の言うとおり、タダでは許せない。禁断の魂狩りソウル・ハンティングによって一人の関係ない人間が命を落としたのだから。

「そりゃ、そうだろうねえ」

「まあ、しょうがないって感じ？」

二人とも、それなりの覚悟はあるようだ。

「天帝も恐らく地を震わせるような笑みを浮かべて帰りを待つてるぞきつと」

「うう、あの方の、お怒りは、怖いです……」

「下手したら核コアを破壊されてしまいかもな。俺でも腹に据えかねる」

進められて行く処分の話にメリッサが突然ストップをかけた。

「ちよ、ちよっと待って。もしかして、今すぐあたしを天に還すつもり!？」

「当たり前だろ！取り込んだ魂も輪廻に戻さなければならねえし、お前も地上に置いとく訳にもいかないだろ」

するとメリッサの目が潤みだす。ギョツとした次の瞬間には大声

で泣き始めていた。

「やだやだ〜！まだ還りたくないいいい！お願いだから、それだけはやめてええ！ここに居させてええ！」

まさに玩具をねだる子供のような様だった。彼女がこんなタイプだったとは意外だ。

駄々をこねて暴れるメリッサ。そんな彼女は誰の手にも負えなかった。

悠とカシオを除いては。

chapter 23 シナリオ

突然メリッサの動きがピタリと止まった。空気の渦が彼女の胸元に発生していた。

はっと皆の注目がカシオに向けられた。が、彼が横目で悠を見ているので彼がそう命じたのだと悟った。

茶の目を鋭く光らせるその姿はいつもの穏やかな性格を感じさせなかった。

「父さんは何処か、今すぐ答えて貰う。さもないと、そのまま核を取り出す」

「っ。あなたの父親は奥の部屋に居る」

逆らうべきでないと判断したのかあっさり居場所を吐いたメリッサ。メリッサを解放し、悠は目もくれず奥にある鉄の扉を開く。

広がる青白い空間の真ん中に縄で縛られている人影。

その人物は悠と同じ茶の瞳を驚きで見開いた。

「は、悠……。来ちゃ駄目だ。お前は逃げなさい」

「何を言ってるんだ父さん！僕は父さんを助けに来たんです！それに、もう心配ありませんよ」

逸る気持ちを抑えて慎重に縄を解く。

感動の再会に親子はひしと抱き合った。ふと悠の父親と瑠衣の視線が重なった。

彼の顔はみるみる青白くなる。様子のおかしい父親に悠が気付き、腕を離す。

まるでこの世の終わりだとも言いたげだった。

一間あって悠の父親は口を開いた。

「君は……。あの厳崔老のお孫さんだね」

厳崔。それは祖父の名前だった。何故祖父の名前を知っているのか。

更にその視線が横に移る。そこにはファイが居る。だが精霊と関

わりのない者には見えない。はずなのに。

彼は確実にファイの姿を捉えていた。

「見えて、いるのか？」

思わず発した声に悠の父親が頷く。

「珍しい人間だな。本当にごく僅かしか居ない目の持ち主とは」

「えっ！この人、見えて、いるんです、か！？や、やだ、恥ずかしい……」

「マリアナ、それ今言う事じゃないでしょ」

「俺は知ってたけどな。我が契約主の父親である蒼石様が数少ない精霊探知の持ち主だと」

本当に珍しい存在があるものだ。

「その父親があたしの邪魔をしようとしたものだから人質に使わせて貰ったんだけどね」

メリッサが呟く。

確かに精霊の存在を知り、敵である契約主の父親となれば人質としては最高の条件だっただろう。

「それより、貴女は契約主になってしまったのかい？」

「えっ？……はい」

「……悪い事は言わない、今すぐ契約を解除しなさい」

突然の言葉に耳を疑った。

場の空気が凍りついたかのようにだった。

「何を言い出すかと思えば……」

ファイがきつと悠の父親を睨んだ。

「そう簡単に契約は断ち切れない事を知ってて言ってるのか？」

「でも出来ない訳ではない。そうだろう？」

「……っ、確かにそうだがっ。でも、それは……」

瑠衣も記憶の底から思い出す。

最初、マリアナは別の人間と契約をしていた。それをマリアナは一方的に断ち切ったのだ。

その時、精霊と関わった日々や事柄を含む全ての記憶が消去され

るのだ。

そうなれば、この争いの中で出会った悠の事も、祖父が死んでからのほとんどの記憶がなくなってしまう。

無論、精霊の存在すらも。

全ての記憶が消えてしまったら悠の事も忘れちゃう……。マリアナやカシオも、メリツサも、蓮斗も。ファイも……

「それは……出来ません」

迷いを振り払って瑠衣はそう告げた。

「この先、どんな危険が迫ってきたとしても、私は契約は解除しません。解除させません」

「瑠衣……」

「約束してくれたでしょ？私をちゃんと守ってくれるって。それを信じてる。だから何が起こっても大丈夫だと思ってるから。出会えた精霊達や人達の事、忘れたくない」

既に引き戻るつもりはなかった。

悠の父親は頭を振った。

「君は何も知らない……。だからそんな事が言える」

「何も、知らない？無知でも私は構いません。死のうが何だろうが、後悔だけはしたくありませんから」

これ以上話を聞いていたら本当に失くしてしまいそう。瑠衣は無理やり終止符を打つ。

「それで、巖崔老は納得したのかい？」

その一言で悠の父親がまだ瑠衣の祖父の死を知らなかった事に気が付いた。

酷ではあるが、言うておくべきだろう。

「祖父は、数週間前に死にました」

「……死んだ？」

「ええ。最期まで異世界の事ばかり考えていたようでしたけど」

「……」

さすがに悠の父親もそれ以上は何も言えなかった。言うておかね

ばならない事があるのに、口が動かなかつた。巖崔と共に知ってしまつた真実を……。

起こつてほしくなかつたシナリオが見事に進行していた。

彼の心情などお構いなしに、メリツサ達の話に戻る一行。

「それで、メリツサは強制送還、契約主も記憶を消されるつて事でいいか？」

当人以外誰も異議を唱えなかつた。蓮斗も納得したかのように反論しなかつた。

そんな契約主の様子を見てメリツサが飛び掛つた。追い倒すなりに馬乗りになるとポカポカと叩き始めた。あまりにも大胆な行動に皆啞然とする。

「蓮斗はそれでいいの！？せつかく自分の心の整理がついたのにまた振り出しに戻つて！あたしは、忘れて欲しくない！あたしと一緒に過ごした日々も、今の気持ちも全部全部……！」

「メリツサ……、でも」

「周りの目とか気にしないで言えばいいじゃない！自分の本当の考えを！じゃなきゃ今までと変わつてないよ？」

しばらく黙り込んだ後、蓮斗は静かに言つた。

「無理は承知の上だが、メリツサを残してやってくれないかな？それが彼らの素直な主張なのだろう。」

声を荒げようとした織音を瑠衣が制する。

瑠衣は感じていた。彼らには既に離れがたい絆が出来てしまつている事。それを無理やり引き剥がしても、心が壊れるだけだ。

「ねえファイ、どのみちこの戦いを制するには核コアが必要なんですよ？だつたらメリツサも手元に置いておけばいいんじゃない？」

「じゃあ取り込んだ人の魂ソウルはどうするんだよ？」

「何とか分離させて、その人の魂だけ天に送つたらその魂は輪廻に戻るでしょ？」

「ま、まあ天帝がそうするだろうけど」

「そして手元に置くためにメリツサは誰かの家に引き取つておけ

ばいい、って事だな。契約主とさすがに元のまま暮らせる訳にはいかないし」

理解の早いカシオが結論を述べる。

確かにこれなら魂も輪廻に戻るし、それなりのペナルティも与えられる。仲間は多いほうがいい。一石二鳥だ。

「全ての核が揃って天へ還ってから天帝からの罰を受けなければいいじゃない。遅かれ早かれ還るならもう少し居てもいいじゃない？」

「そう……ね。天帝からの罰の方が重いだろっし」

自分達が罰を与えるより天帝に任せた方が厳粛な処置が取られるだろう。

それなりに配慮して考えたペナルティなので、両者とも納得する事が出来た。

「それじゃあ取り込んだ魂を天に還すよ」

メリッサが自分の胸に手を当てた。すると真っ白な光の球が一つ身体から剥離して出てきた。

それを天に向かって放り投げると、一目散に天井を突き抜けて消え去った。それで魂還しは完了らしい。

「んで、誰がこいつを引き取るんだ？」

ファイの声に瑠衣、織音、悠は顔を見合わせ、引きつった笑みを浮かべた。

chapter 24 正直な気持ち

「ただいま……」

学校から帰って来た瑠衣とファイを待ち受けていたのは隅っこでしゃがみ込み、震えているメリッサだった。

瑠衣の机の上には粉々になったカップの破片が散らばっていた。何をしたのかは十分明白だった。

「メリッサ」

「な、何よ……」

振り返ると髪の毛を逆立てて怒っている瑠衣の顔が目に入った。

「家の物を触るなって何度言ったら分かるのおお！」

怒鳴り声が隣近所にまで響き渡った。

こんな事になってしまったのはあの日、三人で話した結果じゃなければ決めてようという事になってしまったからだ。

見事織音と悠に負けてしまった瑠衣は正直まさか自分が引き取らなければならなくなるとは思ってなかった。こんな我儘精霊を家に連れて行きたくなかった。ファイだけでも十分手を焼いていると言っのこ。

彼女がここに来て三日経つ。彼女はどうもあれこれと調べまわりたくなる性格らしい。初日に家の物は触らないように注意したのだが、それを聞かずに触る度にトラブルを引き起こす。

今回彼女が壊してしまったのは瑠衣のお気に入りのマグカップだった。

さすがのメリッサも瑠衣の気迫ある怒りモードには叶わない。そう知った今ではおしおきを怖がる犬のように帰りを待っている。

「三日連続であれこれ壊されるこっちの気持ちを分かっしてほしいものだよ……」

ミニ掃除機で破片を吸い取りながら泣く泣く瑠衣は呟いた。

ふと壁にかかっているカレンダーに視線を移した瑠衣はある事に

気付いた。

「あ」

「どうした？」

「……明日、私の誕生日だった」

自分の誕生日の事すらすっかり忘れていた。それほどこの数週間は非常識で疲れる毎日だったからだ。

そしてはっと気付く。

もし悠に誕生日の事言ったら、お祝いしてくれるかな

この前の謝罪がてら再びデートにでも行こうか。そう思い、携帯電話に手をかけた瞬間だった。

突然ファイがふらりと傾いだかと思えばそのまま横に倒れた。

「ファイ!？」

「おい!？どうしたっていうの!？」

額を触ると熱された鉄板のように熱かった。そう言えば朝からちよつと調子が悪いとか言っていたような……。

本人が大丈夫だって言うから特に心配してなかったけど……

「これは単なる風邪だな。たぶんこの前あたしの水を浴びたせいだろうけど」

「……何処まで迷惑かけたら気が済むのよ!ファイも、メリッサも!」

うつすらとファイは目を開けたかと思うと謝罪を短く述べた。

「……悪い」

全く極端な性格の変化だ。いつもならぎゃあぎゃあ喚くくせに。

まあそれが出来ない程弱っていると言う事なのだろうが。

「瑠衣、火を灯せるものはない？」

「呼び捨てしない!えつと、アロマキャンドルならあるけど」

「それでたぶんいいと思うから火を点けて持ってきて」

「こき使うのね……」

「あ、それより先にベッドに持ち上げるよ」

「えっ!？そんな所占領されたら私の寝る場所がないじゃない!」

「つべこべ言わない！」

とりあえず二人がかりでファイの身体をベッドに寝かせる。夕食を済ましてからアロマキャンドルに火を点け、ファイの近くに置く。

メリッサ曰く、炎の気を強くしておけば回復するらしい。

呼吸の荒いファイ。人間なら濡れタオルを額に置くが、炎の精霊である彼にとっては更に悪化していくだけだ。

「一つ聞きたい事があるんだけど、いい」

「何？」

「瑠衣はファイの事、どう思っているの？」

「え？」

「その……彼氏とかにしたいかって事！」

そんな事を突然聞かれても困る。

「別に。それにあくまで私は人間でファイは精霊だし……。私達の間になんか仲が生まれるとはあまり思えないかな」

「……本気で、そう言ってるの？」

突如襟首を掴まれ、壁に押し付けられた。メリッサがとても思い詰めた表情をしていたので何かまずい事でも言ったかと口を噤んだ。「精霊だとか人間とか関係ない。一度好きになつてしまつたらそう簡単に割り切れるものじゃないよ。そんな隔たりを主が持つていと知つたらこいつはかなり怒るでしょうね」

「……メリッサこそ、あの人、蓮斗の事はどう思ってるの？」

「あんたの予想通り、あたしは蓮斗の事が好きだけど」

あつさり認めたメリッサ。

「相手が人間であろうとも好きなものは好きだから。あり得ないとか言つてほしくないし」

「……確かにちょっと突っかかるような言い方だったかも。ごめんね、メリッサ」

「あたしも少し頭にきてカッとしちゃったし。お互い様でしょ」
どうやらメリッサは現代のツンデレと呼ばれる性格らしい。素直

じゃないところがとても可愛らしさを感じる。

と、ううんとファイが唸ったので瑠衣は慌てて口を塞いだ。ちょっと大声で喋りすぎたかもしれない。

壁にかけてあった時計はもうすぐ八時半を示そうとしていた。そろそろ風呂に入らなければ。

「それじゃあ時間だからお風呂に行ってくるね。悪いけど、その間宜しく」

「今日はいいつ寝込んでるからゆっくり入ってくれば？たまにはリラックスしたいでしょ？」

「……ありがとう」

思いがけない彼女の労りに瑠衣は心から感謝した。

着替えなどを持って安心して自分の部屋を出た。

それを見送ったメリッサはふうつとため息を一つ着いてからファイの元へ視線を向ける。

普通に見ればただ眠っているように見える。だが。
「乙女の会話の盗み聞きをするなんてつくづく最低な男ね、あんたは」

返事はない。

「更に冷や水を浴びせて風邪をひどくしてあげましようか？」

「やつ、それは勘弁してくれ！」

メリッサの一言でファイは飛び起きた。

しかし体調が悪いのも、熱があるのも事実なのでふらふらと再び仰向けにベッドに倒れた。

それでも意識はまあまあはつきりしていた。

目が潤んでいるのは熱のせいがほとんどだろうが、先程聞いた瑠衣の台詞のシヨックも含まれているだろう。

「あんたも典型的だね。あの人にそっくりな子に惚れちゃうなんてさ。おまけに契約主だし、運命的なモノを感じるってところ？」

「お前も人の弱みを握って弄ぶクセ、直ってないんだからよお。そうだよ、惚れてるよ。何か文句あるか？」

「言っておくけど、一応これでお互い様なのよ？あたしの蓮斗への想いもしかと耳にしたんだろうしねえ？」

「……ああ、お前と居るとやっぱし調子悪い。喋ってても疲れる一方だ」

そう言っただけで掛け布団の中に潜ったファイ。今さっきの言葉がメリッサの逆鱗に触れていた事も露知らず。

「こつちだつて願ひ下げだ馬鹿野郎おお！」

ファイの悲鳴はルンルン気分で風呂を楽しんでいた瑠衣の元まで確実に届いていた。

「ええっ！ファイ君、大丈夫なの！？」

「まあこれでも生命力の塊だからな、放っておいても大丈夫だろう」

「でも、これも、メリツサの、せいじゃない、ですか！」

「何よマリアナ、あたしとヤル気な訳！？」

「ちよっと、そんなピリピリしなくてもいいじゃないか。病人の前で五月蠅くしたら迷惑だよ。ね？」

「うん、悠………だけだよ、ちゃんと空気読んでいるの。あとは皆KYだよ？」

ようやくお喋りの嵐が止み、悠と瑠衣、そしてファイはほっと胸を撫で下ろした。

金曜日の放課後。今日は全員瑠衣の家に集合している。ただし、蓮斗は来なかったが。

それにしても、悠が来た時の家族の反応には驚いた。皆彼氏だと勘違いしていつも以上に丁重にもてなそうとするのでまだそんな関係ではないと弁明しなければならなかったのが大変だった。

その後は後で、悠がまだ彼氏とは言えないのかといじけ始めるし、まあ一応恋人らしい行為はしたし、お互い好き合っているのだから付き合っていると言ってもおかしくはないのだが。

「それよりも、最後の一人については？」

「ああ、皆気配を探してくれているんだけど、見つからなくて…

…風の子カラが使えるカシオでもお手上げみたい」

「それで、最後の精霊って一体何の子カラを使うの？」

「雷を、使います」

雷と聞いたら何だかその精霊も気性が荒いのではないだろうかと不安になる。

「まあクート相手じゃあたしの出る幕じゃないわよね」

精霊の名はクートと言っらしい。

確かに電気と水は相性が悪い。メリッサが苦手とする相手だとしても不思議ではない。現にファイもあまりメリッサとは相性がよくないようだから。

「そうなれば、私の、出番、です」

「基本はそうだな。土は電気を吸収して特にダメージを受けないからな」

有利なのは土のチカラを宿すマリアナだ。対抗するなら彼女こそ切り札になり得る存在だ。

「俺も今回はゆっくり休ませてもらうぞ……」

一瞬だけ、瑠衣とファイの目が合う。しかしファイは睨みつける様に目を細めて背中を向けた。

その行為に瑠衣も思わず眉をひそめた。

誰が面倒見てあげてると思ってるのやら。迷惑被ってるこっちの気持ちを少しは分かってもらいたいものだよ

立ち上がった瑠衣はお手洗いに行く部屋を出て行った。

その途端、悠以外が目を闇の中で標的を見つけた猫のように目を光らせた。次の瞬間、皆悠を取り囲み、ニヤニヤしながら問い詰め始めた。

「それで？瑠衣とは上手くいつてるの〜？」

「えっ」

「逃げようとしたって、無駄です！ちゃんと、話して、もらいますよ！」

「あんな子の何処がいいのか興味深いわ」

「あ、あんな子って……」

メリッサを遠慮気味に睨み、悠は顔を赤らめつつ話す。

「今にも心が壊れそうだった僕を助けてくれた存在だから……。彼女の持つ屈託のない心に惹かれた……かな」

「まあまあ」

恋の話となればテンションがこんなに上がるものなのか。それと

も単なるからかいに過ぎないのか。

楽しそうに話を進めていく一行。しかしマリアナが一人その中から離脱した。何処へ行くのかと問おうとしたが、あっという間に壁に吸い込まれて消えてしまった。

なおも話題を振ってくる彼らのペースに乗せられ、悠は身動きが取れなかった。

「ふう……」

軽く伸びをして気分を切り替える。

先程のファイの行動は腹が立つものの、それを何時までも引きずっていてもしょうがない。

自分の部屋に戻ろうとした瑠衣の目の前に突如壁をすり抜けてマリアナが現れた。黄土色の目が潤んでいるように思えるのは気のせいだろうか。

「どうかしたの、マリアナ？」

びくつと肩を震わせ、とうとう我慢ならなくなったのか、顔を俯かせて涙を零し始めた。突然の事で瑠衣はいまいち何が起こったのか把握出来ていなかった。

とりあえず持っていたハンカチを差し出す。受け取ったマリアナは嗚咽を漏らしながらも話し始める。

「私は、もう、耐えられませんが……！心が、潰れて、しまいそうです！」「

「な、何があつたの？」

事の深刻さを察して瑠衣が問う。

「まだ、気付いて、ないので、か？」

「え？」

「どうして、気付いて、あげられないんですか？あんなに、苦しんで、いるのに……」

「……マリアナ、一体何の事を言っているのか私には分からないわ。ファイは病気だからもう三日も看病しているのよ？あんなに苦

しそつにしているのに、それに気付いていない訳が

「心にですよ！」

それを聞いた時、何故か身体が震えた。

この先を聞いてしまえば何かが大きく変わってしまうような、そんな感じがした。思わず耳を手で塞ごうとする。しかしマリアナが両手首を掴んだのでそれは叶わなかった。

「ファイが……、ファイが貴方の事を主としてではなく、恋愛対象としてみている事を！」

珍しく齒切れよいテンポで放たれた言葉に思考が一旦停止した。

どういつ反応を見せればいいのか分からず、ただただ呆然と立ち尽くしていた。

彼女の言う事が本当ならば先程のファイの様子にも説明がつくし、今までの異常な嫉妬も理由がつけられる。

だとしたら、随分前から彼の気持ちを気付かずに踏み躪っていた事になる。おまけに好きな男と両想いでくっ付いたとなれば悔しいに決まってる。目の前で堂々と見せ付けられれば苛立ちも募るだろう。

一番側に居ながら、そんな彼の気持ちをマリアナに言われるまで全然分かっていなかった。

「責めて、ファイの気持ちを、考えた、行動を、とって、下さい！」

久しぶりに怒りを込めた瞳で睨みつけ、マリアナは姿を眩ました。その途端、瑠衣の膝から力が抜けた。

彼はいつだって一生懸命だった。側に居た。言われてみれば、恋愛感情が生まれたっておかしくはない環境だったのだ。しかしその可能性を全否定してきた。彼もきつと悩んだだろう。

どうすればいいのか、分からない……。自分の気持ちが、分からない。

悠の事は好きだ。ファイの事も、大切に想っている。どちらの気持ちの方が強いのか、瑠衣には分からなかった。今まで比べると言

う概念が全くなかったからだ。

ぎゅっと拳を握り締める。長く伸びている爪が皮膚に食い込む。痛みを発していたが、こんな痛み、ファイの受けた心の痛みに比べればどうって事ないだろう。更に力を込めて握ると親指を血が伝った。

どうすればいい？

二人の想いに挟み込まれ、濁流に飲み込まれている。そんな状況の中に瑠衣は陥ったのだった。

そして、運命の神は残酷で。

階段には何とか野次馬をすり抜けて部屋を出てきた悠の姿があった。しっかりとマリアナとの会話を聞いて。

「ふう……」

ため息を一つ着いて、瑠衣はドアを開けた。

「ごめん、ちよつと遅くなっちゃった……」

「あ、瑠衣」

悠と目が合う。が、彼はすぐに目を逸らし、自分の荷物を手に取った。

俯いた状態で視線を合わそうとせずと言った。

「急用を思い出したから、帰るよ」

逃げ出すかのように去ってしまった。

それじゃあと織音も出て行く。マリアナが後ろめたそうに瑠衣を見た。しかしすぐに主人の後を追って去っていった。

瑠衣はぼかんとしたまま何が起こったのか必死で理解しようとした。だが、何が起こったのかさっぱり分からなかった。

「何か……あつたの？」

メリツサに聞いてみる。彼女は腕を組み、ううんと唸った。よく知らないらしい。

まあ本当に急用があっただけかも知れない。でももし避けられたのだとしたら。

「……」

携帯に手をかけて、メールを打とうとした。でも指が動かなかった。聞いて更に不快な思いをさせてしまいそうだったからだ。

無理に理由を問いただして関係を悪化させるよりも、何も聞かずにただ受け入れた方がこの場合は賢い選択だろう。

携帯を閉じて、テーブルの上に置く。

彼が話してくれるまで待とう。

テーブルにうつ伏せになる。少しウトウトして来た。このまま眠ってしまいそうだ。

眠気に打ち勝てずに瞼が閉じていく。意識が深淵の闇へと落ちて行こうとした時だった。

カタンツ

ふいに物音がした。

閉じていた目をパツチリ開け、辺りを見回す。

ベッドで寝ていたはずのファイが起き上がり、ベッドの横に立ち上がっていた。軽く伸びをする後姿が瞳に映る。

慌てて瑠衣は立ち上がった。

「ちよつと……！ファイ！」

「ん？」

ケロツとした返事。少しあどけない瞳。

心臓がキュンつと高鳴った。

しかし今はときめいている場合じゃない。

「まだ安静にしてなきゃダメでしょ！」

「ずっと寝ているとどうも身体のおちこちが疼くんだよ」

確かにちよつと身体を動かすだけでポキポキ音が鳴っている。

自分もあまり病気だからとずっと寝ているのは好きではない。よ

ほど重症でない限りは一日くらいしか安静にしてない事が多い。

まあいいかと瑠衣が思った時、ファイがふらふらと瑠衣にもたれ

かかって来た。肩に頭を預けられる。

「ほら、言わんこつちゃない……」

「瑠衣」

名を呼ばれ、瑠衣はドキリとした。

「今日……誕生日だろ」

「何でファイが知ってるの？」

あたしが教えたんだよと思しながらメリッサは瑠衣の部屋を出た。

「俺は、大丈夫さ。せつかくの誕生日なんだからよ……もつと楽しんでおけよ」

「馬鹿じゃないの!？」

つい瑠衣は声を上げていた。

「隣で苦しい思いしている病人を放っておいて楽しめるとでも思ってる訳！」

「だから、俺は大丈夫だって……」

「どこが大丈夫なのよ！」

ファイの頭を掴み、我が身へと引き寄せる。

「こんなフラフラな身体にくせに！嘘ついている暇があるなら安静にして、さっさと治しなさいよ！」

背中に手が回される。自然に二人は抱き合っていた。

弱々しい彼の背中に切ない想いがふいに込み上げてくる。こうして苦しんでいるのも契約主である自分の不甲斐なさのせいでもあるのに、自分は柵に上げてファイばかりを怒っている。そんな自分は鬼だ。

それなのに、想いを寄せてくれていると言うのだろうか。

「本当に悪い……」

「本当に悪いのはきつと私だから、ごめん」

ファイは彼女の温かさによって随分と気分が楽になっていくのを感じていた。

彼女は本当に不思議だ。優しいチカラを持っている。人の持つ思いのチカラを。

ほんの少しだが、瑠衣の心に近づけたような気がする

今日は年に一度の記念日。瑠衣と言う一人の生命がこの世に誕生した大切な日。

今日だからこそ、言える言葉。

「誕生日、おめでとう。瑠衣」

その言葉が胸にしっとり入ってくる。

こんなにも人からの祝いの言葉が嬉しいなんて、初めて知った。これも、特別な何かがあるからなのだろう。未だ自分ですら気付けていない彼への思いが。

ぼろぼろと自然に涙が零れ落ちた。悠に同じ言葉を言われたとしても、こんな反応をしただろうか。

ファイに涙がかからぬように顔を背けた。

「泣いているのか……？」

肩の震えでそう感じ取ったのだろう。

「ごめん……。今のファイには、水気は、禁物なのにね？でも……

…止まらな」

「好きだけ泣いたらいい」

置いてあったティッシュの箱を差し出すファイ。

「いつもそうやって我慢するからいちいち大変なんだぞ？たまには……思いつきり泣け。少なくとも、俺の前では遠慮するな」

彼の言葉はいつも心に染みてくる。普段はあまり見受けられない内なる優しさがこういう時に出てきてくれる。

沢山助けられているのに、何もお礼すらしていないなんて、無礼にも程がある。

こんなに表立っても裏でも助けてくれているのだ。報酬はあげなければ。

「……ありがとう」

そのまま頬に唇を触れさせた。

すぐさま唇を離してそっぽを向く。そしてチラリと彼の反応を窺う。

目を見開いた彼の顔がどんどん紅潮していった。かと思いきや頬を押さえて凄い勢いで後ずさった。その弾みで壁に後頭部を強く打ち、ゴンツと鈍い音がした。

口をパクパクさせているファイが呼吸困難に陥った鯉のようで思わず嘔き出してしまった。

まさかこんな反応を見せるとは思ってなかった。案外、攻めには弱いタイプなのだろう。

「ほらほら、さつさとベッドに入りなさいな」

悪戯っぽく舌を出した。

相変わらず頬を押さえたままファイは言われるままにベッドに入った。そして深く布団を被った。

今の、夢じゃないよな!?

試しに自分の頬をバチバチ叩いてみる。痛い。確かに夢ではない。突然の出来事にパニックになっていた。

鏡を見たらきつと顔を林檎のように真っ赤にした自分が映っている事だろう。しかし顔の火照りはしばらく治まりそうにない。

こんな事で喜んでいる自分は単なる馬鹿なのかも知れない。

……今更こんな展開になっても

心を落ち着ける。カシオとの約束を思い出したのだ。

でも、まだ可能性が残っているのだとしたら。

今夜はとて眠れそうにない。

chapter 27 病弱な少女

織音は瑠衣の家からの帰り道、マリアナと共に帰路を歩いていた。突然悠がファイの身体に障るという事で解散をしたのだが、何だか様子がおかしかったように思えた。

案の定、先程別れる時に悠は本音を呟いた。

「僕は瑠衣さんの事が好きだけど、好きだけじゃ駄目なのかな…」

それを聞いたマリアナが聞いていたのだと知り、事情を織音に洗いざらい吐いたのだ。

ファイが瑠衣の事を主としてではなく恋愛対象としてみている事も。

「まあ私は最初からそんな感じがしてたんだけどね」

「知ってたん、ですか!？」

「知ってたと言うより、行動ですぐ分かつちゃうんだもん。あの

二人 瑠衣と言いついファイ君と言いついすぐ行動に出るから」

「……そう、ですね」

余計な事になってしまったとマリアナは後悔した。

「どのみち答えは出さなければならぬでしょ。どちらを選ぶのか。私には手に取るように何となく分かるような気がする……」

常に側に居て、彼女を護るファイ。純粹に想ってくれる悠。

どちらも大切な存在になっているだろうが、選ぶとしたら。

頭の中でごちゃごちゃ考えていると、前から一人の少女が歩いてくるのが目に見えた。

その少女は自分とそう変わらない年齢のようだったが、格好が少し変だった。カーディガンを羽織っているものの、下から覗いているのは赤いチエックの上下。どう見てもパジャマだ。サンダルを履いているが、同じ年頃の子が履くとは思えないダサイ茶色の物だった。

訝しげに見ているとその少女と視線が合った。

と、次の瞬間突然大声が響いた。

「居ました！」

バツと少女が振り向くと看護師ら数名がこちらへと走ってきていた。

その少女は織音の方に駆け寄ると、肩を持ち盾の様に構えた。

「サラ・リンドウ！病院へ戻りますよ！」

少女も負けじと声を張り上げた。

「NO！」

発音の良さからして、彼女は英語が母国語らしい。

なおも長々と喋る少女だが、英語の成績はいまいち悪い織音には意味がさっぱり分からない。

あげくの果てには看護師達も同じようにして喋り出す。周りで宇宙の交信でも行っているようで顔がひきつる。

とうとう少女は看護師達に捕まり、しょぼしょぼと元来た道を歩き出した。

「すみません、巻き込んでしまって……」

「い、いえ。あの、彼女は病院を抜け出してきたんですか？」

「ええ、最近になって無断外出が多くて。毎日のように駆け巡らなければならぬので大変ですよ」

ペコリと頭を下げた帰って行った看護師の背中を織音は見送った。そして再び歩き出す。

と、マリアナがついて来ないので立ち止まって振り返る。

「……」

「どうかしたの？」

「明日、皆に、報告、しなければ、なりませんね……」

それ以上詳しく語ろうとはしなかった。

次の日。今日は廃墟ビルの地下　メリッサ達のアジトとなっていた場所に集合していた。今回は蓮斗も一緒だ。メリッサに家を教えてもらうと、実は瑠衣の家のすぐ裏の隣に住んでいた事が判明した。

「わざわざ別の場所に招き入れていたのはそのためよ。近所に住んでいる事が知れたら隙がなくなるからって蓮斗が」

「それくらいの頭はあるんだけどネ」

そんな事を聞かされると背筋がゾツとした。

それでもって、集合をかけたのは意外にも織音　マリアナだった。

「早急に、もう一人の、精霊を、探さなければ、ならない、事態になりました」

「？別に焦らなくても向こうから来てくれるんじゃない？」

「そうじゃない、のです！」

「さつさと話してくれ」

病み上がりであまり体調が優れないファイが急かした。今日も休んでおいた方がいいと言ったのだが、言う事を聞かなかった。ある種腹いせじゃないかと瑠衣は渋々連れて来たのだが。

「契約による、代償で、人間は、もう、あまり、時間が、残されて、いないんです！」

「何でそんな事が分かったんだい？接触でもした力？」

「そうですね、たぶんあの子が、恐らく……」

「あの子って、あの病院脱走して来た子の事！？」

織音も詳しい内容を知らされていなかったらしい。信じられないと素っ頓狂な声を上げた。

「僅かですけど、最後の、精霊　クートの、気配が、感じられました」

「知ってしまった以上、見殺しには出来ないだろ」

「普通の人間ならば代償として払う体力はそれほど障害とならない。でもそれが病人ならば話は別だ。病気の重さにもよるが、それ

ほど耐えてはられないだろう」

蓮斗が俯いた。メリッサも伏目がちになる。自分達の犯した罪を思い出しているのだろう。

全員の思いは一緒だ。誰一人命を落として欲しくない。他人を傷つけようとした日々もあった。けど、ただ傷つけるだけでは何も得る事など出来ないところに居る皆は知った。だからこそ、その契約主も救いたい。

「奴が無理をしないうちに探し出さないと。雷は一番チカラを使う属性だ」

「契約主との接触も凶る？」

「確かに、会った方がいいかも知れないね」

昨日から悠は瑠衣と少し距離を置いていた。

会話をしようとして瑠衣は口を開こうとしたが、何も話す言葉がなかった。それに今また仲良く喋るとファイが……。

結局声をかけられずに蓮斗の方が新しく話を切り出す。

「んで、その契約主の事は何か分かってるんだろうネ？」

「えっと……珍しい髪と目の色してたから、外国人だと思う。名

前は、確か……サラ・リンドウ」

「あ」

蓮斗が声を出した。

「そいつ、確か兄貴の働いている病院で見た事があるヨ。明日にでもちよっくら会いに行きますカ」

「へえ、蓮斗って兄さんが居るんだ。ちよつと意外かも」

その二人だけは周りの少し異常な空気とはかけ離れていた。

「う、うっ……」

静寂の中で聞こえる呻き声。

呼吸を荒げているのは一人の少女。額にはびっしりと汗が浮かんでいる。

そんな彼女の手を握っている者が居た。

看護士が額に濡れタオルをかける。彼の存在には全く気付かずに部屋を出て行く。

それを確認して精霊コートは立ち上がった。

契約主である彼女　いや、愛する少女のために、自分は成すべき事をしなければならぬ。

外では雨雲が少しずつ発達していた。やがて雨が降り出し、時折雷が落ち始めた。

そんな天気の中、コートは窓ガラスをすり抜けて外へとくりだして行った。

chapter 28 願いのためなら

その日の帰り道だった。

それぞれが散り散りに別れ、同方向である瑠衣と蓮斗が共に歩いていた。結局悠とは何も話せずじまいだった。

チラリと後ろを見れば、ファイがむすっとした表情でこちらを見ていた。メリッサも浮かない様子だった。

「蓮斗」

「？」

ふいにメリッサが蓮斗を呼び止めた。

何をするのかと思えば突然メリッサは駆け寄り、蓮斗を抱き寄せた。

瑠衣とファイは思わず顔を赤らめてしまった。当の本人はと言うと最初は驚いていたものの、すぐに平静さを取り戻す。

「あたしは蓮斗の事、契約主以上だと想ってるからね！浮気も厳禁よ！」

「メリッサ、そんな事を言いたかったのかい？」

「そういう事で、手だしたりしないですよ！」

「何で私にそんな事言うのよ！」

「だって悠とギクシャクしてるから乗り換えたりするのもアリかなって思ったからよ！」

凶星を言われ、うつつと瑠衣は呻いた。

勝ち誇ったような笑みを浮かべたメリッサに、蓮斗が慣れた様にキスをする。

この人、やっぱり軽そう……。言っちゃ悪いけど、タイプじゃない

苦笑してファイを見た。

二人の様子を真剣な眼差しで見つめる彼に思わず叩く。

「何すんだよ！」

「人のそう言う所を真剣に見てるんじゃないの！」
いつもの喧嘩だ。

互いに顔を見合わせ、ふふっと笑った。こんな喧嘩、日常茶飯事だったのに何時からしなくなっただらう？

逃げ出したくなるような重いわだかまりが嘘のように弾け飛んだ。はっと気付けば蓮斗とメリッサがニヤニヤと笑みを浮かべていた。まさかこの二人、謀ったのか。喧嘩だらうが何だらうがこの重々しい空気を晴らすために。

おかげで気分が随分楽になった。ファイの方も少しは吹っ切れたようだ。

そして前方を向いた。

「えっ……？」

自分の家の前に人影がある。

「どうした？」

「あの子、誰？」
指を指す。

闇を纏ったような真つ黒の少し幼い少女が居た。

その少女が口の端を引き上げ、不気味に笑った。

「頂戴……？」

こちらへと向かってくる。

「大事なモノ……頂戴！」

眩い光が発せられるのと同時に身体を電気が走った。

「きゃああ！」

全員が突然の攻撃を避けきれず、まともにくらってしまった。

瑠衣は雷の時は足を揃えて立っておけば感電する事はないと言う
祖父母からの入れ知恵を思い出してそのように実行した。嘘のよう
に身体を流れていた電気が止まる。

背後でドサリと言う音がした。

「メリッサ！」

蓮斗が駆け寄る。ファイも多少のダメージをくらっているものの、

まだ戦える状態だ。

「電気を当てられてしまった以上、メリッサはもう動けないぜ」
「え？」

「水は電気をよく通すからな。漏電の仕組みみたいな感じでな」
つまり、メリッサにとって電気は致命傷を負わせるモノであると言える。

そこまでダメージを受けているなら太刀打ち出来るはずがない。案の定、メリッサは意識を失ったまま目を開けようとはしない。さっさとこの場を片付けて彼女の治療をしなければ。

「ファイ」

「分かってるさ！」

地面を蹴り、ファイが少女に急接近する。

彼女は再び雷光を繰り出す。それを擦れ擦れでかわしながらファイは進む。

「くらえ！」

炎の球を少女目掛けて投げつける。

逃げようとした少女だったが、球の速度に叶うはずもなく。

背中から命中し、燃え上がった。

「ぎゃあああああああああ！」

少女の身体が溶けていく。パチパチと僅かな火花を散らしながら少女は欠片一つ残さず消滅した。

焦げ跡を靴で踏みしめ、ファイが虚空を睨む。

「やってくれるぜ、クート……！」

と、突然立ちくらみが出た。そのまま身体を支えていた力がごっそり抜けた。

まだ調子が万全でないのにチカラを使いすぎたか……。

ぼふっ

柔らかい衝撃。

「ちよつとファイ、大丈夫？」

心配そうに翡翠の瞳が覗く。

胸の奥が鷲掴みされたように苦しい感覚。こんな表情、見せたくないのに。

しかし身体が動こうとする元気は残っていないようだ。

「悪い、動けそうにねえ……」

本当に情けない。

何をこんなに弱気になっているのだろうか。自分らしくない。

瑠衣がよろけながらもファイの肩を担いで、歩き出す。

もつどつちが盾となり、支えとなっているのか分からない。

それでいいのですよ

忘れられるはずのない声があったように感じた。とうとう幻聴まで聞こえる様になってきたのか。相当まいっているようだ。

ファイは自嘲の笑みを浮かべた。

「……いくら弱っているとは言えど、そう簡単には参ってくれないと言う事が」

灰色の雲の上でクートは呟いた。

今度は誰を狙うか。カシオも精神力がかなりある。小手先の技ではダメージを与えられない。

マリアナは精神力こそ低めだが、雷属性を受け付けられないチカラの属性の土だ。狙うには不向きだと言える。

「……待てよ」

名案が浮かんだ。

「あいつ等は出来るだけ近くに居るようにしているが、それぞれの生活がある以上隙は出来る」

雲の一部が盛り上がり、人型となる。

新たな使者はその手に溢れる破壊のチカラに狂喜した。

思わずクートも笑みを浮かべる。

雲の切れ間から下界を見る。斜め下には見慣れた病棟の姿。そして窓側で眠る契約主。

その刹那、クートは瞬間移動して契約主の眠る病室へと転移した。

白い肌が病気の進行を物語っているようだ。女の子のチャームポイントの一つである頬の赤みはほとんど見受けられない。瞼も少し腫れているように思える。

そっと指どおりのいい髪に触れる。

「沙羅、オレは絶対にこの争いを制してキミを……」

その愛しさに、クートは想いを寄せた。

何としても願いを叶える。

彼女と、これから共に今を生きていける道を繋げるために。

「襲われた!？」

「う、うん……」

「怪我は？大丈夫だった？」

「それは全然大丈夫だったよ。ただ、メリッサが少し回復するまで時間がかかりそうで……」

またメリッサの治療法が大量の水風呂に浸しておかなければならないという事なので、小さなバスタブを悠の家で借りようとやって来たのだ。

今はそのバスタブの中でメリッサは治療中だ。意識が戻るまで少なくとも、三日はかかるらしい。

一方ファイの方は一日寝たらもう大丈夫のようだ。

それよりも気になるのが襲われた事を話した時の悠の態度だった。まるで自分を責めている様な感じだった。

「悠君の方は大丈夫なの？私はマリアナが結構用心深くしてくれているから大丈夫だとは思うけど」

「カシオの探知能力も優れたものだから、来ればすぐに分かるよ」

「どうしてこんな便利な才能がないのかしら、うちの精霊には」

「お前喧嘩売ってるのか!？誰のお陰で今まで生きてこられていると思っただよ!」

ぎゃいぎゃい言い争いが始まる。

その様子を見ていた織音は頬杖をしながらぼそりと呟く。

「嫌い嫌いも好きのうちって言うか……」

「微笑ましいですね」

ほわわんと和みムードをかもし出しているマリアナに瑠衣とファイは同時に怒鳴った。

「そこ！呑気に見物してない!」

「ひいひい!？」

マリアナを挟んだ言い争いに発展し、オロオロしつつも止められないマリアナ。

とうとう堪え切れずに織音が嘖き出した。

「ちょっと！何で笑ってるのよ織音！」

「だって……見てたら面白いんだもん」

「こっちは本気で言い合ってるの！笑わないでよ！」

悠と目が合い、瑠衣の勢いが弱まる。

大チャンスと言わんばかりにファイが押し迫る。

その勢いで瑠衣は押し倒される。その上にファイが馬乗り状態になる。

顔が凄く至近距離にあつて、ついドキツとしてしまった。

「あ、悪い……」

バツの悪そうにファイが退く。

乱れた髪を手ぐしで整え、悠の反応を窺う。彼はしばし考え込んだ後、こう言った。

「そう言えば、カシオが君を呼んで来いって言ってたっけ」

「言われてみれば、カシオの姿が見当たらないよね」

「分かった」

悠に案内され、ファイが部屋を出て行く。

彼はしばらく廊下を歩いた後、立ち止まった。そして振り返る。

ファイには分かっていた。カシオが呼び出したのではない。少なくとも、彼の気配はこの家から感じ取れない。何処か外出しているのだらう。

用があつたのは目の前に立つ彼の方だ。

「それで、話って何だ？」

見え透いては居るが、一応聞く。

「僕は、瑠衣さん……瑠衣が、好きだ」

いきなりそんな事をこちらに告白されてもファイは心の中で苦笑した。

「君も、瑠衣が好きなんだよね」

これは嘘をついてもバレバレだろう。素直にファイは頷いた。カシオが知ったらきつと怒るだろう。何せ主人の幸せを何よりも優先するものだから。

しかし、それだけで本当に幸せになれるものだろうか？ 真実を知ったとき、罪悪感に苛まれるだろう。まだ正々堂々と勝負したならそうは思わないだろうが。

それに悠自身自分の気持ちを悟っていたようだし。

「僕は……」

宣戦布告される事を覚悟した。

だがその先に続いた言葉はファイの予想とは真逆だった。

「瑠衣の事が好きだけど、彼女を幸せには出来ないと思う」
男としては情けない事を言ったものだ。

「僕は何も出来ない。何もしてあげられない」

「何も出来ない訳じゃないだろ」

「いや、何かしてあげられたとしても、彼女の心は既に何処にもないんだよ」

真つ直ぐな目で見られ、ごくつと唾を飲む。

「彼女の心は、確実に君の方へと向いている」

「……悪いが、それは誤解だと思うが。最近お前とまともに話せないからって落ち込んでたし」

「それは彼女の優しい心。恋心とは違う。そう確信出来た」

「本当にそれでいいのか？ 後悔、しないのか？」

「例えば僕がこのままずっと一緒に居てもいずれば彼女も自分の本当の気持ちに気付く。そうなれば、一番苦しむのは、彼女自身だから……」

本当に想っているが故の決断と言う事だ。

彼自身が身を引くと言っているのだから、わざわざくっ付けようとしなくてもいいか……。そう思い、ファイはそれ以上の説得をしようとはしなかった。

と、悠は突如拳で軽くファイの額をコツンと叩いた。

「頼んだよ、炎の王子様」

「その言い方、気持ち悪いからやめてくれ……。それと、頼まれなくても瑠衣は俺がちゃんと護つて見せるさ！」

男同士の話が決着を迎えた頃。

部屋に置き去りにされた瑠衣・織音・マリアナは退屈そうにそれぞれ時間を持て余していた。

その中でも瑠衣は少し落ち着かない様子だった。それも無理はない。またファイの方が何か余計な事を言っていないか心配だからだ。

「!？」

突如マリアナが身体を震わせた。

「どうしたの？マリアナ」

異変にいち早く気付いた織音が駆け寄ろうとした時だった。

「駄目です！」

マリアナが織音を弾き飛ばし、自分も飛ぶ。

次の瞬間、強烈な光が発せられ、焦げた臭いが鼻をつついた。光が止んでから見てみれば、マリアナの立っていた場所が焦げていた。炎による焦げではなく、落雷によるものだ。

最後の精霊が仕掛けてきたのだ。でも何故わざわざマリアナを相手に選んだのだろうか。相性が悪い属性であるマリアナがついている時を狙うなんて無謀にも程がある。何を考えているのか。

「オレは願いのためにお前達を倒す　!」

轟いた声。しかし姿は何処にも見えない。

マリアナですら何処に居るのか把握し切れて居ないようだ。

と、背後から衝撃が走った。

「きゃあああ！」

「マリアナ！」

床を転がるマリアナ。駆け寄り、織音が抱きかかえる。

その前に影が立ちはだかった。感情の見えない薄い緑の目がただただ二人を見下ろしていた。毛先が少し内側に丸まった橙の髪をした少年の姿をしていた。

頭の中に巡っていた疑問を読み取ったのか、精霊コートはその答えを口にした。

「確かにオレは土に弱いからマリアナにも弱い。でもマリアナよりも超越している要素がない訳じゃない！」
マリアナが土の針を突き立てる。しかし呆気なくかわされていく。たとえ弱点にあたる属性のチカラを持っていたとしても、攻撃を当てられなければ意味が無い。彼が超越している要素、それは身体能力であり戦闘能力だ。

悪い予感が瑠衣の全身を走った。

早く、早く戻ってきて……ファイ。じゃないと……！

chapter 30 壊れたモノ

「！」

巨大なチカラを感じ取り、ファイが反応した。

この感じは、クートだ！奴が、とうとう現れた！

「悠！奴が来た！」

「何だって！？」

次の瞬間、ゴウウツと地響きするような音がした。物質が焦げた臭いがする。

音のした場所は恐らく瑠衣達が居た部屋だ。しかしあの部屋にはマリアナが居る。

「マリアナがついているが、加勢しに行くぜ！」

「カシオ！」

契約主の呼び声で風のレポートを使い、カシオが姿を現した。

「まさか奴が仕掛けてくるとはな……。少しは度胸がついたか」

「感心している場合じゃねえだろ！」

律儀にツツコミを入れてから廊下を走り出すファイ。それにカシオと悠が続く。

一応走ってはいるものの、マリアナがついている以上それほど危険だと言う認識はなかった。心にはゆとりがあった。

だが。

『……………く、早……………て、ファイ』

！？

空耳かと最初は思った。だが、確かに瑠衣の声が聞こえていた。

いや、耳ではなく頭に直接流れてきたという方が適切かも知れない。彼女が訴えている。早く来いと。

『じゃないと……………ナが』

マリアナが……………危険なのか？

答えはない。

「マリアナ！」

織音と瑠衣の音が耳に届いた。部屋に雪崩のように入った。そして目の前にある光景に自分の目を疑った。

マリアナが倒れていた。冷酷と言える感情の見えない目をしたクートが彼女の襟首を掴み、無理やり立ち上がらせる。

攻撃を仕掛けようとしたカシオの前にマリアナが突き出される。咄嗟に後ろへと飛ぶ。

「仲間同士だから攻撃出来ないだろう？」

「くっ……！」

「誰だか知らないけど、核^{コア}を取り出さずに集めているらしいな。でも、そんな甘っちょろい考えじゃ願っても叶えがいかない」

よもや抵抗する力も残っていないマリアナの胸に手を突っ込む。

「悪いけど、君の核^{コア}は頂いていくよ！」

「あ！」

全員が何も考えずに前へ駆ける。必死で阻止しようとして手を伸ばす。それは一瞬の出来事だっただろう。だが皆にはとてもスローモーションに思えるような時間だった。

クートの左手が引き抜かれた。しっかりと握られていたのは白い輝きを放つ核^{コア}そのものだった。

核^{コア}を抜かれてしまったマリアナは床に倒れ、薄目を開いたまま動かなかった。

もはや抜け殻と化してしまったマリアナの身体に織音は恐る恐る触れてみる。すると、たちまちマリアナの身体は弾けて消えた。

「それじゃあ今度はメリッサから頂こうかな？彼女なら楽勝だしね」

「貴様っ！」

風の刃が舞う。それと同時に炎も混じって飛ぶ。

「やっぱり結束されるときついものがあるな……」

そう呟いたかと思うと、クートは窓ガラスをすり抜けて外へと出た。後を追ってファイとカシオも外へと出る。

「今日はこちらまでにするよ。俺は、負けない。マリアナの核と融
合したらまた来るさ」

「待て……！」

眩い光を発して瞬時にコートは姿を消した。

気配も完全に消失していた。雲隠れのように姿を消すのだけは上
手い。なかなか彼本体を誘き出すのは大変そうだった。

気を取り直して家の中へ戻ろうとしたその時だった。

パキンッ……

ガラスが割れるような音が大きく響いた。

続いて鈍い音。何かが倒れたような音。

「ちよつと！しつかりして！織音え！」

中に入ると意識を失っている織音を抱えてほぼパニック状態に陥
っている瑠衣の姿があった。後ろでは悠がオロオロしている。

すぐさま瑠衣の隣に屈み、彼女の背中をさする。

「気を失ってるだけだ……。落ち着け」

しゃくり上げ、瑠衣はぐつと唇を噛み締めて溢れる感情を制した。

ファイが側に居るのだと思うと安心感が胸に広がる。そのおかげ
で平静を取り戻す事が出来た。

カシオが悠を見ていた。悠は何が言いたいのかを察した後、首を
左右に振った。

「それで、さっきの音は何なの？あの音の直後に織音が突然倒れ
て……」

「それはな」

「契約の解除」

きつぱりとカシオが告げる。

「契約の解除は精霊が消滅、すなわち核を奪われた時と契約主の
死によって成される。今の場合はマリアナが消滅してしまった事に
よって自動的に契約が解除された」

「そのせいで気を失うの？」

「ファイ、言っていないのか？」

横目でファイを見る。ファイが神妙に告げる。

「契約の解除が成される時、契約主となっていた人間は精霊に関する記憶をすべて失う」

「あつ……」

思い出した。マリアナが前の契約者と契約を破棄した時に言っていた事を。

視線を織音に下ろす。

あの瞬間、マリアナと共に居た いや、ファイが学校へと転校生としてやって来た日以降の記憶が消えてしまった。そういう事になる。

「んっ……」

「織音！」

ゆっくり開かれた目が瑠衣を捉える。

突如目を見開いたかと思えば織音は勢い良く起き上がった。

辺りを見回し、織音が瑠衣に問う。

「ここは、何処？」

この台詞で先程の話が事実である事を認識させられた。

何と答えればいいのか分からず、瑠衣は沈黙する。

更に彼女は悠を見てこんな反応をした。

「この人、王子様っぽいね！もしかして……瑠衣の彼氏？」

「そんなんじゃないよ」

にこりと悠が否定した。瑠衣がえっと思わず短い声を上げた。

紳士らしく織音をエスコートして玄関へと送る悠の姿に瑠衣は呆

然としていた。

。確かにお互い思いあっていた。あっていたはずなのに、どうして

一体何がこうもこじれさせてしまったのだろう。

瑠衣は今日、大切な何かを失ってしまった。

決して取り戻せない、とても大切だったモノを……。

chapter 31 今は前へ

いつもの学校。いつもの授業。

このいつもが一瞬にして碎けてしまうなんて、思ってもなかった。いや、あの結末こそが本来この戦いには必然的なものなのだろう。臆病で、ビクビクしていたけど、その微笑みは周りの空気を和ませていたマリアナ。彼女の姿はもう何処にも見受ける事は出来ない。そして精霊に関する全ての記憶を失った織音は普通の女の子として生活している。

彼女を関わらせるのは危険だろう

ファイとの相談で、この精霊達の戦いが終息するまで織音と関わるのは自粛する事にした。

もはや精霊も居ない、記憶すらもたない彼女を巻き込むのはあまりにも危険すぎる。なら、もう一切関わらせない方がいいと判断したのだ。

仲の良さは持続しつつも、瑠衣は出来るだけ距離を置くように心がけていた。

学校の帰り道。

前ならば織音とマリアナと女同士の話で盛り上がっていた。

でも今は、ファイと二人きり。しかもファイは何だかソワソワして落ち着きがない。

静寂だけが流れている。

話題はないかと必死で頭の中を探り、ようやく話題を出す。

「今日は両親は残業で、おばあちゃんは老婦の会の会合だから、夕食は二人だよ」

「あ、そう」

「ファイの好きなメニュー、作ってあげてもいいわよ?」

「やった!それじゃあ俺、ハンバーグがいい!」

小学生のような発言に、思わず瑠衣は笑う。

こんな風に喋っている方が嫌な事とか、悩み事とか忘れられてい
い。

家の前までやって来ると、門の前に見慣れた人物が立っていた。

「蓮斗？」

名を呼ぶと彼はこちらを見て駆けてきた。

「メリツサなら悠の家だよ？」

「それはカシオから聞いてるヨ。それよりもクート？の契約主と
思われる子と、面会出来るチャンスがあるんだ！」

「本当！？」

「明日、病院内でイベントがあつて、外部の人間も気軽に行ける
んだヨ！その子はまだ自分で移動したり出来るから、きっと病院内
で会える筈。一応兄貴に許可は貰ったんでネ」

「やるじゃん！じゃあ悠にも連絡しておくね！」

「それじゃあ明日、放課後に森川総合病院前に集合ダ！」

「分かったわ」

蓮斗が帰って行き、瑠衣とファイも自分達の家に入った。

着替えて瑠衣は携帯を片手にキッチンへ向かった。

調理に入る前に連絡を入れておかないと。そう思ったが、指が動
かなかつた。普通に連絡を入れればいいのに、文面を打ち込む事が
出来ない。

いつしか傷つけていたのだろうか。想いが碎かれるような決定的
な出来事があったのだろうか。

それとも、最初からそんな気持ちなど持って居なかったのだろう
か。

叶うものならば、戻りたい。確かに想いあっていたつい最近へ。

マリアナや織音が元のままの時間へ。

「戻りたいのか」

気付けばファイが背後に立っていた。

「後悔すれば、確かに戻りたいと思うものだけど、時は戻らない。

前に進むしかないんだ」

「……」

「過ぎた事をきちんと受け止めるよ」

「受け、止める」

ファイの言葉で気が付いた。

自分は現実から逃げ出す事を望んでしまっていたのだ。

逃げて何も覆りはしない。過去は、どうあがいても変えられない。

ならばそれをしっかりと受け止めて、前へと進まなければ。

動かなかった指が文を綴り出す。数分で打ち終わり、戸惑う事なく送信ボタンを押した。

モヤモヤとしていた気分がスッキリした。

「ありがとう、ファイ」

「別に礼を言われるほどの事じゃねえし」

「いつもファイには助けられてばかりだね。私は何もしてあげられなくて……」

「ちゃんと貰ってるさ」

「へ？」

コツンとファイが瑠衣の額を突いた。

「お前はただここに居ればいいの！」

「……私だって頑張るもん！」

荷物だなんて思われたくない。

自分出来る事をしていきたい。目の前に居る、自分を支えてくれる人に。人達に。

今日の夕食はかなり豪華になりそうだと張り切る瑠衣を見てファイは思った。

本当は前に進めていないのは自分の方なのだと思う。

未だに記憶に縛られている自分が居る。

そう、あれは前々回のこの戦いが終わりそうな時だった。

既にカシオの核を掌中に入れていたファイは樹の精霊と出くわす。

炎に弱い樹のチカラなど足元にも及ばないと高をくくって戦った。だが、彼女はチカラの強さだけが勝敗を導くのではないと言った。彼女の出すチカラの技はどれも棘があっても心の優しさを持っていた。

彼女は争うのが嫌いだとファイをそのまま仲間とした。

次々とマリアナ、クート、メリッサが付き従う事になり、全ての核コアが揃った。

そのまま天帝の下へと訪れた一向だったが。

「これはどういう事だ、リンゼ」

「この通り、精霊の姿形のまま核コアを持ち帰ったと言う事です」

「君は何も分かかっていないのだね」

玉座から立ち上がった天帝は樹の精霊リンゼを睨んで言葉を続けた。

「戦い、傷つけあうからこそ願いは叶える価値があるのだ。それでは願いは叶えられぬ。今すぐ核コアを取り出すのだ！」

「……出来ません」

「何……だと！許さぬ！お前など、消え失せるがいい！」

「やめてくれええ！」

天帝の怒りに触れた彼女は消え失せた。

それでも何処かで会えるのではないかと、戦いの度に捜し求めていた。

しかし、いい加減自分も受け止めなければならぬのだろう。彼女は消滅した。何処にも居ないのだと。

彼女に付き従った日々は戦いを重ねつつも、幸せだった。世界の素晴らしさ、人間の素晴らしさ、全て教えてくれたのは彼女だった。自分の中の彼女の存在は大きい。

「ファイ？」

はっと顔を上げると瑠衣がこちらを見ていた。よほど思い詰めていた顔をしていたのだろうか。

手を振り、へらへらと笑って誤魔化す。

今は前へ。目前にある事を考えよう。

明日はクートの契約主と思われる少女と接触するのだ。彼が何か
罦を仕掛けていると考えるのが妥当だろう。

瑠衣だけは、護り切って見せる。そう硬く誓う。

chapter 32 時間制限

次の日の放課後。

織音を何とかかわして森川総合病院前へとやって来た。この病院はこの町では一番大きな病院で、重宝される施設の一つだ。数年前に一度建物を建て替えているので、外見はまだまだ綺麗だ。

玄関入り口の前には既に蓮斗と悠の姿があった。

「待った？」

「ううん、そんなには」

「それでは早速行きます力」

「あ、そうだった」

悠が白い封筒を瑠衣に差し出した。

「僕の父様から。中身は見えないけど」

その場で開封する。

中の便箋にはボールペンで綺麗な文字が並んでいた。

「瑠衣さんへ」

突然の手紙で申し訳ないと思っている。だが、どうしても知ってほしい事があるので、筆を取った次第だ。

五年前、君の御祖父さんから君の出生にまつわる話を聞いた。

たぶん君は知らないだろう。

君が生まれて数週間後、病院から帰ろうと道を歩いていた時、突如空から一筋の光が落ちてきて君の身体に吸い込まれていったそう。その現

象を目撃したのは御祖父さんだけだったそうだが。

本に眠っていた精霊を目覚めさせ、天帝と話をしてみると、凄
い事が分かってしまっただけ……。』

その先に書かれていた事に瑠衣は目を疑った。

『その光は精霊の魂であろうと。その魂は身体に取り込まれてしまったのだらうと。』

つまり、君には精霊の魂が取り込まれているんだ。

ちなみに呼び出した精霊はファイ君だ。でも、天帝は話の内容の記憶は抹消してしまったようだ。

その話をした後、天帝は君を差し出せと要求した。しかし御祖父さんはこれを断固として拒否した。そのせいで呪いをかけられてしまった……。

精霊と関わっていれればいずれ天帝と会う時が来るだろう。その時、君が危険にさらされるのは明白だ。

悪い事は言わない。今ならまだ間に合うから、精霊達に関わる事をやめなさい。普通の人間として、生きる道を選んで欲しい。それが御祖父

さんの願いだっただから。」

思わずその場にしゃがみ込んでしまいそうだった。

あふれ出しそうになる思いを必死で噛み締める。

「何が書いてあった？」

悠の問いかけに瑠衣は自分でも強張っているとは分かるほど頼り無い笑みを浮かべて答えた。

「ううん、別に。ただ、私のおじいちゃんへのメッセージみたいで、これを墓前につて」

咄嗟にここまで嘘を付ける自分はどんなのやら。

その理由に一応納得して先に歩き出す悠。

知られてはいけない。誰一人、身内でも。

二人の後について行きながら瑠衣は思い返す。確かに自分と良く似た存在を感じた事はあった。そして、何故だかカンでメリッサのアジトもズバリと当ててしまった事もあった。それらの不思議な現象にもこれで説明がつく。

しかし何だかそれだけじゃない恐れも湧き起こっていた。

かつての精霊で、女性と言ったら……。

きつと、あの人は……ファイの想い人である樹の精霊なのだわ。それが、私の中に

と、考えすぎて、立ち止まっていた悠の背中に激突した。

「ちよつと、大丈夫？」

「ああ、平気平気！ちよつと考え事してただけ」

「それってさっきの手紙の事で？」

「一応病人の前だから、静かにしろヨ」

蓮斗の忠告で何とか追求を避けられそうだ。

二回ノックして、返事があつたのをきっかけに扉が開かれる。

とても病院とは思えない華やかな飾り。全部ドライフラワーで作られているようだ。一人の看護師がそれをせっせと壁に貼り付けている。その傍らにはベッドに座る一人の少女。

マリアナと同じ黄土色の瞳がこちらを見据えた。

「Who are you？」

「ああ、彼女の友達の代わりで来たんですよ」

「まあそうですか。ごゆっくり」

英語で彼女に何か話した後、いそいそと看護師は部屋を出た。それを頃合いにカシオ・ファイが姿を現す。

「Oh！」

「俺たちは普通に解釈できるけど、和訳出来るようにしましょう」

「そうしてくれると有難いよ、カシオ」

そう言つてカシオは空気に魔法をかける。

彼女の放たれた言葉が普段の日本語になっていた。

「あなた達も精霊の持ち主なのね」

「そうです」

「……私を殺しにきたの？」

恐怖に満ちた表情ではなかった。生への執着心がまるでなかった。溜衣はふるふると首を横に振つた。

本当は傷つけないくらいだった。でも、この様子ではクートのした事は彼女の命令ではないようだ。

ふつと軽く息を着いて、彼女は言う。

「まあ、私もそれほど長くはないんだけどもね」

「？」

「私、もう一ヶ月もつかどうかって所なのよ。だから、今死んでも変わらないわ。明日も明後日も、いつ死んでもおかしくない身なんだから」

彼女は諦めているのだ。どうあがこうとも、迫り来る死からは逃れられないと。

クートは願いのためなら……と言っていた。彼がどうしても叶えたい願いが何となく分かってきた。

「精霊がチカラを使うと主の体力を消耗するのは知っているな？」
「勿論よ」

「そのせいで寿命が縮んだんじゃないのか？」

「知らないわ。そんな事、興味ないもの。彼は、今まで話し相手の居なかつた私に楽しみを与えてくれた。その楽しみなくしてここまで生きえなかつたと思うわ。だから、いいの」

自らの命を削つても彼女は欲しかったのだ。心を許せる存在が。とても契約を解除しろとは言えそうにない。

「いずれ私は近いうちに死ぬわ」

「それはどうなるか分かりませんヨ？」

蓮斗が以前瑠衣に見せたピエロを思わせる笑みを浮かべた。

「運命の神様は気まぐれですからネ。死にたいと思っっている人が生き、死にたくない人が死んだりするものですカラ」

「……」

「今日はこれで失礼します。でも、次は」

「次なんてもうない。さようなら、皆さん」

振り払うように別れを告げる彼女。

何を言っても無駄だと判断した者から順に病室を出て行く。最後に瑠衣だけが残った。

まだ居たのかと言わんばかりに彼女の目が細められた。

「また会えるよ」

びっくりしたように彼女は目を丸くした。

「see you again」

それを言い残して瑠衣も病室を後にした。

カシオの魔法が切れる直前に、日本語で彼女は言った。

「タイムリミット時間制限目前にして、何を……」

時間の残されていないこんな時に限って、迷いは生じるものだ。

chapter 33 リンゼ

世界は暗闇へと閉ざされていた。
側ですうつすと寝息を立てて眠る精霊が居る。瑠衣は未だ眠りに着けずに居た。

時刻は既に真夜中と言える位だろう。
何故だか眠るのが怖かった。

これも全部知ってしまったからだろうか。あの手紙によって、全てを。

自分の中に存在する精霊 恐らくファイの愛していたと思われ
るリンゼが居る。今まで彼女の存在を知らなかった。だから、特に
不安を感じる事もなかった。

でも、知ってしまったから恐れを抱くようになってしまった。いつか、ファイが知ってしまった、彼女が自分の身体を乗っ取ってしまったのではないかと思うと、眠れそうになかった。

そっとベッドから這い出て、月が明るい窓辺に立つ。

照らし出された瑠衣の影がぐにやりと揺れた。

「!?!」

悲鳴を押し殺した。何かとファイが起きてしまったては困る。

影が一人の少女を形作る。いつか、夢で出会った少女。

『こんにちは……それとも、こんばんわかしら?』

「え、はあ……」

普通に挨拶され、反応に戸惑う瑠衣。

『ファイは今、寝ているのよね』

「ええ、ぐっすり」

不思議と敬語になってしまう。尊い存在と思えるオーラが漂っているからだろう。美しきモノであるからこそ、尊さを感じさせるのだ。

彼女はそっとファイの側に近寄ると、一つの花を掌に生み出し、

傍らに置いた。

悲しげな表情を見て、瑠衣は心を鷲掴みされたような気分だった。胸が苦しくて、呼吸すら叶わないと思える程だった。

気取られぬよう、静かに深呼吸する。

『皮肉よね、自分でも消滅してしまっただものだと思っていたのに、こうして核を人の魂に融合させ尚意識は生きているなんて……』

「貴方は私の魂と一体化しているんですね」

『私が消えて既に無数の月日が流れただろうに、ファイはまだ私を追いかけているのね』

「……好きだから」

痛い。

「ファイは、貴方の事が好きだから……。貴方だって彼の事が好きなんですよね？」

溢れそうになる感情をせき止めるのが精一杯だ。

少し間を空けて、彼女は柔らかな春の日差しのような笑みを浮かべて言った。

『好きだった』

次の瞬間、キラリと月光に光る滴が彼女の瞳から流れ出していた。それを合図に瑠衣の目からも一粒、涙が零れ落ちた。

『私は既に消滅した身。いくら特殊な理由で精神を保っているとは言え、生き返る事は決してない。あるのは、消滅のみ。だからこそ、彼には前を向いて生きて欲しいの。私の事は、内緒にしてくれるわよね？』

「……それでいいんですか？ファイの事、好きだったのなら尚更……」

『好きだからこそ、離れるのよ。貴方の中に私は存在している。けど、私の命は既に終わっているのよ。この先、こんな不安定な状態で何処まで存在を維持出来るか分からないのに、未練なんて残してしまえば、どうなる事か。これは、ファイのためにも私のためにも必要な事なのよ。そして、貴方にもね』

側に居る事だけが愛ではない。そう、彼女は教えているようだった。

好きだから離れる。 。
まさか、悠は好きだから離れる事を選んだのでは……？何らかの原因があつて。

原因と考えられるのは、恐らく。

ファイの方を見た。憎みたくとも、憎みきれぬ相手。

『貴方、彼に惹かれているのでしよう？』

「!？」

どうして周りの人間はそうくっ付けだがるのだろう。ぶんぶんと首を振ると、更にクスクスと彼女は笑った。

『貴方の心は見え透いているわ。そして、ファイも私と重ねずに貴方を好きでいようとしている。彼が何故貴方に惹かれるのか、そして貴方が何故彼に惹かれるのか、分かる気がするわ』

彼女の姿が薄れていく。

引き止めようと手を伸ばした瑠衣だったが、手は虚空を掴んで彼女の姿は一瞬にして消え去っていた。

ただの幻に過ぎなかったのだろうか。

いや、彼女は確かに存在している。自分の魂と融合した状態で。

融合？

よく考えてみれば、不思議なチカラを使える精霊と人間の魂が混ざり合ったらどうなるのだろうか？チカラが使えたり、するのではないか。

試しに頑張ってみた。

勿論、何も起こらなかった。

起こったほうが怖いか……

自分が普通の人間同様であると身を持って知り、安堵した瞬間睡魔が襲っていた。

その場に倒れこみ、そのまま瑠衣は眠った。

『何故、どうして……!!』

気がつけば、暗闇の中で何かと戦う彼女の姿があった。三つ編みの髪が振り乱されていた。服もボロボロだ。

と、攻撃を受けて彼女の身体が吹っ飛ぶ。闇から凄まじい怒りを込められた声が轟く。

「何も分かっておらぬ！願いを叶えるとはどういう事なのか、全く分かっておらぬ！」

更に柱上に光が彼女を貫く。

『きゃあああああ！』

「リンゼ！」

彼女の身体が完全に後ろへと倒れる。そこへ駆けてくるのは赤毛の少年　ファイだ。

精霊リンゼはふるふると首を振った。そのまま下へと落ちていく。もう少しと言う所で、ファイはリンゼの手を掴み損ねた。そのまま彼女は落下していき、姿を消した。

絶望し、嗚咽を漏らすファイ。

その後ろから更に声が轟く。

「……ふふっ、お前達も覚えておくが良い。我に逆らえば、どうなるかを！」

ファイは奥歯を噛み締め、地面に爪を立てた。

「……い、！」

遠くから声が聞こえる。

と、突然頬に衝撃が走り、瑠衣は跳ね起きた。

「あ、起きた」

ヒリヒリする頬を押さえて瑠衣は目をパチクリさせた。思わず鏡を見れば、押さえた頬は少し赤くなっていた。

「全然起きないからビンタしてみた。どうだ、聞いただろう！」
女の子の頬を叩くだなんて、あり得ない。

こんな奴にときめくはずがない。好きになるはずもない！

「ガキ！」

「んなっ！こんな所で普通寝るはずないって思ったから何かあったのかと思っただよ！」

「正当な理由を並べただけで許すほど私は単純じゃない！」

いつもの痴話喧嘩を始めたせいで、先程まで見ていた夢の内容は瑠衣の記憶から消えかかろうとしていた。

chapter 34 再来（前書き）

学校が始まったので、スローペースの更新になると思いますが、出来るだけ早めにアップ出来るよう努めますので、よろしくお願ひします。

天気予報によると、しばらくは雨が続くらしい。

放課後。部活のない瑠衣や織音などは帰る時間だ。まあ絶対に帰らなければならぬ訳ではないのだが。

浮かない空を見て気分も落ち込んだ瑠衣に追い討ちをかけるように織音が話す。

「雷とか落ちないよね？ねえ？」

「大荒れって言うてたから……保障は出来ないかな？」

「んもつつ、嘘でもいいから落ちないって言うてよ〜！」

涙目で訴える織音。

でも先程瑠衣が言った通り、保障は出来ないのだ。普通なら気休めとして言えるのだが、そもも言えない事態だ。

最後の精霊であるクートは雷の使い手である。こんな時には彼のチカラも増すだろう。襲い掛かってくる確率は断然に高くなる。

もう巻き込まないと決めたのだ。

「ごめん織音。ちよつと私、残ろうと思うから先帰ってて」

「え〜！？ちよつと、瑠衣!？」

足早に校舎へと戻る。織音はついて来ない。彼女の性質だ。何か理由があるのだろうとさくつと割り切ってくれているのだ。

この戦いが終わってからでも、二人の仲は取り戻せるだろう。

でも、奪われてしまったモノは取り返し様がない。例えば、命とか。

整然と並ぶ靴箱の列。隠れるようにしてファイは靴箱の影に居た。

「それで、いいのか」

「私はもう迷わない。二言を言わせないで」

「……そうか」

ファイを見て、瑠衣は微笑んだ。

「信じてるよ、ファイ。私を絶対護ってくれるって」

「ああ、その信頼に依えて全力でお前を護る」

二人は屋上へと向かう。屋上はドア付近以外は屋根がないので、ファイにとつては今近づきたくない場所だろう。

我儘を言っているのは自分なのだ。

あの精霊を　クートを早急に止めなければ。じゃなければ、彼は。

授業中にふと今朝見た夢が思い出されてきた。あれがリンゼの記憶であり、真実を述べているのだとしたら……。

止めないと、彼は失ってしまう……大切なモノを！

傘もささずに屋上に立つ。降り続く雨が服を、身体を濡らしている。

暗い雲を睨み、瑠衣は待った。彼がやって来るのを。

そう時間の経たないうちに、空に変化があつた。空が明るく光り始める。雷の予兆だ。

ファイが叫んだ。

「後ろへ退け！」

指示通り、後ろへと退く。背中をファイが受け止める。

次の瞬間、瑠衣の立っていたあたりに凄まじい光の塊が振り落ちた。

ドオオオン

来た。

「自ら精霊を差し出す気になつたのかい？」

クートは嬉しそうに笑みを浮かべた。

そんな彼に対して瑠衣はきっぱり否定した。

「誰がそんな事、言ったのよ？」

「まあ、許可なんて貰えなくとも……」

再び空が光り、クートの背後に雷が落ちる。

稲光の影となり、見えにくくはあつたが彼が不気味に笑う姿が確認出来た。

「願いのために、核コアはいただいていく！」

襲い掛かるクートの前にファイが立ちはだかる。

ファイは掌に炎を生み出し、それをクートへと放つ。クートは炎をまともに受け止める。炎の威力が降り注ぐ雨によって弱められているのだ。ましてや発火作用のある電気を扱う彼にとっては威力の弱い炎など相手じゃない。

「ちっ」

舌打ちするファイにクートが迫る。

「危ない！」

「その身体に痛いほど感じさせてやるよ！」

ピシヤアアアン！

「うわあああああ！」

彼の絶叫。

膝を折り、その場へ伏せるファイ。その背中にクートの足が乗る。足に力が入り、ファイは意に沿わず伏せ込む。

「ファイ！」

「こんな苦しみから解放されたいだろう？ だったら素直に言うとおりにするんだな」

「うっっ、くっ………！」

苦しい。

でも譲れない、護りたいものがある。

重みのある足などもろともせず、ファイは立ち上がるうとした。するとファイの背中からクートの足がずれ落ちた。

今だ。

そう思い、勢い良く立ち上がった刹那、今度は襟首を掴まれた。

「せっかく答えまで聞いてあげたのに、残念だ」

冷やかな声。

クートがファイの胸へと手を伸ばす。

「駄目え！」

溜衣は走った。

そのままクートを突き飛ばそうとした。

勿論、コートも雷のチカラを使い、応戦しようとしていた。勝ち目なんてない。そう本能的に分かっていても、止まるわけには行かない……！

次の瞬間、辺りが光に包まれた。あまりの眩さに瑠衣は目を閉じた。コートはチカラを受けたのだろう。身体中がビリビリしていた。閉じた目を開き、倒れていた身体を持ち上げる。隣にはファイの姿が。よくよく見れば、右手が握られたままだ。

「馬鹿な契約主を護るために自らを犠牲にするとは」
まさか、ファイは、私を護るために！

そう、あの瞬間ファイは必死でコートを振り払い、瑠衣を護ろうと盾になった。その時に右手を掴んで、回避しようとしたのだ。だが、間に合わず、彼はもろにチカラを受けてしまった。

試しに揺さぶってみるも、彼の返事は無かった。

腹の底から溢れ出す何かを感じて、瑠衣は思わず自分の肩を掴む。感情が、抑えきれない！

「やあああああああ！」
瑠衣は叫んだ。

彼女の異変にコートも動きを止めた。

黒いオーラが彼女を中心に溢れ出していた。とても正気とは思えない。

ゆらりと瑠衣は立ち上がる。髪がたなびく。

「……！」
コートは彼女にリンゼの面影を見た。

しかし目は輝きを失っている。明らかにおかしい。

「許さない……！」

黒いオーラが薔薇の茨を形取って、コートに襲い掛かる。茨の棘が刺さり、コートは身動きが取れなくなる。

そのまま茨が彼を包み込む。棘がコートの身体のおちこちに食い込む。

このチカラは、確かにあの人のものだ！でも何故、ただの人

間が……！？

どんとどんと締め付けられていく。深く、棘が突き刺さっていく。血が点々と零れる。

そんなに酷くない怪我を負ってもピーピー騒ぐようなタイプのフアイの契約主は何も反応を示さない。

光を失った目が、冷酷だった。

こんなのが、あの人な訳がない！

電流を流して発火させる。

が、雨のせいでその火はすぐに消えてしまった。

これは本当のピンチだ。

もつと沢山のチカラが必要だ。そう思い、チカラを使おうとした。その時、激しい動悸がクートを襲った。

「!?!」

茨に巻かれつつも、のたうち回るクート。苦しさに喘ぐ。

この動悸が何なのか、彼は知っていた。契約主の代償が尽きつつあるという事だ。

精霊は契約主と契約を交わし、契約主の体力を代償にしてチカラを発揮する。ところが、代償となる契約主の体力がなければ問題外だ。

更にこの代償となる体力は凡人ならそれほど知れている程度であるのに対し、クートの契約主は病人だ。それも、生きる意思すら忘れているような、命の尽きかけた人間だ。僅かな体力も残されていない。

きっと今頃、彼女は熱を出し始めて苦しんでいるだろう。荒い呼吸音が耳に届くようだ。

本当は彼女を護りたかった。

彼女の病気を治して、生きる希望を与えたかった。

でも、今のままでは自分は代償を求める死への案内人に過ぎない。

いつその事、ここで力尽きた方がいいのかも知れない。
契約を破棄され、何とか少しでも生きながらえる方が彼女も幸せ
かも知れない。

滅多に見せない彼女の笑顔がもつと見たかった。ずっと側に、居
たかった。

無駄な抵抗をやめ、身体を預ける。

が、薔薇がどんどん建物を包むように茨を伸ばしていく様を見て、
危機感を感じた。

「標的は、オレのはず、だ！なのに、何故……！」

彼の言葉は瑠衣に届いていた。

だが、身体が言う事を聞かない。何故こんな事になっているのか、
事態の把握すら出来ていないのだから。

職員室の方向から悲鳴が上がった。茨が侵入したのだろう。

このまま放っておいたら、傷つけちゃう！コートも……！

コートが虚ろな意識を閉じようとした時だった。

「もういい……！」

正面から瑠衣の体を抱き寄せたのは、ファイだった。

それでも尚、茨は成長し続ける。止まらない、止められない。

ファイにも容赦なく茨が襲う。だが、彼に触れる寸前で突然発火
して燃え失せる。

「俺は無事だ！ここに居る！目を覚ませ、瑠衣！」

私はちゃんと意識がある！でも、身体が！

その叫びを聞き届けたのか、ファイは瑠衣の身体を突き飛ばす。

背中を軽く打つ。逃げられぬように手首をしっかりと捕える。

彼の唇が瑠衣の唇に重なる。

その瞬間、全てのコントロールが瑠衣に戻った。

茨も動きを止めたかと思えば、細かい粒子となって散った。クー

トがそのまま倒れこむ。

前の自分なら彼を突き飛ばして文句を言っていた所だろう。でも、
彼は必死で止めてくれたのだ。確かに約束を破らずに自分を救い出

してくれた。それが、何よりも嬉しくて。

暫くそのまま目を閉じていた。

ようやく彼の唇が離れた。目を開き、彼の顔を見る。

「……ファイ」

「瑠衣？」

再び瞳に光が戻ったのを確認し、ファイは瑠衣を抱きしめた。

「良かった……！」

「ありがとうね、ファイ」

とても頼もしい精霊だと心から思った。

「でも、私一体どうしてあんな事に？」

「人の抑え切れない怒りや憎しみが時折闇と結びついて暴走を始める事があると聞いた事がある。たぶん、そうだろう」

「そう言えば」

ファイが気を失った時、抑えきれぬ憤りを感じたのは確かだ。

でも、あのチカラは完全に樹の精霊　リンゼのチカラであった事はファイも勘付いているらしい。あえてその事に触れようとはしない。

あのまま暴走を続けていたら、どうなっていただろう。全く関係のない学校の教職員、まだ学校に残っている生徒に被害を加えていたかも知れない。そう考えるとゾッとする。

本当に、止めてくれて良かった

瑠衣はファイの胸に顔をうずめた。

「……泣いているのか？」

「うん」

「やる事はまだ、残ってんぞ」

荒い呼吸をするクートの姿。もう、彼には戦う余力など残っていない。

「ファイ、悪いけど壊れてしまった校舎直してくれる？出来るなら、記憶操作も」

「それは俺達の仕事だ」

低く響いた声。

振り返ればそこにはカシオと悠の姿が。遅れて後ろに蓮斗がやって来る。

カシオが魔法をかけている間にも悠が声を上げた。

「どうしてこんな無茶を……！」

怪我していると見込んで救急箱を持つてきたらしい。悠が駆け寄り、応急手当をしようとする。が、瑠衣はそれを制した。

クートを見据え、瑠衣は言う。

「貴方の願いって、契約主の病気を治したいって事だよね？」

きつぱりと言い当てられ、ぐうの音も出ないクート。いや、出したくとも出せないほど衰弱しているのだが。

「とりあえず、今はあの子の元へ行った方がいいと思うよ」

「え？」

「……私達も一緒に行こう」

カシオが風の魔方陣を発動させる。次の瞬間、周りの景色が変わり、クートの契約主が待つ病院の屋上へと転移した。

ぼろぼろの身体を一心に奮い立たせ、自らの姿を人間同様に变化させる。そして走り出す。皆がそれに続いて階段を駆け下りる。

彼は迷わずに自分の契約主の病室へと走る。

彼女の部屋の前には複数の看護師が居た。掴みかかってクートは叫んだ。

「サラは……サラは！」

「君は、一体……？もしかして、さっきからサラさんが虚ろに言っているクートって君の事かい？」

「そうだ！」

「もう殆ど残されていない最後の力を振り絞って彼女は貴方を待っていたんですよ。取り乱さないで、落ち着いて入ってくださいね」
続々とやって来るメンバーを見て、看護師が知り合いなら君達もと病室へ入れてくれた。

先日やって来た時とは一変、彼女の周りに医療機械がズラリと並

べられていた。ピツピツと鼓動を感知して鳴る音がやけに響いている。

マスクを付けられ、荒い呼吸を繰り返す彼女はとても生きているとは思えない青白い肌をしていた。目のしたには隈が出来てしまっている。

彼女は死に近づいていた。

ショックを受けつつも、恐る恐るコートは彼女の手を握った。

「サラ……」

それが彼女の名だった。

名を呼ばれ、サラはうつすら目を開けた。もう半分ほどしか開かないようだ。

誰なのか認識し、笑みをこぼすサラ。

前回同様カシオが魔法をかける。

「……良かった。最期に、会えて」

「最期だなんて言うな！オレは、オレは……！」
首を振るサラ。

彼の横に立つ一人の少女へと視線が移る。

「貴方、サラって言うのね……」

「ええ……。わたし、は、サラ・リンドウ……。日本名は、林道沙羅って……言うの」

一呼吸置いてサラが続ける。

「私は、ずっと、一人だった……。ずっと、病院で、暮らして、外に行くなんて、ままならなかった……。だから、友達と、呼べる、存在が居なくて……」

握られた手に力を込める。

「でも、やっと、出来た……。大切な、存在が」

コートの瞳が潤む。が、必死で涙を堪える。

その様子を見ていたファイが瑠衣の背後から顔を出す。

「こいつが、心の支えだったんだな」

「だって……。お父様や、お母様、皆、私を置いてきぼりに……」
「完全なる孤立です力。その気持ちなら、分かるヨ」

蓮斗が言う。言わば、親に捨てられたも同然だったのだ。金だけ払って治療はさせるものの、愛情を注ごうとはしなかった。彼女も

辛い思いをして生きてきたのだ。

それが、彼女の生きる意志のない、最大の理由なのだろう。

「クートだけじゃないよ」

瑠衣が呟く。

その瞳に沢山の光を集めて。

「私達だつて、もう仲間　友達じゃない。知り合つて本当に偶然の縁なんだよ。無関心じゃなくなった私達だつて、もう友達じゃない！孤独なんかじゃない！」

もう一方の手がすぎるように瑠衣の手にしがみついた。

その様を見て、悠、蓮斗が彼女の手に触れる。

「ちゃんと巡り合えたんだよ。君が望んでいた存在にさ」

「心の寄り所がちゃんとここにあるんだヨ。この縁も、きっと精霊同士の戦いがあったからこそあるもんだネ」

そうだ。

リンゼが　ファイがして来た事。その努力によって、新しい契約主同士の関係が結ばれるようになったのだ。

精霊が、導いたのだ。この縁を。

孤独なんかじゃない！

その言葉がサラの脳に幾度となく響いていた。

もう自分一人で抱え込まなくてもいい。彼一人に頼らなくてもいい。

こんなに、こんなに温かい関係がここに築かれたのだ。それだけで、心が軽くなる。

ふつと気を緩めた時、涙が零れた。

涙で滲んではいたが、クートもまた泣いていた。

彼は特別だった。今までずっと、心の支えとなり、自分のために尽くしてくれた。

そんな彼が　好きだった。

自力でマスクを取る。駄目だと言う声があったが、そんなのどうだつていい。

最期の我儘くらい、許される。

彼はちゃんと分かってくれていた。自分がどうしてほしいのか。背中を抱えられる。

「愛してる、サラ」

「私もよ、コート……」

それは初めてのキスであり、永遠の別れのキスであった。

彼の唇の温かみに全身の力が抜けていった。意識が徐々に闇へと落ちていき、数秒後には何も感じなくなった。

心臓停止を意味するアラーム音が鳴り響いていた。

ぐつと泣き出しそうになるのを堪えていた瑠衣だったが、悠から差し出されたハンカチにとうとう涙が零れた。

これが、人の命の終わる瞬間^{とせ}。

何て悲しいのだろう。

一度経験した事を思い出していた。

数瞬前までは確かに生きていた人物がもう肩一つ震わせない虚しさが押し寄せた。喋る事も出来ない。温もりを感じる事さえ出来ない。

二度と巡り合えないのだと痛感させられる。

ベッドに寝かされた彼女は少し嬉しそうな微笑みを浮かべていた。最期だけは、幸せに思えただろうか。長年欲しかった存在が手に入って。

コートはその場に崩れ落ち、最期の温もりをずっと噛み締めていた。

「これから、彼女はどうなるんだろう……」

「葬儀までは取り計らってくれると思うんだけど」

死してなおの扱いが不安だ。

休憩スペースで皆が暗い表情をしていた。人が死んで、明るくならんて出来るはずがない。

「お葬式とかも、出てあげたいけど、いきなりでびっくりされち

やうだろつから、出られないだろつし……」
ちゃんと送り届ける事すらままならない。

重い空気の中、ずっと何も言わずに俯いていたクートが立ち上がった。

「とれよ、核^{コア}」

「は？」

「……サラの居なくなつた世界に価値なんてない！」
ファイの手首を掴み、強引に自分の胸へと突っ込ませる。
覚悟したように、クートが目を閉じた。

その様にファイは勢い良く腕を引き抜いて、その手で彼の頬に殴りかかった。鈍い音がして、クートが床へと倒れる。

「甘つたれた事を言つてんじゃねえよ！」
食いかかる勢いで言い放つ。

「あの子が、お前の消滅を望むとでも思つてんのか！確かに天帝曰く、死した者を生き返らせる願いは聞き届けられないと言つたが、何もそれで全部捨てる事はねえだろ！」

「五月蠅い！オレには……オレには願いも、その存在も、全部サラあつてこそだつたんだ！」

「それは、彼女を言い訳に利用してるとしか思えないよ」
きつぱりと言い放たれた言葉に、クートは瑠衣を睨んだ。

それでも臆する事無く瑠衣はクートに近づき、ファイの殴つた側の頬を平手でペチツと叩いた。

「貴方が存在し、生きる事によって、彼女も救われるんじゃないの？」

そう、彼自身が彼女の生きた証だ。

へなへなとその場にしゃがみ込んだクート。

ぼんつと肩を叩いてやると、まだ堪えていた想いが零れて、泣きじやくり始めた。

私も、いつかこんな風に想われたいな。大事に、大事に。

改めて精霊と人間との間に生まれた想いに感銘する瑠衣だった。

前にマリアナが自分に叩き込んだ言葉の意味が、ようやく実感出来た。

こうして、最後の精霊とも無事和解する事が出来、全ての精霊が一応揃ったのである。

chapter 37 重なる影

「ファイ、おやすみ〜」

「おう」

あれから一週間経った夜。

いつものように先に寝始める瑠衣。

「ちよっと、あたしへの挨拶は!?!」

「ああ、メリッサもおやすみ……」

「何か、どうでもいいような挨拶でムカつくわね」

メリッサも回復し、再び瑠衣の家へと戻ってきていた。

すつすつと規則正しい寝息が聞こえてから、メリッサとファイが向き合った。これから大事な話をするために。

「んで、あたしが居ない間にとつとつクートも従属するようになったわけね〜」

「そうだ。その事だが」

伏せがちにファイが言う。

「明々後日には、天帝の元へ向かおうと思う」

「なっ……」

流石のメリッサも驚きを隠せないで居た。それもそうだろう。まさかこんなに早く帰る事になるとは目覚めた直後には思ってもなかった。

こんなにすんなり今回の戦いが終わったのも、ファイ 契約主である瑠衣が巧みに説得したおかげとも言えるだろう。

従属する身であるメリッサには拒否権がない。が。

「いくら何でもそれは早すぎるでしょ!」

普通に反発した。

「私はもう少し 責めて一週間はいるものだと思ってたのに! 蓮斗とデートすら出来ていないのに〜!」

「そりゃ俺だってあいつとデ、デートなんて……」

「それじゃあもう少し待とうよ〜！」

「今、思ったんだけどさ」

「ん？」

「天界へ向かう道ロードに入れば、契約主の記憶は契約解除時同様、消えるんだろ？」

その言葉にメリッサは凍りついた。

「それって、永遠の別れに等しいよな……。俺は人間になると言う願いを叶えて瑠衣とずっと一緒に居たいと思ってたけど、それは出来ないじゃないか……」

彼女からの返答はない。

「だったら、もう無駄に想いを募らせずに行った方がいいかなって……そう思ったんだ」

「……やよ」

ぼろぼろ涙を零すメリッサ。潤んだ瞳は相変わらず、幼児を思わせる。

「嫌よ！そんなの！」

そう言ったかと思うと、メリッサは窓ガラスをすり抜けて外へと出て行ってしまった。

確か、蓮斗の家はこの近くにあるそうだとか。

まあ、蓮斗も変わったし、心配ないか

今なら信頼が置けるので、追いかけない事にした。

それよりも、あのチカラ　　瑠衣が暴走したあの能力は完全にリンゼのものだった。

あまりにも彼女を思わせる要素の持ち主である瑠衣にただならぬ因縁を感じたものだ。

確実に、リンゼは存在している。瑠衣の中に。

姿を、一度でいいから見せてはくれないだろうか。
目を閉じようとした時だった。

『ようやく、二人きりになれましたね』

響いた懐かしい声に勢い良く顔を上げた。透けてはいるが、リン

ゼの姿が目の前にあった。

一体いつから探し求めていた事か。

聞きたいことが沢山あった。でも、口は開かなかつた。ただ、逢えただけで嬉しくて。

『私はどうしても言わなければと思い、顔を出したままでです。それほど時間を共にには出来ません。こうして意識を飛ばす事はかなりチカラを使うのです』

「ああ……」

『貴方に真実を語っておきます。私は』

瑠衣に語った事と同様の内容をファイに話した。

信じられないと言わんばかりにファイは目を白黒させた。

「……でも、お前は確かに存在しているじゃないか」

『本来存在してはならないのです。私の意識が消滅しないと、不安定な魂となつている瑠衣さんがどうなるか』

その先は計り知れない。

消えなければならぬ。そして、その事を彼女自身も望んでいるのだ。それを咎める権限など、持ち合わせていない。

でも、せつかくこうして精神が残っているのに、彼女を助ける手立てがないのが悔しい。

『だから、もう私の事は忘れ去りなさい』

「……」

冷たく言い放たれた言葉にファイは絶句した。

『ちゃんと前を見て。過去ばかりを求めているは、迫り来る天帝との再会時に敗北を招きます。私の二の舞にはならないで。貴方には私ではなく、彼女がついているのですから』

違う。

そう言いたくとも声に出来なかつた。いや、そうする事も彼女は叶えさせなかつた。

瑠衣に想いを寄せているのは確かだ。ただ、そのきっかけを作ったのは他でもなく、リンゼなのだ。

きつかけはただリンゼに似ていると理由だった。

他人のイメージを重ねるのは駄目だと分かっていた。だが最初はどうしてもリンゼと重ね合わせていた。

『私は既に死んでいるのです。本当は貴方の前には絶対出ないと誓っていました。貴方を惑わしているのは、他でもなく私なのですから』

リンゼが近づく。

『愛していましたが、ファイ。あの時言えなかった別れの言葉です……。さよなら』

「リンゼ」

思わず引きとめようとした。

しかしこのまま引き止めても彼女の負担になるだけだ。

本当は手放したくない。でも、既に彼女は手の届かない場所へと行ってしまっているのだ。今更、元通りに戻れる訳がない。

周りの景色と同化して消え行く彼女の姿にファイは一言投げかけた。

「俺も、愛してた」

流石に別れの言葉は言えなかった。

それで十分だった様だ。とろける様な笑みを浮かべてリンゼは消えた。

よろめいて、ファイは壁によりすがった。

悲しくて、悲しくて仕方がなかった。どうしてこんな運命の中で愛してしまったのだろう。

暫くファイは嗚咽を漏らし続けた。

「おゝい、起きろ」

「全然反応しないね」

「よしっこれでどうだ！」

突然頭に冷気を感じてファイはがばつと起き上がった。

「あ、起きた」

「やっぱり冷たい空気も苦手みたいね」

と、瑠衣がこちらに顔を近づけてくる。

「目、腫れてない？大丈夫？」

慌てて鏡を見せてもらうと、少し腫れあがっていた。睡眠不足に泣き跡が重なって更に状態を悪化させている。

しばらく鏡を見つめていたファイだったが、満面の笑みを浮かべて言った。

「別に何ともねえよ」

「そう？」

重なる影にファイは目を伏せた。

chapter 38 存在の大きさ（前書き）

すみません、つい最近に間違いに気づき、修正させていただきました。

どうして居ない善のキャラクターの名が出ていたのか……恥ずかしい間違いでした。

chapter 38 存在の大きさ

「えっ!?!」

「明日には帰る、だって!?!」

「おう」

悠の家に全員集合させて、明日帰る事を告げたファイ。悠、蓮斗、瑠衣は互いに顔を見合わせ、表情を歪ませた。

メリツサは大粒の涙を流しながら蓮斗に抱きついた。

呆れたようにカシオとクートは壁にもたれて冷静に話を聞いていた。

「何で、そんな急に……!!」

「さつさと人間になりたいって事だ。お前と過ごした日々の中で、俺の願いは更に強くなった。だから早く天帝の元へ行きたいって思っただけさ」

「ほうほう、天帝の元へと帰るのか」

話に割って入ってきたのは悠の父親だ。

ファイはどうもよくは思っていないらしい。怪訝そうに眉を顰めた。

彼は瑠衣の肩に手を置く。

「それは好都合だ。いつその事、今日に予定を早めたらどうかかな?」

「ご忠告をどうも」

見えない火花が散っていた。

ごく自然な動作で悠の父親の手を解く。

「もう危険な事は何一つないんで、安心ですよ」

「……」

「父さん、そういう事で、別れを惜しむくらいはさせてもらおうよ」
「どうぞ、ご勝手に」

踵を返し、父親はリビングを出る。去り際ぼそりと告げる。

「どうせ忘れる事になるだろうに……」

妙に変なムードになっている室内に、突如パンパンと手を叩く音が響いた。数名、驚いて肩をびくりと震わせた。

「さあ、今日は思いつきり楽しんで、お別れの会にしようじゃないか！」

「そうだそうだ！盛り上がっていこうぜ」

「……ぐすつ。まあ蓮斗がそう言うならいっちょぱあぐつとやりますか！」

「そうと決まれば準備準備！」

慌しくなった室内。準備作業をそれぞれに手伝う一行。ただ一人、コートだけを除いて。

そんな彼の姿を見咎めた瑠衣がコートに近づいた。

瑠衣の気配がこちらへ来るのを分かっているながら顔を上げようとしないコート。

「コートも、ほら」

「……オレは、ダメなんだ。華やかな事に参加して、楽しんでいたら。サラの事を考えると、とてもそんな気にはなれない」

「そんな事ないよ。むしろ、楽しむ方が、彼女も喜ぶと思うよ」
強引に彼の手を引き、輪の中へと入れる。

今度はファイがコートに腕をかけた。

「ほら、お別れ会ぐらい、ぱぐつとやれよ」
「……」

少し怪訝そうにしながらも手伝いを始めたコート。

皆して準備をしてから三十分後。別れの会が執り行われた。

悠が用意してくれた（実際にはメイドに作らせた）料理や飲み物をつまみ、個人個人に時を楽しんだ。

何故かジュースに混じってしまった酒のせいで、カシオとコートは酔ってしまい、奇妙な踊りを始めた。その様子を見た瑠衣、悠、メリッサ、蓮斗、ファイはけらけらと笑った。

何せ頭の硬い彼が酒に酔うだけでこんなに可笑しい行動を取ると

は皆思つてもなかつたからだ。

蓮斗は普通にジュースを飲み干した。メリツサも平気なよう
で、蓮斗に続いてグラスを空にした。瑠衣と悠は少し飲んだだけでそれ
以上は全く口にはしなかつた。ファイは臭いが気に入らなかつたよ
うで、一口も口にする事はなかつた。

ボードゲームで盛り上がる中、瑠衣にファイが耳打ちした。

「出るぞ」

「えっ？」

熱中しているため、皆瑠衣とファイが離脱した事には気付かなか
つた。

外の空気は肌寒く、瑠衣が少し身震いした。

と、突然生温い風が吹く。寒さが少し和らいだ。すぐにファイの
仕業であると気付く。

「その……」

「？」

ぎゅっと抱きしめられた。

「ありがとうな」

ただ純粹にそう言われただけでこんなにもときめいている自分は
おかしいのだろうか。

何とも意識した事なんてなかつたのに、今は過剰と言えるほど意
識している。

この温もりが、愛しい。そう思い始めた途端にするりと彼の身体
が離れた。

そのまま彼は歩いていく。

何処へ行くの？

嫌な予感が走った。

「待つて……！」

ファイは立ち止まる。くると振り返った顔は今までに見せた事
がない苦々しい表情になっていた。

でも首を振り、笑みを浮かべた。

慌てて瑠衣は駆けた。手を掴もうとしたが、彼の手はすり抜けた。空中に浮き、瞬時にファイは姿を消した。直接脳に響く声。

「お前と出会えて、本当に良かった……」
ただ白い雲に覆われた空を見上げていた。

彼の姿は何処にも見当たらない。
何故。

そのまま膝から崩れ落ちた。

彼は一足先に別れを告げたのだ。もう、戻ってくるつもりはない。見送りすら、させてくれないのだ。

数々の思い出が脳裏をよぎった。迫り来る危険の数々、我が身を省みずに立ち向かう彼の後姿。口は悪くても、本当は優しく想ってくれていた。

『精霊だとか人間とか関係ない。一度好きになってしまったらそう簡単に割り切れるものじゃないよ』
メリツサの言葉が浮かんだ。
そうだ。

精霊だとか、人間だとか、種族の隔たりなんて関係ない。
ただ純粹に彼は想ってくれた。そして、それにようやく愛しさを見いだした。

自分にとって、ファイと言う存在は 誰よりも大切なモノだ。
でも、今更気付いてどうだと言うのか。既に彼は自分の前から姿を消してしまった。

どうしてもっと早く気付いてあげられなかったのか。
彼がこんな形で姿を消す理由なんて、分かりきっているくせに。別れが、辛いからだ。

大切な想い人との別れが。

「私だって、気付いたからには……辛いんだから！」
このままで終われる訳がない。

立ち上がり、踵を返してリビングに飛び込んだ。

「あれ？瑠衣、外に出たの？」

「ファイの姿も見当たらないようだ……」

「皆、お願い」

切羽詰った彼女の声音に只ならぬ事態を察した精霊達が反応する。

「私を ……」

chapter 39 旅立ち

旅立ちの朝。

精霊達はメリッサが瑠衣を監禁した場所である幽霊屋敷の丘に集まっていた。

そこには見送りのために悠と蓮斗の姿もあった。

瑠衣の姿は何処にもなかった。当たり前だ。彼女にはこの場所を告げていない。そして、連絡もしないよう頼んだのは自分なのだから。

それでも心の中でまだ希望があるのではないかと思っている自分が居る。何とも未練がましい。

これで、本当に良かったんだ。これで……

メリッサと蓮斗が別れを惜しんで抱き合っている。

「愛してるわ、蓮斗」

「俺もだよ、メリッサ」

さよならのキスをして、メリッサが彼から離れる。既に別れの挨拶を終えたメンバーを見回し、ファイが頷く。

「そろそろ、行くか」

「ちよつと待ったあ〜！」

ファイの手首を強く掴み、メリッサが声を上げた。

「あんた、あの子に別れを言わないで行くつもり!？」

「……そうだと言ったら？」

「何よそれ! あんだけ想いを寄せておきながら別れも惜しまない訳!?! あんたの気持ちなんて、そんな程度だったの!?!」

「やめておけ、メリッサ」

「いいや、言わせてもらっわ!」

彼女の人差し指が真っ直ぐにこちらへと向けられた。

「それは現実から逃げ出しているに過ぎないんだから!」

「……っ! お前に何が分かるんだよ!」

思わず怒声を浴びせていた。流石のメリッサも肩をすくめた。口にはしたくなかった思いが溢れ出す。

「お前には分からないだろう！元々好きだった相手に似ている奴に再び思いを寄せる事になってしまった苦しみが！」

沢山悩んだ。

沢山傷ついた。

そしてまた、抗えぬ運命が想いを引き裂く。

ならば、もうこのまま。

歯を噛み締め、更に溢れ出しそうな感情を必死に押し殺した。今の心境を理解したらしく、メリッサは身を引いた。

こんな別れ、本心では望んでいない。

でも、最後の別れがあれば更に自分は彼女の事を忘れる事が出来ないだろう。

彼女は本意でなくとも自分の事を忘れてしまう。そんな彼女に会えるはずがない。

自分の気持ちにけじめを付けるためにも、必要だったのだ。

もう迷いはしない。

「行こう」

「……ああ」

四人が手を出し、重ね合わせる。意識を手先へと集中させる。

すると、幽霊屋敷へと続く道に歪みが出来始め、別世界へと繋がる道がぽっかりと出現した。

その入り口にコート、カシオ、後ろめたそうにメリッサも続く。

最後にファイが後ろを振り返った。勿論、彼女の姿はなかった。

そう、それでいい……。

入り口に身を投じた時だった。

「ファイ！」

心の奥で待ち焦がれた声がして、手首を掴まれた。

振り返ると居るはずのない瑠衣が居た。一体何故、どうしてここが分かったのだろうか。

「ファイの馬鹿！」

彼女の発した第一声に思わずカチンときてしまった。

「馬鹿とは何だよ！馬鹿とは！」

「馬鹿は馬鹿よ！」

一粒の滴がファイの腕に滴り落ちた。

「最後の最後でこんな突き放し方はないでしょ！私だって、言っておかなきゃならないって思った言葉があるんだから！」

その言葉にちよっぴり期待をしてしまうファイ。勿論、彼女は見事にそれを裏切った。

「ありがとう！ずっと、側に居てくれて、私を護ってくれて……」
お礼が聞けたので、まあよしとしよう。

未練はもうない。

自然と笑みが零れた。ファイの気持ちを悟り、瑠衣は泣くのを止めてはにかんだ。

と、ふいに彼女の顔が近づいて頬に唇が触れた。

「大好き、ファイ」

本当は抱きしめたかった。

でもそれはもう叶わない。

ファイの手がするりと入り口の中へと入っていった。瑠衣が離そうとした時だった。

突如周りの景色が揺らいだ。異変を感じた精霊達が顔を上げる。

「瑠衣！」

悠が咄嗟に手を伸ばす。だが、悠の手は虚空を掴み、彼女は入り口へと呑み込まれてしまっていた。

何が起こったのか分からず、しばし呆然とした瑠衣だったが、元に戻ろうと悠に向けて手を伸ばそうとした。だが、見えないバリアに阻まれてそれは叶わなかった。

拳句の果てには入り口が閉じ始めてしまった。

「こんな事、今までなかったのに……！」

「瑠衣、来い！」

手を引く。

「俺が何とかしてやる。だから、一緒に来い！」

徐々に歪んでいく悠達の姿を見つめ、意を決して頷いた。彼ならばきつと自分を導いてくれる。そう確信して。

元居た世界に背中を向けた瞬間、入り口は完全に閉じた。

閉じてしまった入り口をしばし見つめた悠と蓮斗。そして互いに顔を見合わせた。

「あ、あの……」

悠が先に口を開く。

「僕達はここで何をしていたのでしょうか？」

「分かんないナ……。それより、俺はお前の事、知らないんですガ？」

「僕も君の事、知らない」

二人は首を傾げて丘を降りていく。

精霊達と、瑠衣に関する記憶は消えていた。

「えっ……？」

カシオの説明を聞いて、瑠衣は目を見開いた。

「一度異世界へと紛れ込んでしまった存在は元居た世界から消滅した事になる。すなわち、存在そのものが存在していなかった事になり、その記憶は消滅させられる」

「……そんな、そんなの嘘！」

「嘘じゃねえよ。そうなるから俺はお前を」

辛い宣告だった。

でも、まだ道が完全になくなってしまった訳ではない。

「天帝に、事情を話す必要があるだろう。オレはどうなっても知らないからな」

「流石に保障は出来ないよね」

クートとメリッサが珍しく意気投合している。

へたり込む彼女の姿は行く場所を失ってしまった迷い子に見えた。

「大丈夫だ」

根拠はない。

「俺が、絶対お前を護るから」

何とかしてみせる。

今度こそ、自分の身を滅ぼす事になろうとも。

不安そうな表情を見せる瑠衣に手を差し伸べた。恐る恐る瑠衣はその手を取り、立ち上がった。

「さあ、天帝の元へと行くぞ！」

一向は異世界の道を歩き出した。

chapter 40 先にあるモノ

本来ならば魔法を使って更にテンポ良く行ける道なのだが、人間である瑠衣には移動手段が徒歩しかない。

仕方なく一行は瑠衣に合わせて歩く事にした。しかし歩くのは容易くない。体力を消耗するものだ。

そのため、一定の時間になれば、

「疲れた〜！休憩〜！」

とメリツサの号令でちよくちよく休みを取る。余計に時間がかかってしまうので、これでは人間界での換算で二日はかかってしまいそうだ。

しかし先に進むごとに瑠衣は身体に異変を感じていた。

「瑠衣？」

少しの異変もファイは見逃さない。

彼が心配するのは分かっていた。だが平気だと貫いた。

だがそれもしばらくして限界にきてしまい、瑠衣はとうとうその場に崩れ落ちた。

「瑠衣！」

ファイを筆頭に皆が駆け寄る。自力で起き上がれないほど瑠衣の身体は弱り果てていた。

ただの疲労によるものではないと瑠衣は悟っていた。何か別の、得体の知れないチカラが働いているのだ。そして、自分だけでなく内に居るリンゼも苦しめられているのだと直感していた。

瑠衣の意識はブツリと糸が切れたように闇へと呑みこまれていった。

『やはり、そう簡単には行かせてもらえないと言う事ね……』
淡い光に包まれて、彼女は姿を現した。

『貴方は無理やりここに連れ込まれた。今度こそ、私を消滅させ

るためにね』

「そんな！」

『更に、私と同じ事を繰り返そうとするファイにも容赦はしないでしょう』

「同じ、事？」

『ええ、精霊の姿のまま天帝に捧げると言う行為よ』

一度見た事のある夢が過去の記憶であると決定付けられた瞬間だった。

そして知ってしまった。彼が最後の最後で自分を退けようとした理由を。

リンゼと関係のある自分を巻き込んでしまうに違いないと思ったからだ。天帝と言う存在はどんなものか知らないが、彼女が自分と一体化して生きている事くらい知れているだろう。仕留め損ねたものを野放しにするほど緩い者など居ない。

つまり、自分はまた進んで危険な場所へと踏み入れてしまったのだ。それも、ファイの思いを踏み躪って。

本当に、私は全然分かってない……

『……過去を後悔しても、どうにもならないわ。何とかするわ、いいえ、何とかしてみせる。ファイも貴方も私が』
それはどうかな。

突如轟いた声にリンゼが震え上がった。

闇の中から大きな掌が伸びてきた。ただならぬ殺気を感じて瑠衣は悲鳴を上げた。

「いやああああああ！」

「瑠衣！」

ファイの声で急に視界が開けた。

心臓が破裂しそうなほど脈打っていた。呼吸も荒く、苦しい。

今のは、夢だったのね……

ただの夢なら気にするまでもないのだが、とてもただの夢には思えない。これから現実で、何かが起ころうとしている。そしてそれ

を阻止するためにリンゼは、自らの消滅を覚悟している。それほど
の一大事が降りかかると言う事だ。

「おい、大丈夫か？」

まともにファイの顔を見る事が出来ない。

「……ただ悪夢にうなされただけよ。大丈夫」

と、突如グラリと景色が歪み、意識が闇に閉ざされた。

眩い光を放ち、瑠衣の姿が一変した。

ブロンズの髪が伸びて色素を失い、淡い緑の髪となる。

「り、リンゼ!？」

カシオとメリッサが裏返った声で言った。

びっくりするのも当然だろう。彼女は一応消滅した事になってい
たのだから。

一方のクートはあらかた察しが付いていたようだ。瑠衣が人間に
は持ち得ないチカラを暴走させたが、あれは樹を司るリンゼのチカ
ラそのものだったからだろう。

『久しいですね。メリッサ、カシオ、クート……聞こえているで
しょう、マリアナも』

クートが思わず自分の胸を押さえた。

あの時会うのはこれで最後だと彼女は言っていた。なのに姿を現
した。ましてや体力を使ってまで。それには理由があるはずだ。

急を要する理由が。

案の定、リンゼは語り始めた。

『落ち着いて聞いてください。天帝は、私もろとも、瑠衣さんま
でも消滅させるつもりです。染み渡るチカラは確実に瑠衣さんを
私も蝕んでいます』

全身が強張る。

『そして、ファイも』

リンゼが咳き込む。口から血を吐き出す。

駆け寄ろうとしたファイとメリッサを手で制するリンゼ。残され
た気力を振り絞って伝えなければならぬ。

『お願い、ファイ……。天帝に彼女を殺させないで。必ず、護りきって……。そして、貴方も、死なないで。』
その場に倒れこむリンゼ。

彼女の髪がみるみるうちにブロンズのセミロングヘアに変わった。瑠衣に入れ替わったようだ。

やはり天帝は全てを悟り、仁王立ちして待っているのか……。今更逃げることも出来ない。ましてや、彼女をこのままこちらの世界で彷徨わせるなんて出来るはずがない。

「皆……」

「そう、だったよね。リンゼもこんな形で天帝の元へ行って、それで……。ファイも、ただで済むはずがないよ！」

「こうなると覚悟はしていただろうが、瑠衣がこのような状態になっってしまうとは予想外だっただろう」

「早くしないとその子の体力が持たない。だが、元の世界へ返すには天帝のチカラが必要不可欠。とても説得がつくような状態でもない」

「それでも俺は諦めないさ！ここでがたがたと泣き言を言っていたら瑠衣がこのまま力尽きるだけだ！俺は約束したんだ！こいつを、護ってみせるとな！」

抱きかかえた彼女の身体は前に抱いた時よりも軽く感じた。

顔色はなおも良くない。

「まあ協力はしてやるさ」

あまり積極的に物事に関わろうとはしなかったクートの発言にファイははっと顔を上げた。

「当たり前だ。色々と世話になったからな」

「あたしも色々あったしね。一緒に天帝殴りにいってもいいわよ？」

「……それで後悔するなよ！」

これも彼女の人徳のおかげなのだろうとファイは思った。

もしこの場にマリアナが居たのならば、彼女もきつとおしみなく

協力してくれただろう。

そう言えばリンゼもこうして皆を惹き付ける人徳に長けていた。全く魂の共有者だけあって、似ているものだ。

「俺とメリッサ、お前のチカラがあれば何とか移動出来るだろう？」

「そうね。私の水をベースに風があれば」

単体の魔法では生身の精霊と人間を運ぶのは至難の業だ。だがコラボレーションした協力魔法なら何とか行けるだろう。

カシオが出した魔方陣にメリッサが水のチカラを送り込む。水は風を受けることによって移動力を持つ。それを上手く活かした移動魔法だ。

「行くぞ！」

勢い良く水が噴き出し、周りの景色を変えた。

見事光差す天帝の住まう天空神殿へと移動出来たようだ。純白の柱が雲の上に立っていた。

「お帰り」

天空神殿の主が姿を見せた。

chapter 41 等価交換

カシオのよりきらきらと輝く膝ほどまである銀髪に、深みのある蒼の瞳をもった人物は微笑んだ。

その肌の白さから一瞬女とも思えるが、性別はれっきとした男だ。微笑みの裏に隠されたモノを皆感じ取っていた。

「天帝……。単刀直入に言うぞ」

この言葉から恐らく戦いの火蓋は切って落とされるだろう。

「精霊の核コアを持ってきた。俺の願いを叶えてくれ……」

口の端が歪んだ。

「どいつも、こいつも……!」

纏うオーラが瞬時に刺々しくなる。思わず怖気づいてしまいそう
だ。

白の柱にピシッとヒビが入る。それだけ殺気立っている証拠だ。

「お前はリンゼと同じ事をして、拳句の果てにはリンゼすらもそのままで……!」

「ファイ!」

守る様に水のドームがファイを覆う。

鋭い眼差しがメリッサに向けられた。思わず、メリッサはごくりと唾を呑んだ。

「……来る!」

「懐柔されたか!」

強烈な光がメリッサ目掛けて放たれる。横へ飛び、その光をかわした。

だが既に読まれていた。飛んだ方向目掛けて第二波が放たれていた。避ける事が出来ず、直撃する。

「きゃあああ!」

「メリッサ!」

倒れこむメリッサ。水のドームが弾けた。水のチカラが止まった

のだ。

「くそ！」

今度はクートが雷を天帝目掛けて落とす。

見事に直撃したが、天帝は全くダメージを受けていない。

と、天帝の姿が瞬時に消えた。

はっと背後を見たが、そのときには既に時遅し。

背中に衝撃。地面に叩きつけられ、クートは意識を失った。

「やはり敵わないか……！」

「くっ……！」

糸も簡単にメリツサとクートがやられてしまった。

やはり天帝のチカラは強すぎる。とても敵う相手ではない。

「ファイ……その魂にしかと刻み込め」

「伏せる、ファイ！」

無数のカマイタチが天帝の放った無数の光の矢を砕く。

瑠衣を抱いたままではまともに太刀打ち出来ない。しかし安全な場所など天帝の前にはありはしない。

地面に手を置き、炎を噴き上げる。が、天帝は空に飛び上がり、

火柱は届かない。

再び天帝の姿が消える。

「後ろか！」

振り向けば天帝がこちらに向かってくる所だった。

技を繰り出そうとファイが拳を突き出した。が、その拳を天帝が手首から掴む。

握る手の強さにファイは思わず表情を歪める。瑠衣を抱くもう片方の手の力が緩んだ、その一瞬。

彼女は天帝の手の元にすくい上げられた。

「瑠衣を返せ！」

すぐさま天帝に向かっていくファイ。

だが見えないバリアに弾き飛ばされ、その場にうずくまった。

「皆、よく聞くんがいい」

威厳ある声が響く。

「この世は無から一を創造する事は出来ぬ。出来るのは天を統べる我のみ。それ以外は等価交換で成り立っているのだ。願いを叶えたくばそれ相応の代価を差し出せ。そのために精霊達を戦わせ、代価として受け取るのだ。代価も払えぬ愚か者に何を褒美とすればいいのか！」

「等価交換……」

「……まあよい。リンゼを代価とし、お前の願いを叶えてやろう。そう言うなり天帝は手を瑠衣の胸へと入れた。精霊達が核を奪うために使う異次元への道。そして彼が掴もうとしているのは。瑠衣の魂そのものだった。

光溢れる球状をした魂を天帝は掴んだ。その途端、瑠衣が目を見開き、身を震わせた。

「まさか人間の魂と融合していたとはな……」

そのまま手を引き抜こうとする天帝。人は魂を一度失えば確実に死んでしまう。

「やめろ！」

ファイは叫んだ。

すると突如柔らかな風が吹いた。優しさに満ちた気が流れ出す。

「おやめ下さい、天帝」

いつの間にか天帝の前に跪くリンゼの姿があった。

「精神までまだ健在だったとはな」

ぴくりと眉をひそめ、手を止めた天帝にリンゼは更に語る。

「私の核は既に完全に取り込まれ、彼女の魂と一体化しています。無理に私の核を引き抜こうとすれば彼女の魂が壊れてしまう。なくなるのは私だけでいいはずです。私が代償となりましょう。ですから、残りの皆の未来まで奪わないで下さい！」

切実な彼女の訴えに精霊達は心打たれた。

それに呼応してクートの胸から一つの核が飛び出した。それがみるみる人の形を取り、マリアナが姿を現す。

「マリアナ！」

「リンゼ様……」

悟り、ふるふると首を振ったリンゼにマリアナはそれ以上言葉を紡ぐ事は出来なかった。

天帝がぎりつと奥歯を噛み締めた。

「どうしてだ……」

「え？」

「どうして、お前はいつも我の手からすり抜けていく？」

それは今までに見せた事のない、悔しさに満ちた顔だった。

「誰も気付きはしない……我とて、皆と同じく感情があり、自らの望みを抱いている事を」

精神のみのリンゼに触れられるはずがないのに、天帝は彼女の髪に触れた。

「我とて、誰かを愛する事があるという事を」

「天帝……」

続く言葉がなかった。

確かに今まで一度も考えた事がなかった。彼にも、人間や精霊同様の心を持つている事を。

強大なるチカラ故に下界から隔離され、仕える者や大精霊には一線引かれ、どれほど孤独だっただろうか。

これも、等価交換。偉大なるチカラを持つ代わりに感情や自由を奪われる事が定められた世の取引だと思いはじめののも無理はない。

本当に天帝を狂わせていたのは、その周りに居た存在だったのだ。

「私は お前さえ手に入れば！」

ぐぐぐつと瑠衣の胸から魂が取り出される。

「あああああつ！」

「あああああつ！」

二人の悲鳴が重なる。

自分の胸を押さえて崩れ落ちるリンゼ。

「リンゼを手に入れる代償は、お前だ！」

経験した事のない苦しさの中で、瑠衣は薄目で彼の姿を見つめた。自分の命の源が奪われてしまう。しかし身体には力が入らない。どうする事も出来ない。

彼はリンゼさえ手に入れば満足する。これ以上戦う事はない。なら、私はその代償に……

一筋だけ、涙が出た。

本当は死にたくない。でも、これで全てが終わられるのならば。どちらにしろ、手立てなど残されていない。

死を覚悟して、瑠衣は目を閉じた。

『天帝』

とても彼女の声とは思えない低い声。

次の瞬間、無数の鳶が天帝を襲い掛かっていた。

chapter 42 全てをにかけて

鳶は完全に天帝を呑みこんだ。

「うつ……！？」

どうも天帝のチカラをもつてしてもその鳶を解けないようだ。

掴まれていた瑠衣の魂が天帝の掌から逃れ、胸の奥へと引っ込む。それと一緒にリンゼの姿も瑠衣と重なる。

ブロンズヘアが緑の編みこみに変わる。開かれた目は瑠衣のものより濃い緑だ。

『どうしてもと言うのなら、私を捻じ伏せてからにしてください』
細められた目は完全に戦闘モードに入っている証だ。あまり怒らない人は怒らせると怖いと言う話は本当だとファイはこの状況でしみじみと思った。

軋む音と同時に天帝が鳶から抜け出す。一応ダメージはそれなりに与えたらしい。

「リンゼ……何故我と同等のチカラを……」

『そんな事を言っていていられる状況ですか？』

「！」

いつの間にやら一面花畑になっていた。

舞い散る花びらが風に乗ってこちらへと襲い掛かってくる。鋭く花びらは掠めた頬を傷つけていく。

彼女の強い思いがここまでのチカラを発揮しているのだ。

「くっ……！」

攻撃したくとも、自分の想い人に出来るはずがない。それを笠にリンゼは次々と攻撃を繰り返す。

流石の天帝もとうとう反撃を開始する。全ての花びらを結晶に閉じ込め、砕いた。

増産させようとしたリンゼだったが、花本体も結晶化され、呆気なく破壊されてしまった。

次に天帝を襲ったのは召還された人食い薔薇だった。

噛み付いてくる薔薇に天帝は危うく飲み込まれそうになったが、光の球を貫かせ、薔薇を見事撃沈させる。

激しい戦いに皆固唾を呑んだ。ここまで本気になって戦った事があつただろうか。彼女は護る一心で戦っている。

と、急にリンゼが膝をついた。

『ただの精神体である私にはきついわね……』

「強大なチカラはそれだけ自分の体力も奪ってゆく。あれは単なる突発的なチカラに過ぎない。だが、我は違う！」

何処からともなく鎖が現れ、彼女をがんじがらめに縛り付ける。

「さあ、先程の勢いは何処へ行った？」

『くっ……』

リンゼはそのまま目を伏せた。

勝ち誇り、歩み寄った天帝はリンゼの顎をとらえた。

次の瞬間晒し出された彼女の顔に天帝のみならず皆が驚いた。

彼女は泣いていた。否、先程と纏っているオーラが違う。あれは、瑠衣だ。

「私は……貴方の気持ちが分かる気がする……」

「なっ」

「愛する人の死を認めたくないって気持ちが。ましてや、存在の消滅なら尚更」

「分かったような事を……！」

更に縛り上げられても瑠衣は言葉を並べ続ける。

「だって、生まれ変わる事さえ出来なくなるんでしょう？どんなに探しても二度と、生まれ変わりの似た人ですら決して出会う事はなくなってしまうんだもの。それは、その人を心の支えにしている人にとっては、辛い事。もしそういう世界の理を知ったのならば、誰だってそう思うでしょう」

「黙れ」

「少なくとも、私はそう思う。自分の愛する人がそんな事になっ

たら……どんな手を使ってもそれを阻止したい！」

鎖にヒビが入る。

身体の自由を奪っていた鎖が砂となって散る。

『私は全てをかけて、貴方を倒します……』

強い光が辺りを包んだ。

ガードをしたものの、天帝でもその光のチカラを免れる事は出来なかった。

「そうか……」

チカラに吹き飛ばされながら天帝は理解した。このチカラは確かに強大だが、命を奪えるほどのチカラではない。

それが、彼女の 思いのチカラ。

彼女はいつだって誰かの死を望まなかった。それを阻止するため前回だって全力で戦ったのだ。ただし、相手も殺さないように。

前回は勝った。そして今回は負けた。彼女だけでない、恐らく人間の方の強い思いが彼女のチカラを増幅させたのだろう。

でも、これでいいのだろう。

思いは、チカラで捻じ伏せる事など出来ないのだと知ってしまったのだから。

思いは必ず相手に届く。でも、それに理想の形で応えてくれるかどうかは別物なのだ。

完全なる存在でも、手に入れられないモノがある。

あの状態でここまでのチカラを放てばどうなるか、もう想像はつく。

悲しいが、それも受け止めなければならぬのだ。

背中を打つ鈍い衝撃。そのまま光の中で天帝は意識を失った。

光が止んだ。

どうなったのか精霊達には分からなかった。あまりにも眩しくて何も見えなかったからだ。

仰向けに倒れて気を失っている天帝の姿があった。そしてそれを

見下ろす彼女の姿も。

「やった……！」

ファイが夢のように呟く。

皆がほっとしたのもつかの間だった。

ドサリ。

彼女もまた力尽きて倒れたのである。

全身から血の気が引いた。

「リンゼ！」

「瑠衣！」

もう今はどちらなのか分からない。

と、リンゼの姿が瑠衣の身体から抜け出した。しかしその精神体は前よりか透明度が増していた。

目の前に居る彼女がとても遠くに感じた。

『もうこれで、大丈夫でしょう……。あのチカラと共に思いも届いたはずですから。天帝もそこまで残酷なお方ではありませんし……』

「リンゼ、お前は本当に無茶しやがって」

『ええ。私の願いがこれで叶いますから……』

「え？」

『前にも言ったはずですよ。私は本来存在してはならない存在
「消えてしまうの！？リンゼ様！」』

やっぱり。

『貴方達がこれからも生き続けてくれれば、私はいいのです。それに、私が生きる事は瑠衣さんを苦しめる事になりますし……。私も、かなり苦しいのでね……』

「最後の最後まで人の事ばかりだな」

『いいえ、私の我儘ですから……。皆、今まで、さんざん、振り回して、ごめんなさい、ね……』

彼女から光の粒子が剥離していく。どんどん彼女の姿が薄れていく。

思わず引き止めそうな手を必死で制するファイ。既に別れは経験した。今度こそ離さないと決めていたのに、引き止めることが出来なくなってしまうた。

目を閉じる。深呼吸してゆっくり開く。

不思議と心が落ち着いていた。

「本当にさよなら、だ。あの日、本当に言えなかった別れの言葉で、お前を送ってやる……」

その優しい面持ちにリンゼは彼の成長を感じた。嬉しくて身体がぼかぼかしてきた。

『ありがとう……さよなら……』

彼女の姿　精神体はこの瞬間、光の粒子となって消滅した。

chapter 43 三つの願い

「うっ……」

瑠衣はほぼ天帝と同時期に目を覚ました。

右手はしっかりとファイが握っていた。だがそんな事よりも最初に目に入った姿にびっくりし、飛び起きた。

「ま、マリアナ!!」

「瑠衣、久しぶり、です！」

ファイの手を振りほどき、マリアナと熱い抱擁を交わす。

「おいこら、何か言う事ないのか……」

「誰が握っててって頼んだの？」

「……こおの減らず口が！」

「本当の事じゃない！」

隣でぎゃあぎゃああと騒がしくなり、天帝が頭を押さえて唸った。

とは言え、彼の表情は穏やかだった。確かにリンゼの最期の願いは届いたようだ。

ふいに気付いて瑠衣は尋ねた。

「リンゼは？」

その言葉に暫しの沈黙があってメリツサが答えた。

「消えちゃったよ……」

「え？」

自然と自分の胸に手を置いていた。

確かに何かが抜け落ちたかのようなだった。あつて当然だと思っていた何かが、確かに失われていた。

堪えきれず、涙が零れ落ちていた。悲しい気持ちがどんどん溢れてどうしようもなかった。

人間は 自分はどうしてこうも無力なのだろう。彼女の心の支えになる事すら出来なかった。最期にも立ち会えなかった。

「天帝と呼ばれる立場でありながら、自分を見失っていた事にリ

ンゼは気付かせてくれた。リンゼは、こんな天帝のために全てをかけてくれた。それが、誰かを想う気持ちなのだと思った。不甲斐ない……。許せとは言わぬ、だが慰めはさせて欲しい」

少し間を空けて天帝は言葉を続けた。

「三つ、願いを聞き届けよう。誰が願っても構わない。本当は個人個人にしたい所なのだが、生憎それほどチカラが残っていない」
「それで、いいのですよ！無理して、万が一、何かあれば、リンゼ様に、顔向け出来ません！」

他の皆の意見も同じだった。彼には生きてもらわなければならぬ。失うわけにはいかないのだ。どんな相手でも。

「一つ目はもう決まってるだろう？その子を元の世界へと帰す事」
クートが言った。

「二つ目は、勿論この戦いを制したファイの願いよね！」
メリッサがまくし立て、ファイは自らの願いを言った。

「俺は、人間になりたい。確かに殆どチカラを持たなくてひ弱な存在かも知れない。でも、人間は互いに愛し愛されている。最初はリンゼから、そして地上で瑠衣に出会ったことで、想い合いがどれ程素晴らしいものなのかを思い知ったんだ。そして、大切な人をその人と同じ立場から護りたいと強く思った」

「……容易い事だ。確かにこの一件で人間に対する認識が少し変わったと自分自身思う」

次々と精霊達は頷いた。

ずっと人間は人ならざる精霊のチカラを利用し、時には罪になる事まで働いた。現にそんな人間が消滅しているわけではない。でも、今回は幸いにも心温かい人間が精霊達の契約主となった。人間はそこまで腐ったものではないと知らしめられた。

いずれ、精霊と人間がこのような特別な境遇ではなく普通に共存出来る日が来ればどんなにいいだろう。

俺の覚悟は昔から変わっていない。ずっと側に居て、あいつを護ってやる！

未だ涙が止まらぬその顔で瑠衣は微笑み、ファイの胸の中に飛び込んだ。

皆は温かい目で彼らを見守っていた。明らかに離れがたい絆がそこには生まれていた。

「残り一つ、か……」

「ああ」

カシオの呟きにクートが返答し、少し唸ってからメリッサが発言した。

「私はもういいや」

「えっ!？」

舌をペロリと出してまんざらでもない顔をするメリッサに訝しげな目を向けるファイと瑠衣。

「だって、一番苦労したのはファイと瑠衣でしょ？特に私、頑張った功績とか上げてないし。それに……罰も受けなきゃならない身だしね」

そうまで言われると何も言えなくなる。

「それなら、オレだってそうさ。特に何もしてないし」

「俺もだ。ファイ、そして瑠衣には感謝している。残りの願いもお前達が叶えるがいいさ」

「そうです！瑠衣も、ファイも、私は、そんな二人を、尊敬してるの、です！ですから、二人がお願い事、して下さい！」

「……皆」

皆笑顔でこちらを見ていた。本心から、そう思ってくれているのだ。

前は譲り合いなんて、なかった。自分の事ばかり考え、行動し、戦っていた。彼らも、成長したものだ。これも、リンゼ……いや、彼女のおかげなのだろうな

天帝は様変わりした精霊の姿に感銘を受けていた。

「瑠衣、お前が言えよ」

「え？」

「俺は正直……その」

きつと後でからかわれてしまうだろう。でも、言っておかないとこんな素直な気持ちいつ言えるか分からない。

詰まり詰まりにファイはその言葉を口にした。

「お前と……一緒に、居られるだけで、いいから」

「いよ、男前！」

案の定メリツサがはやし立てた。

見ると、瑠衣は頬を赤らめてはにかんでいた。やばい、マジで可愛……。

と、ファイの胸から離れ、瑠衣は天帝と向き合った。意思の強い翡翠の目がこちらに向けられ、心臓がドクリと脈打つのを天帝は感じていた。

形ある姿ではないが、リンゼは確かに瑠衣の一部として息づいている。そう思った。

「三つ目の願い、言わせて貰います」

「何なりと言う方がいい」

自分の足元を見て、瑠衣は告げた。

「契約主達の記憶を、戻して下さい」

「！」

思いかげない言葉に天帝は目を見開いた。

「学んだ事があったのは、精霊達だけではありません。契約主となった人間の方も、確かに学び取れたモノがありました。それを忘れ去り、前と変わらぬ生活をする姿を見るのは辛いです。大切なモノを学んだのに、振り出しに戻り、心を閉ざしている様を見るのは……。責めて、ここに来る前の契約主達の記憶だけでも戻してもらえませんか？」

記憶が消される理由は知っている。

でも、彼らが最後に契約していた人間達ならそう悪用するはずもないだろう。

「……心得た。記憶は既に生まれ変わった契約主にも戻しておこ

う

「有難う御座います」

一礼し、精霊達と笑顔で話し始める彼女の姿を見守る天帝。
彼女が護ろうとしたモノが、こうして生きている。彼女自身は消えてなくなってしまうが、彼らが存在する事で彼女の思いは生きていく。

それが散り散りになっても。

別れの時間は近づいていた。

chapter 4 歩き出す者達(前書き)

これで最終回となります。

chapter 4 歩き出す者達

「瑠衣、私は、貴方に会えて、本当に、良かった、です」

「それは私もマリアナ」

「自分の、意思を、これからも、大事に、して、いきます」

抱き合い、別れの挨拶をする瑠衣とマリアナ。

「我が契約主にもよろしく頼む」

「分かったわ」

カシオは最後の最後まで主人思いなものだ。

「蓮斗にも言っておいて！人間になれたら絶対蓮斗のお嫁になるからって！それまでは浮気しちゃだめってね！」

「きつとそれは言わなくても大丈夫だと思うよ。そこまで蓮斗、軽い人じゃないと思うけど」

あれだけ強い絆があれば大丈夫だろう。それに、メリッサを怒らせたら怖い。

「まあせいぜい人間の生活に苦労しな」

「なんだよ！まるで俺が柔軟性がないみたいな言い方……！」

「違っているのか？」

遠まわしな挨拶に思わず瑠衣は吹き出した。

皆、精霊も契約主達も根は優しくかった。それぞれに個性があつて、いつの間にか居て当然だと思っていたけど、こうして別れる時が訪れている。別れは辛い。でも、不思議と思うほど寂しくはなかつた。離れていても、この絆は消えない。そう思えた。

「準備はいいか？」

頃合いを見計らって天帝が立ち上がる。

いざその時だと思つと胸の奥がズキツと痛んだ。

神殿の奥に巨大なため池があつた。天帝が手を上げる。透明な水に変化が起こつた。水色がかつた色が七色に変わる。異次元の道が開いたのだ。

「ここを下っていけば自動的に帰れる。行くがいい。それと、この存在は口外しないように」

「分かってます」

池の前に立ち、振り返る。

温かい目で見送ってくれている彼ら。マリアナは既に瞳が潤んでいる。

口の端を持ち上げ、満面の笑顔を作る。

「ばいばい！」

それが精一杯だった。

踵を返し、そのまま池に飛び込む。着水する直前、

「ばいばい！瑠衣！」

「さよならは言わないさ！」

答えが返って来た。

振り返りはせず、瑠衣は手をひらひら振った。

瑠衣の姿は完全に池の中へと消えていった。

すかさずファイが

「また何処かで！」

そう叫んで池に飛び込む。

やがて彼らの姿は七色の空間に消え去り、異空間への道が閉ざされ、池の水面はただただ水色帯びた透明に戻った。

込み上げてくる様々な思いを押し止め、皆天帝の前に跪いた。

だいぶチカラを使ったせいか、天帝の額にはうっすらと脂汗が滲んでいた。

それでもなお、自分にはするべき事があると言わんばかりに見据える。

「お前達にはまた新たな使命を与えようと思う」

周りの景色があまり変わらない中、落ちていく感覚だけがあった。ここではぐれてしまっただけは元も子もないと、二人は手を握っていた。自分は一人ではないのだと唯一確認できる手段でもあった。

何処まで落ちればいいんだろう？

果てのないように感じた。

「あつ……」

僅かにファイが身を震わせた。

「どうかしたの？」

「何だか、身体が……あつ……」

突如、彼の身体に変化が訪れた。特徴的だった長い耳が丸みを帯びて、人間の耳になる。髪と目の色も濃さが薄れる。

いつの間にか、足が地面についていた。バランスを崩しかけつつも瑠衣は地面を踏みしめた。

目の前には見慣れた景色が広がっていた。学校に通う道だ。そして、家の前の通りでもある。長い間離れて暮らしていたかのように懐かしかった。

とんつと同じくファイが着地した。

閉じていた目を開け、自分の姿を暫し眺める。

都合のいい事にカーブミラーがあったので、そこで確認する。変化した耳をみて思わずファイは喜びの歓声を上げた。

「やったあ！俺は、人間になれたんだ……！」

きつと髪や目の色が変わったのは人間らしさを上げるためだ。赤毛で黄色の目をした人間は少なくとも見た事がない。そのためにほぼ茶色と呼べる色の髪にし、目も琥珀のような色にしたのだ。

彼は確かに自分と同じ人間になったのだ。

「なあ、瑠衣」

「……」

「泣いているのか？全く本当に泣き虫だな、お前は」

「五月蠅い〜！」

ファイに出会ってから、色々あって泣く事が確かに多くなった。

悲しい事もあったけど、今は嬉しい気持ちでいっぱいだった。

失いかけて、初めて知ったこの気持ち。

出会った時には有り得ないと勝手に決め付けていた事。

今なら 否、今こそ、伝えなければ。

「ファイ」

ぼろぼろと涙を流しながら瑠衣は初めての告白に挑んだ。

「私は、ファイの事が好きだよ……。もう精霊じゃないから、別れなんて来ないよね？私、ファイが別れを切り出した時は、奈落の底に突き落とされたくらい悲しくて悲しくて仕方がなかった！でもそれで初めていつの間にか大切な存在であったのだと気が付いたの！だから、護ってくれなくてもいいから、側に居て欲しいの……！」

暫しの沈黙。

そつと指が頬を伝う涙に触れた。

「俺は、会った時からリンゼの姿と重ね見てお前に惹かれてた。

人に他人のイメージを重ねて思いを寄せる俺は最低だと思った。でも、瑠衣は瑠衣でリンゼとは違うのだと知った時、自分は本質的に瑠衣に惹かれていたのだと気付かされたんだ。この想いは届かずとも、お前だけは絶対護ると心に誓って戦ってきたけど」

ふいにファイの腕が瑠衣の身体を引き寄せた。そのまま抱きしめられる。

「もう何にも遠慮しない、しなくてもいいんだ。俺も、お前が好きだ。精霊としてのチカラはもう使えないけど、それでもお前は俺が一生護ってやる！」

「……うん」

二つの影が重なった。

時が過ぎていく。

変わらない日々。でもその中に幸せがある。

ある交差点ではウェービーの金髪の少女が向かいの通りに居る自

分の彼氏　メッシュをかけたお洒落な少年に手を振っていた。彼らは歩行者信号が青になった途端駆け出し、互いに抱きつく。どう見ても、お似合いのカップルだった。二人は都会の喧騒の中に仲良く消えていった。

公園では一人音楽プレーヤーを聞きながら颯爽と歩く少年が居た。その少年に、人懐っこい幼き少女が纏わり付く。既にこの世には居ない彼女の面影を感じながら、少年は少女に引張られるがまま公園の遊具広場へと行くのだった。

住宅街の一角にある豪邸の中で、久々の制服に身を包み、少年が学校へと登校しようとしていた。門の前には年頃が同じほどの使いが居た。不安な気持ちを押し退け、彼と共に集いの場へと向かう。そして……。

「おい、瑠衣！織音達も来たぞ！」

「ええっ！？ちよつと待って〜！」

ドタバタと階段を駆け下り、靴を履いて雪崩のように飛び出る。そこにはファイ　今は藍と名乗っている　と織音、マリアナ　彼女もまた、真里と名乗っている　が待ちくたびれていた。

「毎度毎度の事だけど、遅刻しちゃうから走るよ！」

「もう、瑠衣の馬鹿、です！」

「全く同感だ」

「そこまで言わなくなつていいじゃない！」
文句を言いつつも笑っている一向。

皆、幸せになれますように……

何処からか聞いた事のある、祈り声が聞こえた気がした。立ち止まり辺りを見回すが無論、彼女の姿はない。

「何してんだよ、急ぐぞ」

「うん」

その後ろ姿を銀髪を持ち主である天帝が瑠衣の家の屋根から見送る。見届けた後は幻のように掻き消えた。

大切な人が側に居て、当たり前のように一緒に居られる。

そんな日々が、ずっとずっと、続いていきますように。

< 完 >

あとがき

こんにちは。

連載作品としては三作目、読みきりを合わせると六作目となる今作品もとうとうファイナーレを迎え、ここに完結する事が出来ました。今までの作品以上に沢山の方に読んでいただく事が出来、作者としてはとても嬉しく思います。

応援して下さい下さった方々には厚く感謝しております。

さて、この作品は過去の連載作品よりかなり原稿量が増えていきます。せいぜい原稿用紙換算で二百前後が限界だったのに、今回は約二倍にまで増量してしまいました。

いい事なのやら悪い事なのやら。無駄な表現が増えたとも取れませんが、細かに描写をするよう心がけたのだとも取れます……ね。

出来るだけ丁寧に表現をしようとか心がけて執筆にはかかったのですが、分かりにくい部分も多々あったと思います。まだまだ修行が足りませんね。

各話はだいたい原稿用紙八ページ分あります。ちなみに、「ミラーツインズ」鏡の双子」は四、五程度でした。「黄昏の誓い」はこの作品同様なのですが、話が短すぎたもので……。

今まで以上に話も勿論の事、キャラクターにこだわりました。

出来るだけ見た目だけでなく、中身を滲み出そうと、リアルにありそうな人達を作ってみました。

瑠衣とファイは普通のパターンを当て嵌めてますね。瑠衣は天然でありつつ、何処にも居そうな普通の女の子。ファイはツンデレなやはり居そうな男の子。織音はムードメーカーでしっかり者な感じ。マリアナはただどしい感じが出したかったです。恥ずかしがり屋さんですすぐ誰かに使役されてしまうと言う何ともある意味可哀想なポジションですけど。悠の場合は自分の理想な人をイメージして具現化しただけです。あんな優しい人、私の周りには居ません

から。カシオはもう表面クールで信念を貫くという渋どころのキャラクターになってしまいました。あそこまで絡みづらい人になるとは思わなかったです……。蓮斗はとにかく周りとはズレた人を書きかけただけです。それに良く似た人々が何故か私の周りには多かったです。メリッサも蓮斗同様キャピキャピの子が周りに多いので。ただし恋愛になると可愛かったりするんですよ、そういう人ほど。沙羅はもう悲劇のヒロインとして演じてもらいました。クートはカシオに似ていたりします。一度何かを思い込むとなかなか周りが見えなくなるところが。ただ、違う事と言えば、カシオには恋愛に対する興味が無いんですよ……。

長つたらしく基礎キャラクターの事をだらだらと書いてしまいましたね。

脇役については特に設定をしつかり作ったわけではないんです。ただし、リンゼは瑠衣とよく似た感じにするためにそれなりの設定はしました。天帝は本当に最後しか出てこないのもうその場作りでしたが。

友達にも宣伝するために、キャラクター達を絵にしてアピールしたりしてみました。近いうちに本家サイトに記念イラストを載せる予定ですので、気が向いた方はプロフィールからどうぞ。

絵を何度も何度も描いていたせいか、キャラクターに対する愛着度はこの作品がナンバーワンです。ここで終わってしまうのが作者である私自身残念です。もっと彼らと一緒に過ごして居たかったですね。

しかし別れはつきもの。笑顔でお別れをしましょう。

今の所、これの番外編を書く予定はありません。それとここでお知らせするのも何なのですが、「黄昏の誓い」のもう一編の番外編ですが、アイデアがまとまらないので、そこから先は書かない事にします。楽しみにして下さった方、申し訳ありません。

新たな小説はまた書き始めていく予定です。ただ、読みきりか連載にするのかはまだ未定です。

改めて御礼を。

スピリチュアル・ストーリーを最後まで読んでいただき、有難う御座いました。

彼らに愛着を持っていただければ幸いです。

以上をあとがきとかえさせていただきます。本当に、応援有難う御座いました。

平成21年5月

天宮 瑞姫

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2817f/>

スピリチュアル・ストーリー

2010年10月9日00時39分発行